

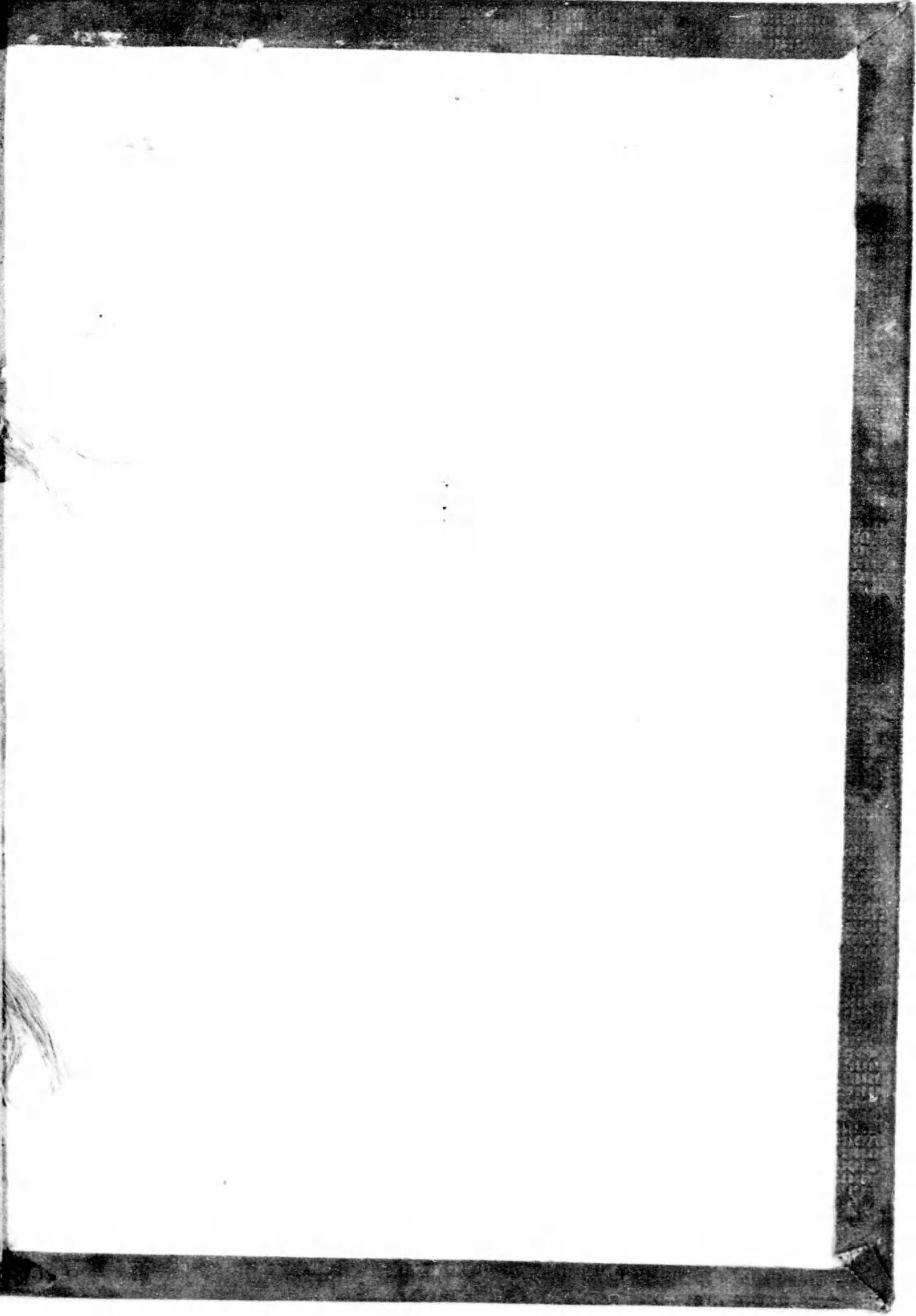
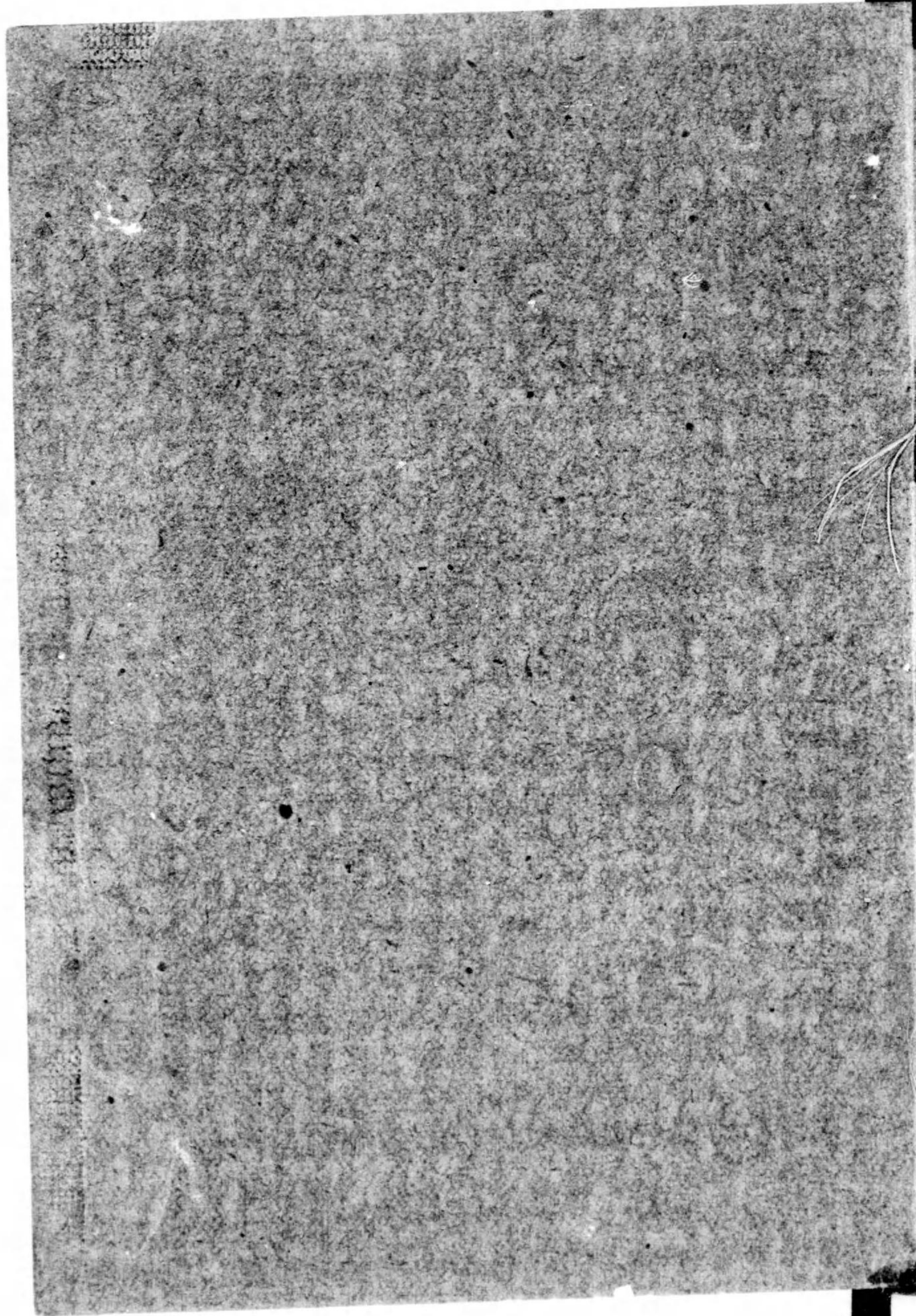
滑 稽 文 庫

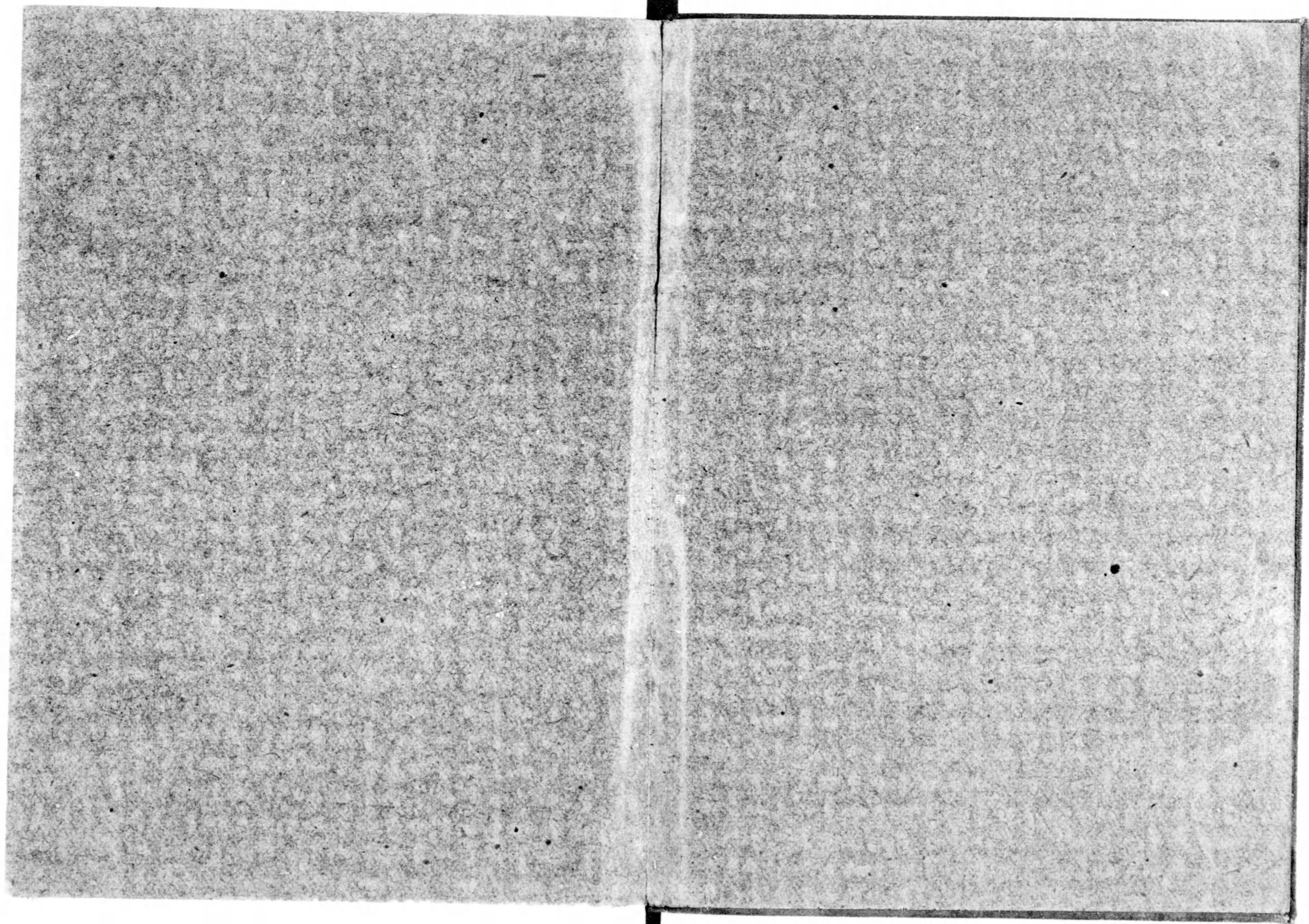
東 海 道
膝栗毛



始







特100,
54



道東
中海
膝

栗

毛



序

鬼門きもん關外くわんがい莫道ぼくだう遠とほ五十三驛いそくじゅうさん是皇州こゝはと云いへる山谷さんこくが
 詩しに據よりて東海道とうかいだうを五十三次いそくじゅうさんと定めさだめらる由よしを聞きけり、亦また箱根八里はこね
 の長持ながもち唄うたには猛たけき宰領さいりやうの心こゝろを和やわらげ、竹たけに雀すずめの馬士まこ唄うたには鬼おに
 殺ころしを爛かんせしむ、是こゝれ其歌そのうたの德利酒とくりざけ、吞のめや謠うたへの旅衣たびころも、都みやこを指さ
 て行きがけの駄賃帳だちんちやうを繰かへり返し筆ふでの建場たてはに雲駕くもかの息杖いきづえをして、ゑん
 やらやツと書かき綴つづりたる東海道とうかいだう五十三次いそくじゅうさんの紀行きぎやうに無洒落ぶしゃれと、方言むだの
 二割増わりまし、重荷おもひに故事こじつ付け夷曲歌たわれうた、其それが中なかにも唯ただだ一夜やすし鮓しの飯盛めしもり押し
 かけて商あきなふ戀こひの箱枕はこまくら、其その概畧あらましを宿帳やどちやうの帖とちものと爲なしたるは空あき



尻じりの殻から、無體むたいなるホンの嘶はなしの間屋場まひやばもどき、ハイ頼たのみますくこと此
 の本ほんの鹿島立かしまたちに序じよする事然ごとしかり

東都 十返舎一九識

東海道中膝栗毛

十返舎一九著

◎日本橋より品川まで

彌次郎兵衛と喜多八江戸を出發す

富貴自在冥加あれとや

營み立てし門の松風

茲に通ふ春の日の麗かさ

實にや大道は髪の如しと毛筋程も動がぬ御代の例しには鳥が鳴く吾妻錦繪に

鎧武者の美名を残し弓も木太刀も額にして千早振る神の廣前に納まれる豊

津國の偉しは堯舜の古へ延喜の昔も目前見る心地になん、いざや

此時國々の名山勝地をも巡見して月代にゆる聖代の御徳を薬



鐘頭くわんめたまの茶呑ちやのみ話はなしに貯たくはへん者ものをと玉串たまぐしげふたり二人の友達ともだち誘いざなひ連れて山やま
 鳥の尾どりのおの長旅ながたびなれば躰ほぞの邊あたりに打ち替うかへの金かねを温あため彼の彌次郎兵衛やじろべゑと云いふ野
 良久良漢らくらもの、食客いそらうの北八きたはち諸共もろとも朽木草鞋くちくわらじの足許あしもと軽く千里膏りかうの蓄たくはへは何貝なんがひと
 なく蛤はまぐりの剥身むきみ絞しぼりに對つひの浴衣ゆかたを吹ふき送おくる神風かみかぜや伊勢參宮いせさんぐうより足曳あしびきの大和廻やまとめぐ
 りして花はなの都みやこに梅うめの浪華なにはへと心こころさして出行いでゆく程ほどに早くも高輪たかなはの町まちへ來掛きか
 り川柳せんりうてん點まへくの前句おもを思いひ出だせば

高輪たかなわへ來きて忘わすれたることばかり

と詠よみたれば我々われわれは何なに一つ心こころ掛がりの苦くも獨身ひとりの氣散きさんじは鼠ねづみの店賃たなちん出だす
 も費つひと身上しんしやう残のこらず風呂敷包ふろしきづつみと爲なしたるも心こころ易やすし去さり乍なら旦那寺だんなでらの佛ぶつ
 餉しやうぶくろ袋わねを和やわらかに詰つめたれば外ほかに百銅地腹ひゃくどうぢはらを切きつて往來わうらいの切手きつてを貰もらひ家主おほや
 へ古借こしやくすを濟かました代かり御關所おせきしよの手形てがたを受け取とる踏ふる物ものは見倒みたふし屋やへ授さづけて金かね

に代かへ雜物がらくたは店請たなうけに負しよはせて禮れいを受け清菜つげなの重石おもしと炭すみかき庖丁はうちやうは隣家ごなりへ殘のこ
 し千裂ちぢぎれたれ共繩ともなはすだれと油壺あぶらつぼは向むかふへ讓ゆづりて何なに一つ取殘とりしたる物ものも無なく
 未まだも心懸こころがりは酒屋さかやと米屋こめやの拂はらひをせず出だし抜ぬけにしたれば嗚さぞや恨うらみん氣きの
 毒どくながらも是これも古ふるき歌うたに云いへり

先の世さきよに騙かたりを爲なすか今貸いまかすか

何いづれ報はくいの有ありと思おもへば

と笑わらひながら彌次郎兵衛やじろべゑ又またた狂詩きやうしを口くちずさむ

雖い非ひ亡命むじやうめい可こ奈何な借か金かね不ふ報擲はく尻しつ尻尻過過

夫居本貫掛乞衆おとこ將まさ是川向成はなむか三千戈さんせんか

◎品川しながはより川崎かはさきへ一里半いちりはん

二人ふたりは程ほどなく品川しながはへ着つく其時そのとき彌次郎兵衛やじろべゑの句くに

海邊をばなどしな川と云ふやらん

と海と川とを難じけるに北八は直ぐに下の匂を付けて

さればさみづのあるに任かせて

と洒落ながら互ひに面白く歩むともなしに鈴ヶ森に至れば彌次郎兵衛の歌に

恐ろしや罪ある人の首玉に

付けたる名なれ鈴ヶ森とは

此の大森と云ふ所は麥わら細工の名物の土地にて家毎に之を商ふ

飯に焚く麥わら細工買ひ玉へ

是は子供をすかし尻の爲め

◎川崎より神奈川へ二里半

夫より六郷の渡を越て萬年屋にて支度せんと腰を掛ける萬年屋の女女お

早う御座へやす彌次「二膳頼みます 北八」コウ彌次さん見なせへ今の女の

尻は去年迄は柳で居たつけが最白に成つた何でも杵に小突れると見える

而して不思議道中の茶屋では床の間に日枯びた花を活て置くの彼の掛物みれ

え何だ彌「アイヤ鯉の漉上りよ 北」俺あ又鮓が素麵を食ふのかと思つた

彌「コウ閑話を云はずと早く喰つしやい汁がさめらア 北」オヤ何時の間に持

て来た」ト茶を掛けさらくと彌「最飯櫃が零落した 北」又先へ往つて甘ハ

物をして遣う」ト其より二人は錢を拂ひ此所を立出行く向うよりお大名の

行列先拂の男六十位の爺一人は十四五のやつこ何れも宿の人足

なり先拂「下アにく冠り物を取りませうぞ 北」かけ落者は下座をしねえで

も宜いと見える彌「なぜ……… 北」ハテ冠り物は通りませうぞと云ふは

先拂「馬士馬の口を取りませうぞ 北」馬の口も取りはづしが出来るかのハ、

、先拂『後の人脊が高いぞ彌』己等が事が高い筈だ愛宕の坂で九紋龍と肩を並べた男だ北『洒落なさんな頼だ目に遇ふぜ彌』アレ見や何れも好奴だ巻端よりで豪勢に尻が並んだは何んの事は無い葎町新道の土川ぼしと云ふ物だ北『オヤ、弓を荷いで居る人の笠を見れえ頭も延引して居らア……彌』そして彼の羽織の長さは暖簾から金玉が覗いて居る北『殿様は好男だ女中衆が擦り付けるだらう彌』篋棒め種々な事に世話を焼くは貴所方だと云つて遣つたらそんな事をして堪る者かえ北『何故其れだとして其れお道具を見れえ彼の通りに立詰めだワハ、サアお駕籠が通つたから往う』ト立て行過る宿場端れに馬士『親方歸り馬だが乗てくんなさい彌』安くば乗るべい馬士『酒手で行う富士場貳百で乗てくんなさい』ト馬の直段も相談が出来て彌次郎も北八も此所より馬に乗ると二匹並んで引出す鈴の音しやん

くく馬ヒンくく向うより来る馬士馬士『へイ畜生め早いな』こちらの馬士馬士『糞を食へ』先の馬士馬士『己尻でもしやぶれ』ト是が手合の行違ひの言葉だがひに悪口を言つて義理を立る彌次を乗せたる馬士馬士『コレ伊賀よ昨日手前の呑で居た野郎はアリヤ上の宿の房州だな』北八の馬士………○『先度の晩になア彼の房州の妻に馬の糞を喰せてのう』と話の中に神奈川へ着く二人は馬を下りて行く程に神奈川壑に来る

◎神奈川より程ヶ谷へ一里九丁

爰は片側に茶屋軒を並べ何れも座敷二階欄干付の廊下棧橋など渡して浪打ぎわの景色至つて好く茶屋の女門に立つて女『お休みなさいやアせ温かい冷飯も御座いあアす煮立の肴の冷めたのも御座へやす蕎麥の太いのを食りやせ餛飩の大きなのも御座へやすお休みなさいやアせ』二人は此にて一ば

い氣を付けんと茶屋へ這入り彌「北八見さつし美しい者だ北「ハ、ア如何様好娘だ時に何がある」ト酒肴を命す娘「是はお待違様で御座へやした彌「お前の焼た鱒なら味からう」ト娘フント笑ひ乍ら表の方を向て呼びながら娘「お休みなさいやアせ奥が廣う御座へやす北「奥が廣い筈安房上總迄續いて居る彌「北八見さつし此肴は少と御座つた目元だ」ト打通し見て

ござつたと見ゆる目元のお肴は

扱は娘が焼きくさつたか

と一首の狂歌を北八聞て同じく

味さうに見ゆる娘に油断すな

奴が焼たる鱒の悪さに

◎程ヶ谷より戸塚へ二里九丁

りやうがはたびすめおどりだおをんなかほあだかめんかぶ
 兩側より旅雀の餌鳥に出して置く留女の顔は恰も面を被りたる如く
 まつしろぬたいたいづあじがすりこんまへたれしめ
 眞白に塗り立て何れも井の字緋の紺の前垂を締たるは扱こそ古へ爰は帷子
 の宿と云ひたる所となん聞えし旅人に乗せたる馬士忘け聲に……
 馬士「富士の人穴馬でも這入る何故にお方にや穴かない、ドウドウ留女」
 馬士お泊りかな馬士「イヤ旦那は武藏屋だがお前を見たらソレ此畜生奴が
 泊りながらアソレ」馬ヒ、ヒン／＼ト行過ぎるト又後より旅人二三人
 留女は留女「もしお泊りかえ」ト引捕へ引寄る旅人「アレ手が抜らア女」
 手は抜ても宜う御座へます御泊りなさいませ旅人「馬鹿云へ手が無なつちや
 お飯が食れねえ女「お飯が食られねえ方がお泊申して猶は勝手さ旅人「エ
 、放さぬか」と漸々に振切つて行くと又後より來る旅僧女「お宿りかえ」旅

僧女の顔を見て 旅僧「否最少と先へ参らう」ト又來る 田舎道志女「お宿りなさいませ 田舎」旅籠さい安か宿りますべい 女「二百づゝ 田舎」否其様は出し申さない代り湯は温くても宜う御座る平は替て食事ア御座らないが飯と汁は僅た六七杯づゝも喰やア其で宜うムる 女「そんなら 外へお宿りなさい 田舎」ハア往きますべい』ト行過ぎる 彌次郎此體を見て始終興に入り彌次郎又こち付歌

お泊りはよい程ヶ谷と留女

戸塚前では放さけりけり

と打笑ひ過ぎ行く程に品野坂と云ふ所に至る是れなん武州の境なりと聞けば

玉串ふたつに別る 國境

所替れば品野坂あり

既に早日も西の山の端に近付ければ戸塚の驛になん宿るべしと急ぎ行く道すがら彌「コレ北八待つせえ話しが有ア何でも道中は飯盛が強めてうるせいから此に謀がある已等は爺なり主は二十代と云ふ者だから親子と謂ても宜い位だに依つて是れから泊りくゝで何でも親子の分に仕様ぢやれいか 北「オ、是れは妙だ成程其れぢや強めれえて宜いそんなら親子でお父さん 彌「そうさ貴様は諸事を息子氣取だが承知の助が 北「宜しく、そう謂ては又好いたばでも有つたら此息子を出抜くめえよ 彌「何馬鹿を言つしやいオヤ最う戸塚だ」

◎戸塚より藤澤へ二里

彌「笹屋に仕様が 北「お父さんや 彌「何んだ 北「此所ぢや根つからお宿りな

せえと云つて引張れえの彌「ほんに其苦だ爰は何方が御泊りと見えて皆宿屋に札が張つてある北「コウ向ふの家が粹だぜ彌「コレ姉さん泊めて呉れる氣は無いか女「イエ今晩はお泊りで合宿はなりません……彌「南無三左様だらう」ト段々宿を尋ねれども皆客にて泊めぬ故大に困り歩行つ、

泊めざるは宿を疝氣と知られたり

大金玉の名ある戸塚に

其れより宿端れに至るに漸く旅屋の合宿無き體に見ゆるに彌「何と私等を泊めてくんませえ亭主「お二人お泊まりなされませ當宿は宿屋は皆閉りましたが私方計り當りませぬ彌「此な綺麗な家を何故當てれえの……亭主「私方は新宅で御座ります其れお鍋お湯は如何だ北「コウ彌次さんぢやれえ父さんお前草鞋も一所にして置う彌「オ、そりて自己が脚絆も洗つて

置きや北「ナニ脚絆をコレ姉さんお茶を女「へい直にお湯に召ませ彌「コウ彼の女の頬ア見たか何の事はれえ踏返の馬蹄石と言ふもんだ時に湯に北「イヤ呑んでから這入らう彌「手前も意地醜いものだ這入つて來やな」此内北八湯に入る亭主「是れは何も御座りませぬが一つ召上りませ彌「イヤ亭主さん是れは迷惑だ亭主「イエ時に斯様で御座ります私方は今迄商賣を致して居りましたが今度旅屋になりました今日が店開きで御座ります貴所方は始めてのお客故其れで祝つて一つ差上げたので別に御酒代を頂くので御座いませぬ御心安く召上つて被下りませ彌「イヤ夫は先お目出度い而し御馳走に成つては近頃氣の毒だ亭主「何サ御遠慮なう今にお吸物も出來ます彌「イヤ最お介意なざるな亭主「ハイ御ゆるりと」ト云つて出行く北八湯より出て來て北「様子は残らずあれにて聞たが只とは難有てエ彌「コレ洒落

す^もと最^ど一度湯へ這入^{はい}つてきや其内に皆己^{みなおれ}が呑^のんで仕舞^{しま}うわ北^{きた}『そうだそうと思^{おも}つて湯に入^いつても洗^{あら}ふ事が出来^{でき}ぬオヤ足^{あし}は未^あ土^まだらけのま^はいサア始^{はじ}めれえ
 彌^{やい}『最^もとつくに初^{はじ}めて居^ゐらドレも一つ直^なしてから差^さう北^{きた}『イヤ己^{おいら}等は是^{これ}だ』
 ト茶碗^{ちやわん}に注^ついで突^{いき}然^{なり}にぐつとやらかしつゝ北^{きた}『ア、好^い酒^{さけ}だ時^{とき}にハ、ア蒲^{かま}鉾^ぼも白^{しろ}
 板^{いた}だ鮫^{さめ}ちやあんめえ漬^{つけ}生姜^{しやうが}に車^{くるま}海^{まゐ}老^{らび}ヤボちやれえコウ父^{ちつ}さん此^{この}紫^し蘇^その實^みが
 一^は番^{ばん}甘^{うめ}へお前^{めい}は是^こればつかり食^くひなせえ彌^{やい}『馬^ば鹿^{かい}云^いへ其^そりや後^あへ残^{のこ}るに極^{きま}つ
 たもんだ、時^{とき}に最^もう吸^す物^{もの}が出^でる者^{もの}だ北^{きた}『待^まちなよ』ト戸^まの間^{あひだ}から勝^かつて
 の方^{はう}をのぞき北^{きた}『でるく今^{いま}盛^{よそ}つて居^ゐるオヤ南^な無^む三^{さん}神^{かみ}様^{さま}へ上^あげたのだイヤ來^く
 るぞく』下^げ女^{ぢよ}は吸^す物^{もの}を持^もつて出^いて來^{きた}り御^お銚^{てうし}子^しを替^かへませうと出^い行くを北^{きた}八^は
 吸^す物^{もの}の蓋^{ふた}を取^とり北^{きた}『オヤ赤^{あか}味^み噌^そだア洒^し落^れはよもや種^{たね}味^み噌^そちやあんめえ時^{とき}に銚^{てう}
 子^しは如^{どう}何^{どう}だ彌^{やい}『せわしれえ只^{ただ}今^{いま}持^もつて行^いつたは北^{きた}『最^もう來^きるぞうな物^{もの}だ』ト此^{この}

内に酒^{さけ}も來^くる北^{きた}『コウ姉^{ねえ}さん少^{ちつ}とお合^あ合^あをしてくん女^{むすめ}『妾^{わがし}は一向^{かうた}食^たべませぬ
 北^{きた}『其^{その}んな事^{こと}云^いはずに今^{こん}夜^やお前^{めい}と是^これが堅^{かた}め^めの盃^{さかづき}だノウ父^{ちつ}さん彌^{やい}『悴^{せがれ}奴^めは
 最^もう酔^{よつ}たぞうな北^{きた}『ナニ酔^{よつ}たも氣^きが強^{つよ}い彼の親^{おやぢ}仁^にの頬^{つら}はふハ、ハ、』ト卷^{まき}舌^{じた}
 にやれば女^{をんな}驚^{おどろ}き盃^{さかづき}をほして彌^{やい}次^じ郎^{らう}方^{かた}へさし北^{きた}『エ、爺^{おやぢ}の畜^{ちく}生^{しやう}奴^め思^{おも}
 差^さしに預^{あづ}かつたなコウ女^{むすめ}中^{ちゆう}後^ごに頼^{たの}みます』と寄^{より}掛^かるに女^{をんな}は逃^にげ出^だす彌^{やい}『
 コウ貴^き様^{さま}は若^{わか}かを男^{をとこ}だ女^{をんな}の前^{まへ}であんな事^{こと}云^いふなえ北^{きた}『何^{なに}故^げ謂^いつちや悪^{わる}いか
 悪^{わる}か云^いふめえ己^{おいら}等^ら彼^{かれ}がおかしな目^め付^{つき}をするので親^{おや}子^この縁^{えん}か切^きり度^たくなつた』
 なま中^{なか}親^{おや}子^こで居^ゐると旅^{やど}屋^やの女^{むすめ}中^{ちゆう}何^{なに}を言^いつても取^{とり}上^{あげ}れば今^{いま}更^{さら}獨^{ひとり}寝^ねの枕^{まくら}さ
 びしく打^{うち}臥^{ふし}けるが夜^よも更^ふけ行^ゆくまに勝^かつて静^{しづ}まり山^{やま}の神^{かみ}の小^こ言^ご云^いふ聲^{こゑ}のみ
 聞^きえて此^{この}二人^{ふたり}寢^ねもやらす着^きたる夜^よ着^ぎのあかつき掛^かけて千^{ぢゆく}手^{わん}觀^{おん}音^{りしやう}の利^り生^{しやう}新^{あらた}
 にかゆき所^{ところ}へ襖^{ふすま}ある風^{かぜ}の手^ての届^{とど}くうるさくほる酔^よの酒^{さけ}も醒^{さめ}て今^{いま}思^{おも}ひ廻^{めぐ}ら

せば獨り寢におほちの廻らざるも飯盛の杓子あたり悪き故にや假の親子の遠慮ありしは却つて鳥目の徳付たりとて『一筋に親子と思ふ女より只二すじの錢もうけせり』斯く口づさみて打笑ひつゝ傾けし箱枕も耳の根に痛くも響く夜明の鐘早表には助郷馬の嘶く聲ヒン／＼馬の尻のおとアウアウ／＼此時向うよりちよんがり坊主破れ扇子を打ちながら坊『ヒヤア御繁昌の旦那方一文遣て下しやいませ北』突なく坊『とこ／＼／＼よいとこな北』コレつくなくと云ふに錢はねえは坊『何無い事が御座りやし道中なさるお方には無つて叶はぬ錢と金未も杖笠蓑桐油足一本で歩行れぬ其上越中禪の掛替も無つてならぬ其の代り古い奴は手拭に御遣ひなさるがお徳川彌』エ、八釜敷其れ遣らう』一文出す坊『コリヤ四文錢とは有難う彌』ヤ四文錢か南無三寶三文釣を出せ北』いめえましい』

◎藤澤より平塚へ三里半

藤澤に着きければ入口なる茶屋に休む北『婆さん團子は冷てへか少と暖ためてくんな婆』ドレ焼直して進ませますべし』此時六十位の呂敷を負つた爺此店に入る爺『モシ少と物を問うますべし江の島へは如何行きます彌』お前江の島へ行きなさるか其れなら是を眞直に行つて遊行様のお寺の前に橋があるから其所を行當ると石の地藏様がありやす北』アノ地藏様は瘡の願がきくそうだ己等所のへた茄子もアレテ全治た彌』ほんに瘡と云や新道の金箔屋の種吉爺江の島へ行くに其んな所がありますか北』其りや江戸の町だつて爺』エ、此の衆はお江戸の事は聞き申さない此人達は馬鹿／＼しいドレ先へ行て聞きますべし』此時茶屋の老婆團子を持って出る彌』是は黒い團子だ』と云ひながら手に取り見れば火の付きあるに其のまゝ北八へ出し彌』

コレ手前こげた奴が宜からう北『ドレ／＼』ト口先へあてがい北『ア、ツ、
 、婆さんアツ、頓だ目に合つたコレ團子に火が喰付てア、びり／＼する
 彌『ハ、手前熱いのが宜らうと思つて火の附たのを遣つたヲ北『エ、い
 めへましいツ』

◎平塚より大磯へ二十七丁

川の名を問へばわたしとばかりにて

入が馬入の人のあいさつ

此川は甲斐の猿橋より流れ落るよしやがて向に渡りたどり行く程に此に白
 旗村と云へるは其昔し義經の首此所に飛び來りたるを祝ひ籠て白旗宮とい
 へる今に在りと聞いて彌次郎兵衛
 首ばかりとんだ話しの残りけん

ほんの事ははしらはたのみや

其れより大磯に至り虎が石を見て北八よむ

此さとの虎は藪にも剛のもの

おもしろの石となりし貞節

彌次郎兵衛も直ちに

去りながら石になるとは無分別

ひとつ蓮の上へのられぬ

斯く打興じて大磯の町を打過ぐ

◎大磯より小田原へ四里八丁

鳴立澤に至り文覺上人が刀作と聞へし西行の像にむかつて
 われ／＼も天窓を破りて歌よまん

刀つくりなる御影おがみて

春の日の長欠びの願の掛金もはづる、計り目を擦りながら北「ア、退屈した
 ナント彌次さん道々謎をかけようお前解るか彌「宜かる掛けやれ北「外は
 白壁中はとん／＼何に彌「籠棒め其な古い事より自己が掛けようかコレ手
 前と己と連立て行くと掛けてサア何と解く北「ソリヤ知つ事伊勢へ参ると解
 く彌「馬鹿め是を馬二匹と解く北「なぜ彌「どう／＼だから北「ハ、ハ、其
 んなら己等二人が國所何に彌「神田の八丁堀家主與次郎兵衛店と解く
 北「エ、馬鹿／＼しい是を豚が二匹犬子か十疋と解く彌「其の心は北「ぶ
 た二ながらきやん十もの彌「置きやがれコレ今度は六ヶ敷奴を云ふ其の代り
 手前解けれへと酒を買せるが宜いか北「解いたらお前買か彌「知た事よ北「
 此奴ア面白い彌「少と長いビマア斯だ己等二人が國所と掛けて是を豚が二

匹犬ころが十匹と解く其の心はぶた二ながらきやんとをものサア是れ何に
 北「ハ、ハ、其んな謎が有る者か彌「籠棒め有りやこそ掛ける解いて見るへ
 北「何して其れが知れる者だ彌「知れざア言つて聞かせよう是れを色男が
 自分の帯を取つて女にも帯を取らせると解く北「中々六ヶ敷其の心は
 彌「ハテ解いた上で又解かせるから何と奇妙かサア／＼酒を買へ／＼北「侍
 なよ意趣返しをやらかそう己がのちト長いマア一寸して斯うだ自己二人が
 國所と掛けて是を豚が二匹犬ころ十匹と解く其の心はぶた二ながらきや
 んとをもの是れを又色男が自分の帯を取つて女にも帯を取らせると解く
 また其の心は解いた上で又解かせるからサア是れ何に彌「ハ、ハ、途方も無
 へ長へ謎だ北「何だ彌次さん知れねへの是れを衣桁の禪と解きやす彌「其
 の心は何だ……北「解いてはかけ／＼二人ハ、ハ、と笑ひつゝ歩む程

に早や酒匂川にさし掛りければ

われくは二人川越ふたりにて

酒匂のかはにへてようたり

この川を越ゆれば小田原に入る宿引道に待受て宿引貴所はお泊でム
いますか彌貴様小田原か己等小清水か白子屋に泊る積りだ……宿引今
晩は兩家ともお泊が御座いますから何卒私方へお泊被下ませ彌
貴様の所は貴麗か宿引左様で御座ります此間建直しました新宅で御
座ります彌座敷は幾間ある宿引ハイ十疊と八疊と店が六疊で御座ります
彌据風呂は幾個ある宿引お上下と二ツ、四ツ御座ります彌貴様御亭主
か宿引左様でムいます彌宗旨は何んだ……北コッ彌次さんお前飛だ
事を云ふ彌ハ、ツイ口がすべつたハ」ト打連て行程に小田原の宿

つく。

◎小田原より箱根へ四里八丁

女「お泊りなさい」と呼立る聲に彌次

梅清の名物とてやとめ女

口をすくして旅人をよぶ

この宿の名物いろいろみせ近くなりて北「チャ此所の家は屋根には大分凸
凹のある内だ彌是が名物のうい樓だ北「一個買て見よう味へかの彌味へ
だんか願が落らア北「チャ餅かと思つたら薬店だな彌次は、

いろいろを餅かと甘く欺されて

こは薬じや苦い顔する

やがて！へ着く亭主先立て入亭主「サアお泊りだよおさんくお湯を取つ

て上る彌あ時ときに腹はらが北山きたやまだ今飯いまめしを焚たく様子やうすだ埒らちのあかれへ……北きたコレ彌次やじさんおいら己おれよりお前めへ文盲もんもつな者ものだ彌やナゼ北きた飯めしを焚たくたら粥かゆに成なつて仕舞しまふわな米こめを焚たくと云いば宜よに彌や其そりや人ひとの事ことを云いふ自己うねが何なんにも知しられへな湯ゆが沸わいたら熱あつくつて這はい入いれるか其それも水みづが沸わいたら這はい入いりやしやうとぬかし居をれ女をモシお湯ゆが沸わきましたお台めしなさいませ彌や「ナイ水みづが沸わたかドレ這はい入いりやせう」手てぬぐひを下げ風呂ふうりょに行ゆ見みればやどの亭主ていしゆ上方かみ者の見みへて風呂ふうりょ桶けは上方かみに流は行やる玉たま右衛門えもん風呂ふうりょと云いふ風呂ふうりょなり彌次やじ郎らう此風呂このふうりょの勝手かたを知らず底そこの浮うて居ゐるを蓋ふたと思おもひ何なに心こころなく取とつて除ぞけすつと片足かたあし入れし所ところ釜かまが直すにある故ゆゑ大おほにやけどして膽きもをつぶし彌や「アツ此奴こいつは頓どんだ据風呂すゑふうりょ」色々いろく考かんがへ是これは何どうして這はい入いるのだと聞きくも馬鹿ばかくしく外そとで洗あらひながら其所そこを見みれば雪隠せついんの脇わきに下駄げたがあるこいつおも黒くろへと彼かの下駄げたを履はきて湯ゆの中なかへ這はい入いり洗あらつて居ゐると北八きたま待兼ちかね

て湯殿ゆどのを見みればゆふくと淨瑠璃じやうるり彌や「お半はん涙なみだの露つゆちり程ほども北きた「エ、飽うれらア道理だうりで長湯ながゆだと思おもつた宜よ加減かげん上あられへか彌や「コレ少ちつと己おれが手てをいぢつて見みて呉くれ北きた「何なに彌や「モウゆだつたかしらん北きた「馬鹿ばかくしい」この内うち彌次やじ郎らう湯殿ゆどのより上あり彼かの下駄げたをかきして彌や「サア這はい入いれへか北きた「ナツトメた」ト早さうく裸身はだかになり一目もくさんに風呂ふうりょへ片足かたあし入れつゝ北きた「アツ彌次やじさんく大變たいへんだ少ちつと來きて呉くんな彌や「騒さわ々ざしい何なんだ」コレお前めい此風呂このふうりょへ如何どうして這はい入いた……彌や「ハテしつしい男おとこだ水風呂すゐふうりょへ入はいるに何どうして這はい入いるとは何なんの事ことだ……北きた「ハテ面妖めんやうな彌や「六ヶ敷事むつしはねへ初めの内うちちつと熱あついのを辛棒しんぼうすると後のちには能よくなる北きた「馬鹿ばか云いひなせい辛棒しんぼうして居ゐる内うちにや足あしが眞黒まっくろに焦こけ仕舞しまア彌や「エ、埒らちの甲あかへ男おとこだ」と心こころの内うちに笑わらいつゝ座敷ざしきに行く北八きた色々いろく考かんがへ其所そこ等らを見て彌次やじ郎らうの隠かくせし下駄げたを見付みつけこころにうなづきつゝハテ讀よめたと其下駄そのげた

にて直と風呂の中に這入り……北「彌次さんく、彌「何だ又呼ぶか北「成程お前の云ふ通り這入て見ると熱くはねへア、宜心持た哀れなる哉石童丸は」ツンツレくこの時彌次郎近所を見れば下駄のなき故是れはと心にさとり居る内北八段々尻が熱くなる故下駄にてバタく踏ければ釜のそこ破りて湯は流れてシウくく北「ヤアイ助け船く彌「何したく」宿の亭主この音に驚き行つて見れば亭主「如何なさいました北「イヤモウ命に別條は無いが釜の底が抜けてアイタ、……亭主「コレハ又如何して抜けました北「ツイ下駄でバタく遣つたからさ」亭主「不思議に北八が足を見ると下駄をはき居るに……亭主「イヤお前は途方もない人だ据風呂へ這入るに下駄を履て這入ると云ふ事がムいませるか埒もないこんだ「否私も初手ははだして這入て見たが餘り熱いからさ亭主「イヤ早や苦々敷こ

んだ」ト大に腹を立てる北八も氣の毒さにそこく身體をふいて色々にわびをする彌次郎も氣の毒がりに中に入りかまのなほし代を一兩出して漸々とわびをすまし、

水風呂の釜をぬきたる科ゆゑに

やどやの亭主尻をよこした

いめへましいト二人飯を喰つて洒落も云はず只々ぼうぜんたり……彌「コレ手前も考事あれへ大な徳をしたわ北「何が徳だ彌「釜を抜て二朱では安い段町へ行てみや何んな事ちやれえ北「エ、人の心も知らずに彌「イヤ其でも手前が其な事して居ると己等氣の毒な事がある北「何が彌「先刻の女が後に忍で来るはずに成て置たもふ來さうなもんだ」と一人まちくらしして待てども音なしなま申先に錢をやつて棒にふるかと氣が氣ではな

く堪へ兼て手を打つにやどの女房出できたり女房「お呼びに相成ましたか
彌「イヤお前にわかるめへ先刻此所の女中に少と頼で置た事があるから何
卒少とよこしてくんねへ女房「彼の女は雇人でゐますからも宿へ歸
りました……彌「エ、ほんにか其んならよし〜女房「ハイお休みなさい
ませ」と出て行く北「ハ、彌「篋棒め何かおかしい北「ハ、イヤ是で氣が濟
んだもふ安堵して寝ようか彌「勝手にしやアがれ」ト哀れなるかな彌次郎北
八が奸計とは露知らず貳百戀しや怨めしやのお洒落か無洒落かあたは夜を是
非なくころりとつゝ伏ければ北八おかしく又一首
ごま鹽のそのからき目を見よとてや
おこほにかけし女うらめし

彼是興じて臥けるに早くも聞ゆる逆寺の鐘に夢覺て夜明ければやがて起出

支度して立出けるに名に負ふ箱根八里早そろ〜とつま上りの石だか道をた
どり風まつり近くなりて彌次
人のあしにふめどた〜けど箱根山
堅地なる石だかのみち

北「コレ〜明松を買はねへか此所の名物だ彌「篋棒め最う目の出る時分明
松が何入ものか北「夜が明けても宜はお前買つてとほせば昨夜の代りに彌
置きやがれ北「ハ、此に湯本の宿を過て權現様へ差掛る子供四五人
子供「權現様へ御代參一文遣つて下されチャ……北「ナニ御代參とは何
んだ子供「此衆の代りに參るは北「ナニ己等の代に何れを見ても山家そだ
ち身代にする頼があるものかろくな頼一つも無いに、イヤ時にアノ鉦は何
んだ彌「さいの河原の鉦だソラ來たぞ〜」

辻堂はさすがに賽のかはら屋根

されども鬼はみえぬごくらく

お茶漬のさいのかはらの辻堂に

にしめた様な風の坊さま

其よりお關所打過て

春風の手形をあげて君が代の

戸さゝぬ關をこゆるめでたさ

斯祝して 宿の悦びの酒くみかはしぬ。

◎箱根より三島へ三里廿八丁

長明が東海道記に曰松に雅琴の調あり浪に鼓の音ありと息杖の竹笛を吹ば助郷の馬太鼓を打つ膝栗毛二篇の序開ひやりくつてれ

つくすてんく狂言詞斯様に候者はお江戸の神田の八丁堀邊に住居せし彌次郎北八と申す怠け者にて候扱も我々伊勢へ七度熊野へ三度愛宕様へ月参の 大願を起し、ぶらりしやらりと出掛根つから急がず候程にゑいやらやつと箱根の驛に着て候 謠玉串箱根の山の九折くげにや久方の甘酒賣やさんしよ魚の名所多き山路哉 甘酒賣の親父が『名物 上らしやいませ甘酒呑しやいませ 北彌次さん一寸休みやせうチイ一杯くん な』ト腰を掛るに 爺、んで出す 北『コイツは黒い、彌黒い様で甘いは 遠州 遠松 じやないか 北『チイ、何錢だサア御世話』ト錢を拂て出て行く 北『ナント彌次さん付かれへこつたが白い手拭を冠ると顔の色が白くなつて頼だ粹な男に見へると云事だが 誠かのう彌ソリヤア違ひなしさ 北『よし、』トたもとからさらしの手ぬぐいを出して冠ると通り掛りの女

みなきたかほの顔を見てわらつて行く北「何と何だ今の女共が己等の顔を見て嬉しそうに笑つて行つたは如何も色男は違つたもんだ彌「笑つた答だ手前の手拭を見や木綿真田の紐が下て居から北「ヤアく是ア手拭じやれへ越中禪で有た彌「手前昨夜風呂へ這入る時禪を袂へ入て其れなり忘れたわおかしい大方今朝手水を遣つて顔も其で拭たる穢れへ男だ北「そふよ道理で悪臭へ手拭だと思つた」

手ぬぐひと思つて冠る禪は

さてこそ耻をさらしなりけり

其より兒石を詠る彌次

たがこゝに脱して置しかぶと石

斯る難所に降参やして

斯て山中と云へる建場に至る爰は兩側に茶屋軒を並べて女「お休みなさいましナ下り諸白も御座りやす餅よお上りアし一膳飯よチ上りアーお休みなさいやしく彌「北八チト休んで行ふ」ト茶屋に入るこの時旅人一人入きたりやがて彌次北八の出るや旅人も茶屋を出て後になり前になりして聲を掛け旅人「貴所方は何所で御座ります彌「私江戸さ旅人「私も江戸で御座りますあなたえどどのへんござ」彌「神田さ旅人「神田に私も居りますが何んだか貴方は見申た様だ神田は何所で御座ります彌「神田の八丁堀で私等が家は朽面屋彌次郎兵衛と云つて間口が廿五間裏行が四十間角屋敷の土蔵造で大層な者よ旅人「ハテ其裏でムへますか彌「飛だ事を云ふ裏店はなしさ私の所一軒で住てゐやす旅人「ハア其なら總地代で沽券は幾價彌「沽券は千八百兩旅人「お前直で御座りますか口錢は何朱でも二ツ割

に致しやせう彌『お前何を云ふ旅人』私は又地面の賣買のお話しかと存じま
 した彌『ナニ何な事ちやねへ私等一寸出るにさへ供の五人や十人連て歩き
 やすが其じや氣が詰て面白くねへから此男一人連て不自由して歩く物好
 だれ旅人』成程左様でムいませうイヤ又貴方の母上なぞは私好存じて居ま
 すが何日や淺草の門跡様の前でお目に掛りました彌『ハア夫は大方寺參
 りにでも行かれた時で御座りませふお前御存じとあれば定めて何とか詞を
 懸られたであらふ旅人』私を見ると直に言葉を掛られ一文遣て下されませと
 北『ワハ、彌』イヤお前は己等を馬鹿にするの北『面白く何と今夜私等
 と一所に泊りは何だ旅人』よう御座りやせう』と其より互ひにわらひつゝ國
 澤と云るに至るこゝに足利の建てし七面堂あり彌次伏おがみつゝ
 足利の武しやうの建し名にめでし

七面堂といふべかりける

斯て三人連立て市の山に至るこゝに三四人の小兒龜を持って遊で居るに
 北『コウ彌次さん好物が有アノ泥龜を買取て晩に宿でやらかしは何だ彌』よ
 かるふ』と廿四文を出して買取る北『奇妙く旅人』こいつ面白い時に日か
 入らしつた少と急ぎやせう』ト足早に三人たどる既に其日も暮近付入相
 の鐘幽に響き鳥もねぐらに歸り掛の駄賃馬追立つて泊りを急ぐ馬士隕の念
 けたるばほてつ腹の淋しく成たる故にやあらん此時漸く三島の宿につく

◎三島より沼津へ一里半

女『お泊りなさいませ〜彌』エ、引張な此所を放したら泊るべい……………
 女『すんならサアお泊り彌』赤んべい北『宜加減に此所へ泊るか女』アお這
 入なせいませ亭主『コレハお早ふムいます御連様はお幾人彌』陸共六人

亭主「へいそれは三太郎は居ぬかお湯を取て来いお茶は煮てあるか先づ御風呂をひとつあげろうお飯も沸た直にお這入なさいませ」三人足を洗ひ奥へ行女「お湯にお召なさいませ……彌「ドレお先へ参らう」と裸身になりてか
 け出す女「モシ其所は雪隠で御座ります此所へ彌「ホイこれは」ト湯殿へゆく十吉「時に彼の藁苞は北床の間に置やした後の寢酒に作てもらひやせう」この時十吉湯殿に入に立つ北「時に此所代物はなしかの女」此間木曾の追分から来た女郎衆が二人御座りますから御呼なさいませ彌「面白かり器量は女」マア十人前で御座います彌「ハ、ハ、ハ、十人まいの飯盛か面白呼でくんか女「すんなら只今」ト立て行く十吉湯より上りきて「十吉」お嘶しだれ彌「主や如何」十吉「イヤ私に彼の女に少し咄し合がありやす」トこの時宿の女きたり女「是は御如才で御座いますサアお買ひなさいませ」

と聽て皆々眠りに就く早其夜も更け行くまゝに助郷馬の鈴の音断へば、春月に鳴く犬の遠吼し、追ふ鳴る子の音迄吹送る夜嵐の身に染む計り燈火の油も盡て何時の間にかは眞暗この時彼の床の間に置し泥龜のそり／＼とはい出して北八の夜着の中へ這込と北八びつくり目を覺し頭を上げると泥龜うろたいて胸の邊へかけ上る北八きやつト言て引つかみて投出すと彌次郎が顔へばつたり彌次郎指先を食ひ付かれてビックリ彌「アイタ、火を點して呉れるアイタ、北「眞暗でねつから分られへ彌「早く／＼アタ、／＼」此ひまに十吉彌次郎が布團の下に入れて置し道中の路金を盗み兼て作り置きし石ころを紙に包みたるを取替元の布團の下へ入て置くさてこの十吉は道中のごまの輩なり彌次郎が金のあるを見て途中より付け来りこゝに盗みしものなりこの内女房あかりを付けてみれば彌次郎の指に泥龜が食

ひついて振つても離れぬに……女房「如何して此所へ泥龜が来たやア北」
 ハ、ア晝間の泥龜がつの中から出たのだ、此奴スポンと抜けそうな物だ
 彌「エ、洒落所じやねへア血が出る痛い」竹「ソリヤ指を水の中へ入め
 さるとじきに離してつん逃げ申すは女房「ホンにそうなさいまし」とあま戸
 を明る彌次郎手水ばちの中へ手を入る龜は離れて泳ぐ彌「ヤレ」飛だ
 目に遇つた北「イヤ早奇妙稀代言語同断な事で有たハ、」ト其所等を取
 片付け夜明けに間があればとて又も枕を取りてまどろみける中に北八おか
 しく

よれたちとれたら側には泥龜も

辱かしいやら指を食へた

彌次も痛さを堪へて

すつぽんに喰へられたる苦しさに

こちや石龜の地だんだをふむ

最早其夜も明行ば寺の鐘も勤行の聲諸共に響渡り求食鳥の軒近く鳴
 渡るに皆々目覺て起出れば勝手より膳も出で其れに支度する内女房「お
 ひざりどこへ行きなかつた北「ホン二十公は何した彌「大方雪隠だるう先
 へやらかせ」ト飯を食ふ十吉は早裏道よりに行きたれば來るぼづなし彌
 次あたりを見廻し不思議顔に彌「ハテ合點の行ぬ彼の野郎風呂敷包も笠も
 れへ大方己等が寢て居る内に立って行つて仕舞たと見へる北「ヤア其んなら
 何か無なりやしれいか」ト其所を見廻し北「何も別條はねへか彌「イヤ、
 別條か有様だ」ト懷中よりどう巻を出し振て見れば紙に包んだ奴がやつた
 りとおちる明て見れば皆石ころのみ彌「ヤア、」北八何した所か金が

石に成て仕舞つたエ、北「コイツは大變〜」彌「悔しい今の野郎奴にすり替
 られたコレ女中御亭主を呼でくん早〜」ト無暗に急立てれば亭主寝巻
 のまゝに來りて「四主」今承はりました扱て〜飛だ事でゐます彌「貴様
 御亭主だのコレ濟ねへぞ〜彼なごまの輩に宿を貸すからにや、此方も上前
 を取たるふ何故己等に沙汰なしで先へ立した亭主」是はけしからぬお連様と
 存じて宿たので御座います今朝立しつたのも薩張知ませぬ大方裏道から
 でも彌「裏道もあるものか何でもアノごまの蠅を出せ〜コレエ野郎を見誤
 なつたかお江戸でも神田の八丁堀で枋面屋の彌次郎兵衛様と謂ちや怖りく
 近付の人に誰知の者はねへが悪く出やがると屏臺骨を打損して仕舞ぞサアご
 まの蠅奴を爰へ出せサア出せ〜」北「コレ彌次さんマア靜かにしれい可愛想
 に御亭主の知た事じやねへ道連にして來たば此方が悪い如何仕方がねへと諦

めなせへ亭主「左様〜是がわし共の家へ御座つての相宿ならばおつしやる
 も尤もだが何を云ふにも一所にござつた物を申さばお前達の御粗鹿と云ふ
 もんだ北「違へなしさコレ彌次さんお前力んでも始まられへ仕方がねい」ト云
 はれて見れば彌次郎も成程と思つて閉き切て居るに始末付れば北八は北「彌
 次さんマア飯でも喰ねへ彌「飯も喰ね何と北八斯だ府中迄行ば少とは算段す
 るあても有から先一文なしに出かけよう」ト遣ひ残りの錢をあつめて漸々と
 此所のはたごを拂ひ早々に此所を立出道々も心を付けてごまの蠅を尋ね
 れども更に知れずしやれむだ言も何處へやら只々浮々とたどりながら一首を
 詠む

「ごまはぎ 枯木に花ば咲もせて
 目を擦らする胡摩の蠅哉」

北八是れを聞いて 北彌次さん其麼に 力を落しなさんな高が斯うだわい
浮き沈みある世は次第不動尊

祈れる甲斐もなき護摩の蠅

彌「北八や俺ア最う坊主にても成り度い 北「お前飛んだ事を云ふ……
一層江戸へ歸るか 北「何サ歸る事があるもんか柄杓を振てもお伊勢様まで往
て来にやア外聞が悪い 彌「其れでも最う勞れて歩かれぬ 北「ハテ待な茲に江
戸から預かつた十二銅があるから先へ行たら餅でも買つて食ひなせい
と歩む内に向ふ 彌「馬士どん先の宿迄は未だ餘程あるかえ 馬士「何に直ぐ
ぢや 彌「何程あるえ 馬士「唯た三里半もある 彌「ハテ扱て』と驚きながら行
云ふ所 名を聞て欲しや黄金の釜が淵
に至る

名を聞て欲しや黄金の釜が淵

此所にて餅など食へ少しは腹の虫を養ひ互ひに力を付け合ひ 漸く沼津
の驛に着く

口に孝行したき故には

◎沼津より原へ一里半

爰にて先づ足を休めんと宿端の茶屋に入る 女「お早う御座りますお仕度
は北「否後ろの立場で食て来やした』一人此の家へ入る 女「お茶上りませ
侍「最う何時か 女「八ッで御座ります 侍「良い酒があるなら出しな 女「ハイ
く 酒と肴を 侍「コリヤく 酒は何干で肴は何干だ 女「四十二文で御座
ります 侍は代價を置き供と二人で酒 女「有難う存じます 彌次郎と北八は
行 彌「ヨオ好い景色ぢや』二人は彼の侍の後になり先になりて行く
此景色見れば 休にやならの坂

此景色見れば 休にやならの坂

いざ草煙には千本の松

侍は此の歌に感心して侍「出来た〜お身達は江戸の者だな彌」左様で御座ります私共は昨夜の泊りでごまの蠅にとりつかれて難儀致します侍「ハア其は近頃氣の毒だちやさぞ痛からう彌」イヤごまの蠅と申すは盜賊の事でござります侍「ハ、ア人の物を取る故盜賊の事を泥棒と云か彌」左様でござります侍「其の又泥棒をこまの蠅と云ふぢや成る程げせたく」北「時に一寸旦那へ御願ひが御座ります私共右の泥棒にあひまして不殘路用は取られて仕舞ひましたから大いに難儀を致します府中まで參れば如何様とも致しますが其れまでの處に困りますそこで財は身のさし合せとやら何卒是れを賣りたうござります御買ひ下被ませぬか」でんの巾着を見せる侍「ホウ其れは氣の毒身達の難儀とあれば求めて遣はさう價は何錢ぢや北」三百位にあげませう…

侍「其は高價ぢや六十文遣はさう」北「其れはあんまり侍」六十一文北「エ、イ侍」六十二文北「イヤ最う其んなに一文宛御買ひなすつては御話にはなりませんぬ丁度にお買ひ下被れませ侍」丁度とは……北「ハイ丁度と申すは百で侍」ウ、何か百の事を丁度と申すのか然らば丁度に買つて遣はさう」ト北八は巾着を渡して百文を受取其より段々さむらひわかれて侍に別れてと少すは大すばな打すぎ程なく原の宿にて

◎原より吉原へ三里六丁

まだ飯も喰はず沼津を打過ぎて

ひもぢき原の宿につきたり

北「エ、お前又其んなしみたれを云ふは今の錢で蕎麥でも喰べい……彌」ソリヤ宜かる〜」に入るとそばや北「オイ二膳頼みます男」ハイハイ彌「北八も一杯替へやうか北」イヤ〜最う一度に錢を使つてはならぬ又先へ行つて

なんぞやらかしやうからでも澤山のみなさい彌其んなら若衆漫を一つ男『ハイ』北『飲むかオイ』もう一杯おつと忘れた薬をのむから熱いのを最一杯彌『大分心がたしかになつた』

今喰ひし蕎麥はふじ程山もりに

少し心もうき島がはら

其れより新田と云ふ建場に至る此所は饅の名物にて家ごとに焼立る匂にふたり二人は鼻をひな付かせ

蒲焼の匂を嗅もうとまじや

此方二人はうなぎのたび

頼て元吉原を打過ぎ柏原と云ふ所に至る此所より富士の山正面に見えて裾野第一の絶景なり彌次郎

餅の名のかしは橋とて旅人の

足をさすりて休みやすらん

斯て吉川の驛につき

◎吉川より蒲原へ二里二十五町半

棒鼻の茶屋女ども何れも黄色なる聲々にて女『お休みなさいやアせ』

かこや『籠よしかな籠馬士』ナイ旦那衆馬は何だ戻りだから安い彌『今迄乗

りつめにのつたから一寸是れから歩かう北『ころびやしうが聞て呆きれらア

サア彌次様菓子でも食はねえか彌『一寸休みやせう北』小僧この菓子は何

錢だ小僧『アイニ文宛北』五つ食つたから幾錢だ小僧『私ば知りません』

北『そんなら斯うと五つで二五の三文が是れ此所におくぞ』彌『ヒヤア此奴

は安いもんだ今一つ食ふコリヤ何程だ小僧『ソリヤ三文北』ドレ／＼甘い

小僧先の錢はすんだぞ後の菓子に四つ食つたから三四の七文五分かえ五分はまけるく彌イヤ餅もあるな北「ドレ此奴は甘い此の餅は何程だよ小僧ソリヤ五文取よ北「五文づゝなら斯うと二人で六つ食つたから五六十五文其れやるぞ小僧此衆は最塵劫記ぢや賣まさない五文づゝ六つ呉れなさる北「ヤアくく錢があるか知らん小僧此所へ出しなさる一つ二つ三つ四つ」目のこ算川にひつたくらに算へて彌「此奴は大爆笑だ……北「飛だ目に合つたサア往かう」ト立上り四五北「アノ小僧は如才のねえ奴だあの餅が十二五文取なものが三文か三文の餅だるに高く賣つて初手の損をうめやがつた彌「いまくしい」今喰つた餅が咽につかへてゲツくとおかしき半分小した報ひは直ちにト打そ其れより久澤の善福寺と云へるに曾我兄弟の石碑があるを拜みて北八

今曾我に奇縁を結ぶ我々は外に一家も一文もなし
 富士川の渡場に彌次郎
 ゆく水は矢を射る如く岩角に
 當るないとふ富士川の舟
 此の渡しを打越るに早日も西山にちかづき自から道急ぐ馬士唄の竹に止る
 雀色時漸く蒲原宿に至る
 ◎蒲原より由井へ一里
 此の宿の御本陣にお大名のお着きと見え勝手は今膳の出る最中北八外より差覗いて北「コウ彌次様一寸此の風呂敷包を持つてゐてくん……彌「何うする北「イヤちつとの間だ」ト彌次郎に包みを渡し其のまゝ勝手元

大勢の女中が膳を出しぬる故北八片隅に座りついナイれいさんこいへも一ゼんと云へば女中は本陣の客と思ひ膳を出す北八は直に思ふぞんぶんに飯をしぬ別にたもとより手拭を出して飯を包み懐中しそこくに逃げだした 彌「オイく 北」何所へ行つた……

北「へ、自ア飯を食つて来たが奇妙か 彌」エ、何所で 北「本陣のどさくさまぎれに五六杯 彌」ソリヤ宜事をした併し手前も實のれえ者だ何故己れもつれで行かれえ 北「イヤお前にや土産を持つてきた」ト手拭の 彌「何だ飯が有難いイヤ 中々手前気がきいて居るわえア、甘へく 北」ハ、時に宿端れへ行つて木賃と出よう 彌「コウ何卒粹な女の有る家へ泊り度の 北」ナニ木賃で泊る宿に粹な美人もあるものかソレ向ふに木賃がある 亭主「お泊りますかい其所に水がある……」 北「彌次様見れえ好 順禮が泊つて居る 彌」ホンニ此奴只はおかれぬ」ト打笑ひ 六部「サア此所へ来て暖たまりなさい 北」コレ彌次様最と其方へ寄りなよ」ト娘の脇に座る主 婆「サア彌が出来た皆な食

ひなさる…… 彌「ソレハ暖たかて宜からう」 是は巡禮六部と出し合の米なれば彌次郎北八見て居るばかり是の内六部はかゆを食 六部「二人の衆はお江戸の衆らしいが私共はお江戸で飛だ目にあつた 彌」何うなかつた 六部「私がハア此の六部になつた因縁のう語り申すべいか」ト江戸にて商法に 北「ハ、其れは氣の毒な時に又順禮様お前は何う云ふ事で順禮に出なすつた 順禮」コリヤ私も序に懺悔話しのうしますすべえ」に宿のばいが 婆「サア皆な休みませい家がせまいから私と順禮の女衆は天井へあがつて寝べえ」ト楷子を二階へ掛け娘をやじといるりのは 北「コリヤ小便が洩る様だ 彌」己等も一所に行かう」ト口へ行 彌「アノ順禮めぶつちめやうと思つたら二階へ行きなつた忌々しい 北」最前から話して居る内密と手を握つたり尻をつめつたりして居たかお前知るめえ 彌「早い男だ」ト内へ入り裏か、木賃のわびしきも話の種と云ひなが

ら凌ぐべきむしる屏風も破れ壁を洩る風の音更けゆく鐘に目覺て北八四面を
 親ひ見れば皆旅疲れのかけ合駟ゴウくスウく」時分はよしと北八
 く二階に上れば竹のすのこなればこ亭何だく」二階の婆皆な起きる
 れを踏みぬいて下へガラくストン 亭何だく」ばい 婆皆な起きる
 く」此の音に六部も順 順禮どえらい音がした燈をつけな」は天井より
 落ちて佛だんの中にはまりつゝ苦しき中 亭何だか佛様の中へおちたそう
 にもおかしく出てにげ出さんとするとき 亭何だか佛様の中へおちたそう
 な」佛壇の戸ピラを開き 亭イヤ此の人は北モシ身延様へは何う参りま
 す亭鹿云はつしやい北イヤ私は小便へ起きた所がツイ戸迷をし
 て亭何戸迷をしたイヤ此人は佛様へ小便をせむか」見ると中を 婆ヤア
 く此方は天井から落ちめさつたな北アイ途猫に追れて落ちやした婆
 イヤくそうぢや御座ない北否やもう御免なせい」賣りて天井をつくるひ
 夜明早々にこのところを立出 彌北八大分齋ぐの小田原の泊りでは水風呂の
 で又たどりゆくみちすがら 彌北八大分齋ぐの小田原の泊りでは水風呂の

底を抜いて貳朱ふんだくられ又夕べは二階をふんぬいて三百取られたも智恵
 がないぞ北イヤ面目次第もれえ忌々しいが一首詠んだ」
 順禮の娘と思ひ忍びしは
 扱てこそ高野六十の婆々
 彌ハ、夕べ戸迷の言譯も可笑かつたが猫に追はれたとは面白い其れで
 一つ咄しに先づこうだゆうべの様に順禮や六部と一所に木賃へ泊りをしや
 した時に手前が夜中に起きて何かまご付きやす、そうすると皆か目を覺まし
 てコリヤお前何にを爲さると云ふと手前が云ふにはイヤ私は禪を鼠に引
 かれました確か二階の方へ引いて行つた様だと云ふと順禮も六部もそう云
 ひなされば私も枕元においた禪が見えれえイヤ私かのも此所においたが
 見えないコリヤ鼠に引かれた者だらう何でも二階の端の方で三味線の音が

するイヤ此奴は不思議だとあがり口から透かして見れば鼠共が大勢よつて皆なのふんどしを並べて一匹の鼠が云ふには己等の引て来た六部の禪は振ふと三味線の音がするは如何した事だら合點が行かぬと云ひ乍ら其禪を口に咬へて見るとなるほどチ、チン〜など鳴りやす底で又外の鼠の云ふには六部の禪に限り三味線の音がするも不思議だ物は試し己等が引て来た順禮のふんどしをも振つて見やうと同じく口に咬へて振ると是れもチ、チン〜と鳴やした此奴は妙だと又一匹の鼠が己は北八とやら云ふ男の禪を引て来たがコリヤ越中だから短かいだけで鼓弓の音がするだらうと咬へて振つて見ればツンツン〜と義太夫三味線の音が仕やす底で鼠共が此奴は不思議だ六部や順禮の禪は皆可笑しい歌三味線の音がするに何故北八とやらが禪は義太夫三味線の音がするだらうと云ふと角ツこの鼠

が暫く考へソリヤ其の筈だわえ何故其筈だハテ北八とやらは大方太棒だらうよ北ハ、奇妙〜」屋由井の宿に女「お這入りなさいやアせ名物砂糖餅よアあがりやアせ鹽つばいのも御座へやアすお休みなさいやアせ彌エ、八釜敷女どもだ」

呼立る女の聲はかみそりや

さてこそ爰は髮由井の宿

◎井より興津へ二里十二丁

其れより由井が川を打越え倉澤と云ふ所の建場へ着く爰は鮑榮螺の名物にて蟹人直ぐに海より取り来りて商ふ爰にて暫く足を休めて

爰もとに賣るはさいの壺焼や

みどころ多き倉澤の宿

其れより薩埵峠を打越えたり行く程に俄に雨降り出しければ半合羽打
かつぎ笠深くかたふけて名に合ふ田子の浦清見が關の風景も雨にて見る方も
なく砂道に踏み込みし足も重げに漸く興津の驛に至り

◎興津より江尻へ一里二丁

此所に怪しげなる茶屋に立ちより北「オイ婆さん其の豆粉をつけた團子を二
三本呉んなせい彌」さて「久し振でお前の顔を見たわ何時も達者で日出
度、時に此の子は幼少な時見たりか大きくなつた、姉御は達者かの婆」私
は小供は御座らない北「其んなら孫が婆」インネ子「なげや孫もない北」ハ
テ「お前の孫でなげや確か何所かの孫で有つた婆」インネ馬子「ちやお座ない
隣」の籠屋の孫でお座るわ彌「ハア其かあの團子が二つ餘つたソレ喰ひな
子」イヤダ彌「ナゼ否だ子」ナニ糠付けた團子は否だ彌「ナニ糠をつけるも

のかコリヤ豆粉だ婆「イヤ私等の所ぢや糠付けて賣り申す彌」道理でさら
くすると思つたらベツベツモウ犬に遣うよ……」犬わんく

◎江尻より府中へ二里二十七丁

降くらし富士の根ぶとを打すきて

江尻にあめの霽れあがりたり

雨止みたれば自「から行きかう人の足も輕げに空尻馬の鈴の音も勇ましく
シン」馬士「次郎や主が馬誰れが馬だ次郎」コリヤ下町の酒屋の馬だよ
馬士「アノ酒屋の噂はしよつばい奴も己れが彼所に居る自分にや飯の中へ砂
を交て食はしたり無性に字を書き習へのイヤ算盤をかじれのと色々な戯言を
つきやがつて己らな彼所の番頭に仕様と云やがつた其の手を食ふものか業さ
らしナドウ」北「馬士どん火を借して呉んなせい馬士」アイ「お前方お

江戸だなお江戸衆は氣がづない昨日己等が府中から江尻へ三百で乗せた旦那はお江戸衆で好い旦那よ長沼まで來るとその旦那が云ふには江尻まで三百ちや安いから酒手を二百増してやらうと其の替り別に此方から酒は呑ませると吉田の的場であらふく酒を振廻はしやつた其れから又言はしやるにはコリヤ馬士、主や一日馬を連れて歩いて草臥れるだらう是からおれがひくから馬士乗れとて無理に乗せて乗賃二百下すつたト此の話の内馬上の旅馬士旦那危い目を覺ましたさる旅人起され旅人馬が埒があぬから眠氣が出た昨日三島から乗つた馬は好い馬であつた、そして馬士が頼だ氣のよい男で三島から沼津へ百五十の極で乗つた所が馬士が云ふには旦那こんな早い馬に乗つて今に落ちやうか、イヤめつたに居眠もならぬなどい心遣ひして居らしやるだらう其れが氣の毒だから駄賃は最貰ひますまいと言ひをる其れから

三枚橋へ來ると旦那馬の鞍で腰が痛みませうチト居りてお休みなさい酒でも上るなら酒手は此方から上げませうと馬方の方から百五十呉れて沼津へ來ると先の宿まで送つて上げたいが私が馬はあれますから外の馬を取つて乗つて行かつしやれ駄賃は私がしんぜませうと又百五十只呉れた彼な氣の宜い馬士も無い者だト此馬を引く馬士『ゴウくムニヤく』此はなしに彌次も北八も興に入り府中の宿に着く

◎府中より鞠子へ一里十六丁

先傳馬町に宿を取り其れより彌次郎が知るべに至り金子才覺調ひ彌『モシ御たれば大いに元氣づき今夜は安部川町へ浮れ込んと二人仕度して亭主私等是から二丁町へ見物に行きてい何所の方だれ亭主安部川の方でございます北『遠いかれ亭主』此所から二十四五丁ばかりあります』やがて兩人はしげこむ廊北『此家内の着物は皆な七間町の硯蓋の様だナ

ア彌なん何どと何ど樓まがへ上あるか 北ま待まちちな確たしかに爰こゝは一分ぶと十文もんと貳朱しゆだけだが如何うして上あがるのだ勝かつ手が知しれれえ』と格子か先さきをうろつく内うち 此こ家に仕しやう彌やじ次さん様み見み立てれえ彌なんサア宜よい』と 若わ者さ爰こゝれば好よくお出いでなさいまづ上うへへ』各と階たへ案あん内ないする二人に人には 若わ者さ御お酒さけは如何どう致いたしませう……

北さ酒けも出だして吳くんな若わ者さハハイ』彌なん次じ郎らうの敵てき娼さう小せう笹さ野やと北きた 小せう笹さ野や好よくお座ざいました いさ川がわエ、見み度たくも無ない彼のあ餓が鬼きは未まだ煙たば草こも入いれないヤア 小せうさめや彌なんサアお前まへ方がたモチト此こ方うちへ寄よなせい若わ者さ衆しゆう酒さけを早はやく』お定さだりの彌なんサア一ひつ 小せうさめ』彼あの今いま吉よしの野や屋やから磯いそ次じ様さんがお前まへに用ようが有ありますからちよつくり いさ川がわ今いま行いがすに 小せう笹さ野やハレ小せうさめやア久く能のうの仙せんさんば御お座ざつたか 小せうさめ』インネ 小せう笹さ野やおらやだア』この内うちに若わ者さと 其それより色いろ々の御お定さだり文ぶん句く畧りやくす斯かくて一いすいの夢ゆめ覺めめて 曉あかつきの名な残ざんを惜おしみ彌やじ次じ郎らう床とこを出いれば

北きた八やちも目めを擦こすりながら爰こゝに來きたりて打うち連つれ立たち梯はし子こを下おりるに皆みな々く送おくり出いであ いさつそこくに引ひ別わかれ傳でん馬ま町ちやう指さして急いそぎ歸かへり來くれば宿やどには朝あさ飯めしの用よう意い調てうへ膳ぜんを出だすやがて此この宿やどを立たつ、名な物ものあべ川がわ安あ部べ川がわの川がわ越こし懸かる 川がわ越こ日に那な衆しゆうお上のりかな 彌なんオイ貴き様さん何なんだ 川がわ越こし御ご座ざります安やすくやらすにおたの み申まうしやす 北きた何なん程ほどだ…… 川がわ一人ひと前まへ六む十じゅう文もん 北きた高たかい川がわ川がわを見みな さる豪かう勢せいな水みづだ…… 彌なん成なり程ほど深ふかいコこレ落おして下くださるな 川がわア二ふた落おすもん かえ…… 彌なん其そのでもひよつと落おしたら如何どうする 川がわハテ落おしたらお前まへ流ながれ て仕し舞まう送まての事ことだ 彌なんイ、流ながれて堪たまもいかえ最もう來くるぞくヤレく御ご苦く 勞らうく其そのれ別べつに酒さか手が十六じゅう文もんづい 川がわヘイ御ご機き嫌けん宜よう』かへる 北きたアレ見みれ え已お等いらをば態わざ々く深ふかい 所ところへ渡わたして六む十じゅう四し文もんふんだくり目めは淺あい 所ところへ渡わたつて歸かへりなる』

川かはごしの肩車かたぐるまにて我々われらを

深ふかいとこゝろへ引廻ひきまはしたり

◎鞠子まりこより岡部をかべへ二里九丁にりちやう

爰こゝにて支度したくせんと茶屋ちやへ這入はいり北きたコウ飯めしを食くふか爰こゝはとろい汁じゆの名物めいぶつだの
 彌や『そうよモシ御亭主ごていしゆとろい汁じゆはありやすか亭てい』ハイ今出来いまできす』此この地の言ことば
 をできず彌や『何なんでできれえか仕舞しまつた亭てい』ハレ直ちつきに調しらへずにちツと待まちちな
 と云いふ彌や『俄とつに芋いもの皮かわ』亭てい『お鍋なべヤレ』此この忙いそがしいに何なにをして居ゐる一寸ちよつくり来こい
 さろ』ト俄とつに芋いもの皮かわ』亭てい『お鍋なべヤレ』此この忙いそがしいに何なにをして居ゐる一寸ちよつくり来こい
 女房裏口にようりぐちより小女房こにようり『ソレお前摺まゐすりこ木ぎが逆さかさまだ亭てい』己おれが事ことより己うぬが
 供たねを負おつて来きり女房にようり『ソレお前摺まゐすりこ木ぎが逆さかさまだ亭てい』己おれが事ことより己うぬが
 ソリヤのりがこげらア女房にようり『ヤレ』ハ八釜やかましひ敷人ひだ亭てい『コリヤ摺鉢すりばちをつかまへ
 で呉くれるエ、其それちや摺すりられない……女房にようり『アニお前まゐが亭てい』イヤ此このあま
 ア』トすりこ木こで一ツホカ女房にようり『此この野郎やらう』すり鉢ばちを取りて投なる亭てい『ヒヤア
 女房もやつきと成なり女房にようり『此この野郎やらう』すり鉢ばちを取りて投なる亭てい』ヒヤア

うぬ』向むかうの神かみさ
 女にようり『ヤレ』又見またみたくでもない評しづまりなさる北きた『飛とんだ手
 やいだ彼あのとろい汁じゆで一首しゆよみやした』

けんくわする夫婦ふうふは口くちを突つらして

鷲さびとろいにすべりこそすれ

其それより宇津うつの山やまに指懸さしかりたるに雨あめは次第しだいに篠みだを亂たし蕨ほその道みち心こゝろほそくも
 杖つえを力ちからに十團子だんごの茶屋ちや近ちかくなりて彌次郎やじらう思おもわす坂道さかみちに迂まり轉ころげれば

降りしきる雨あめやあられの十じゆだんご

轉ころげて腰こしをうつの山道やまみち

岡部宿おかべしゆくの宿しゆく 宿引しゆくひ『お泊とまりて御座ございますか 彌や』イヤ私等わたしら今日けふ日か川がはを越こさにやな
 引待ひまち受うけて 宿引しゆくひ『お泊とまりて御座ございますか 彌や』イヤ私等わたしら今日けふ日か川がはを越こさにやな
 らぬ宿しゆく大井川おおいがはは止とまりました彌や『南無三川なんむさんかが支つかえやしたか宿しゆく』左様さやうで御座ござ
 いますお先さきへお出いでなすつてもお大名だいなみやうが五組島田くみしまだと藤枝ふぢえだにお泊とまりて御座ございま

すから貴郎方の御宿は御座りませぬ先岡部へお泊りなさいませ 彌「其れなら
そう仕様か 北「お前何屋だ 宿「相良屋と申します直にお供しませう」打連て
岡部につく

豆腐なる岡部の宿につきにけり

足に出来たる豆をつぶして

◎岡部より藤井へ一里二十六丁

名にしおふ遠江灘浪平らかに街道の並松枝を鳴さず往來の旅人互ひ
に道を譲り合ひ泰平を謠ふ馬子の小室節裕に宿場人足其の町場を争そは
す雲助駄賃を強請らす斯る有難き御代にこそ東西に走り南北に遊行する雲水
の樂しみ得も云はれず爰に彼の彌次郎北八は大井川の川支にて岡部の宿に
滞留せしが今朝御状箱渡り一番越しも濟みたるよし聞き齊しく忽々に支度

して宿を立出でけるに早や諸家の同勢往來の貴賤櫛の齒を挽くが如く問屋
駕宙をかけて街道の賑ひ勇ましく二人も共に浮れて行程に朝比奈川を打越
し八幡鬼島を過ぎ白子町に至る爰は建場にて兩側の茶屋女いと呼ぶ
馬士「旦那馬いらぬか二百で安いもんだ 北「エ、二百出やア夜の馬に乗
れら糞たれめ 馬士「イヤ已らいつ糞たれた馬」ヒ、ヒン／＼ 彌「何とチヨボ
り呑んで行ふコウ姉さん好い酒が有らば一寸計り出して呉んな 女「ハイ
彌「時に肴は何じや 亭「鮪の煮もの 北「よし／＼サア始めやうイヤ 此肴
はおだぶつたぜコリヤ昨日の鮪だ 亭「インネ昨日ので御座らない一昨日
のを上げましたから酔ふ事受合だもし 北「エ、酔ふて堪る者がそして此酒
は半分水だベツ／＼時に若干だの 亭「ハイ肴が六十四文酒が二十八文
北「甘くれへ代りに高い者だサア 往う」 銭を拂ひ立出で早くも 燈が淵と云

ふ所に至り例の好きの道とて彌次郎

爰もとは鞍のあぶみが淵なれど

踏またがりて通られもせず

其れより平島口田中を打過ぎ藤枝の宿近くなりて

街道の松の木の間に見へたるは

これむらさきの藤枝の宿

◎ 藤枝より島田へ二里八丁

この宿の入口田舎もの老爺北八に突當ると北八北「此親仁め眼が見へぬか
水たまりの中へ轉がりてあつくなり田舎者を捕へ寒鳥の黒焼でも喰へやがれ親仁「ハイ御免なさい北「ヤイ御免なさいもね
へや斯う見へても金の鯨銚を白眼で産湯から水道の水をあびた男だぞ
親仁「インネエ水を浴びたなら宜う御座るが其方の轉んだのは馬の小便の堪

りだ北「エ、其小便へなぞ突轉ばした悪く洒落れらア頭の欠でも拾はせ
て遣ふか親仁「エ、く私にも荒神様が着いて居ら北「アエ、此摺木め」
ト一ツ喰いせに掛る彌次郎見かれて引きわけ彌「北八も許せ爺さんお前が全體鹿相しながら氣が強
い最う宜いから行きなせへ」ト北八をなだめる親仁顔を彌次郎
頭につて北八に今たしかれし

薬罐頭の親仁へこんだ

打わらひつゝ瀬戸川を打越し其れより志田村大木の橋を渡り瀬戸と云ふ所に
至る爰は建場にて染飯の名物なれば

やきもの名にあふ瀬戸の名物は

さてこそ米も染つけにして

斯くて此の町端れの茶屋に先の田舎親仁休み居たりけるが二人を見つけて呼

びかけ親仁『先刻御無禮致しやした一杯呑んだ元氣で飛んだ事を彼方が了簡
 ノウして無事歸村しますわ先づ禮に一杯此所へ寄らつしやい彌『何に私寺ア
 酒も呑んで來やした親仁』折角私の思ひで一ツ宜からうコウ／＼御亭主味
 良酒出さつしやい非『やお志は忝けないがサア彌次さん行う親仁』ハテ
 コリヤ情のない人や』を取りて引張りこむな 親仁『此は餘り入口だから
 おほざしきゆか』肴も酒も女』サアサア』肴も來る彌次郎兵衛 彌
 サア親父さん始めなせへ親仁』毒見しませうナツト……さて先づ若い人へ
 進ませせう北』アイ私は酒よりか腹がへつた親仁』ソリヤ飯を食つしやい
 北』イヤ先づ酒にしようナツト有ります／＼是れば吸物是れば煮物之れば有
 難え時に親仁さん上やせう親仁』やうやつと持つて來た平は何んだ玉子のふ
 は／＼サア澤山呑んで呉れさつしやい其方は私の爲めには命の親や先刻

やア好く了簡して呉れやした北』コレ私も途虫の居所が悪くつて言ひ過
 ぎた眞平御免……彌』そこは旦那ども野暮じやれへ』ト只酒故無性に呑
 色々料理も出で膳も出る二人氣の毒なが 北』コウ彌次さんアノ親仁の來ぬ内
 ら食つて仕舞ひ親仁小便に行く跡にて 彌』時に此の親仁のべら作
 に後に飲む分もやらかそう』ト二人は飲むやら歌 彌』時に此の親仁のべら作
 奴は如何した北』ホンニ長い雪隠たモシ女中爰に居た爺様は何處へ行つた
 ……女』確か表の方へ彌』ハテ變チキだわえ』ト待てども來らず雪隠を
 北』モシ女中今の親仁は此の拂をして行つたか女』否未頂きませぬ
 北』ヤア／＼ペテンに掛けやがつたな追掛けて打のめそう』ト飛んで出たれ
 北』彌次さん如何も知れえ飛んだ目に遇つた彌』仕方ない手前拂をし
 やアノ親仁めが悔んで手前に意返返しをしたのだな北』折角酔つた酒が皆さ

めて仕舞つた彌次郎の犬と太郎の犬とは皆さめて仕舞つたか北「エ、洒落なさんな其所じやねへ何しろ幾錢だれえ亭主「ハイ、九百長五十でムいます北「欺偽に遇うたと思つて往生して拂ひやせう言やア言ふ程智慧のれえ話だ彌「そう云ふても乙な爺だ能事をしやアがつたコウ北八手前の貌で一首うかんだ」

御馳走と思ひの外の始末にて

腹もふくれた頼もふくれた

北「へ、こうはらな生馬の目をぬきやがつた」

有りがたい忝けないと禮いふて

いつばい食つて酒の御ちそう

斯く讀みて北八も笑ひを催ふし田舎者と侮つて頼だ意趣返しをしられたる

も可笑しく爰を出て行く程に大井川の手前なる島田の驛に至りける

◎島田より金谷へ一里

川越も出迎へて川「旦那衆川を頼みます彌「川越か二人で幾賃で越す川「今朝開いた川で肩じや浮雲から蓮臺でやるから二人で八百下さい彌「途方もねへ越後新潟じやあんめいし八百よこせも恐ろしい……川「其なら幾賃下さる彌「己等直ぐに越すは川「チ、川流れが出来やせう彌「ナント北八彼奴等にかからかうが面倒だから一層の事問屋へ掛けて越そう手前「脇差を借しやれ北「何故彌「侍になるは「ト北八の脇差を取てさし自己の後彌「何と出来合のお侍能く似合つたるう此の風呂敷包を手前一所に持つて供に成つてきや北「此奴は大笑ひだハ、ハ、ト荷物肩に引掛け川問「彌「コリヤとん屋共大切な主用で罷り通る川越人足を頼むぞ問屋「ハイかしこまりまし

た御同勢は御幾人彌「ナニ同勢な問屋」左様で御座ります旦那はお駕かお馬
 がお荷物に幾駄程御座ります彌「本馬が三疋駄荷物が都合十五駄程あり居る
 が道中邪魔だから江戸表へ置いて来た其の代り身共駕陸尺が八尺そこ
 へ記しめさる……問屋「ハイお侍衆は彌侍共が十二人槍持鉄箱
 草履取竹馬都合上下三十人餘じや問屋「ハイく其御同勢は何處に居
 ります彌「否サ江戸表出立の節不殘召連れたが途中で追々麻疹を
 致し居るから宿々へ殘し置いたそこで只今川を越そうと云ふ同勢は上下
 合せてたつた二人じや臺越に致して何程じや問屋「ハイ蓮臺で四百八十文で
 御座ります彌「其は高値じや少とまげやれ問屋「エ、此川の賃錢に負けると
 云ふは無い馬鹿云はずに早く行くがよい彌「イヤ侍に向つて馬鹿とは
 や問屋「ハ、ハ、妙な侍だ彌「ヤア此奴侍に向つて不届千萬な……

問屋「こんた武士が其刀の小じりを見さつしやい」返れば小じり柱にあたり
 リ引きはた計りの所二ツに折れて居る故ド問屋「刀の折れたのを差す武士
 ヲトわろう彌次郎も面目なくだんまりなり彌「此のしうひやかたり
 が何處に居る者で此衆問屋を欺偽に來たか其れでは只で濟ませないぞ彌「イ
 ヤ身供は三保野屋四郎俊國が末孫だから其で刀の折れたのを差して居る
 問屋「たわ語云ふと縛り上げるぞ北「コウ彌次さん納まられへ早く行かふ
 ト手を引かれ彌次郎「ハ、ハ、途方もない氣違へだ彌「ツイやり損なつた
 次郎「スゴく歸る問屋「ハ、ハ、途方もない氣違へだ彌「ツイやり損なつた
 忌々しい」

出来合ひのなまくら武士のしるしとして

刀の先の折れてはづかし

此狂歌に双方大笑ひとなり彌次郎北八爰を逃れ急ぎ川端に至り見るに往
 來の貴賤すき間もなく此川の先を争ひ越へ行く中に二人も直段取極めて蓮

臺に打乗見れば大井川の水逆巻き目も眩む計り今や命も捨なんと思ふ程の恐ろしさ譬ふるに物なく誠や東海道第一の大河水勢早く石流れて渡るになやむ難所ながら程なく打過ぎて蓮臺を下り立つ嬉しさ云はん方なし
蓮臺に乗りしほけつく地獄にて

下りた所がほんの極樂

◎余谷より日坂へ一里二十四丁

斯く打興じて余谷の宿に至る兩側の茶屋女女休みなさい駕駕乗つては如何じや北彌次さん駕は如何じや彌イヤ氣がない手前乗るなら乗つて行かつし北其れなら日坂まで乗らうか問屋駕と賃錢を定め駕に乗るうやく小夜の中山につくこの所に駕を下りて立場茶屋に入る名物翁餡餅あり白き餅に水あめを包みて出す二人酒のみながらやうやう二ツ三ツ食ふ内雨急に降り来り限りなし

爰もとの名物ながら我々は

ふり出すあめのもちあましたり

つたへ聞くむげんの鐘は其寺に名のみ残りて今はなしと

この寺にむげんの鐘もつきてなし

今は晦日に嘘やつくらん

◎日坂より掛川へ一里十九丁

其れより日坂の驛に至る頃雨は次第に強くなりて今は一足も行れず四面も見へ分かぬ程せりに降りくらしければ或宿屋の軒にたすみ彌忌々敷強氣に降るはく北此の雨じや行かれまいこりや泊り度くなつた彌次さん見ねへ奥にはたばか大部泊つて居るチイコイツ話せるわえ宿婆サアお前ち泊らしやりませ彌泊らう上り次の間へ通る彌コレく女中素湯を一杯くん

女「ハイ、今上げます……」彌「非八昨日の薬をくれや北「何んだしん
 りいあんかん丹か待な、蟻のとわたりからひねり出して遣ふ彌「エ、馬鹿い
 やんな腹が痛くてならぬ北「ソリヤお前豆を喰やア直る彌「エ、悪く洒落す
 と早く出して呉れるい北「其れなら眞面目にソレ田まの反魂丹手を出し
 な……」彌「二ツ計りくりやれ」ガリ／＼／＼彌「コリヤ胡椒だわ……」
 辛い／＼北「ハ、ハ、彌「時に女申奥の客は女計りだかありや何んだ
 女「皆いちこでお座りまさア北「ナニいちこだコリア面白いチトいき口を寄
 て貰ひていものだ彌「最う真からう七ツからは寄らぬと云ふ事だ……」女「
 な、まだヤ少し過ぎお座りまさア彌「其れなら聞いて見てくんな己等が山の
 何に未ハッ少し過ぎお座りまさア彌「其れなら聞いて見てくんな己等が山の
 神を寄せて貰ふ女「今聞いて上げませう」トこの内ぜんもすみ女奥のいちこ
 し答へ水を取り花をさし……出雲の國の大社神の数が九萬八千七社の御神
 二人も奥に入る神おろし……」

佛の数が一萬三千、四靈の靈場冥道を驚ろかし此に請じ奉つるハア
 恐れありや弓と矢のつがひの親、一郎どのより三郎どの、ばんも變れ水も變
 れ變らぬ物は五尺の弓、一打打てば寺々の佛壇に響くのうじゆアアレハア
 儼しやく／＼宜く水を向けて下さつた……彌「お前誰れだ分られへ……」
 巫女「ハア私は水を手向どのの爲めには唐の鏡だよ子寶どの北「唐の鏡
 じや彌次さんお前のお母の事だ彌「ハ、アお母か貴女に用は無い巫女」
 アレハ唐の鏡、どんじや用はないか私や其方の枕添だあつかましくも能く
 ご問うて下さつた其方の様な意氣地無しに連添つて私ア一生食ふや食はず寒
 く成つても裕一枚着せて呉れた事はなし寒の冬も単衣一ツア……うら欲
 や／＼彌「堪忍してくれ己も其時分は面くが悪くて可愛想に苦勞をしやつた
 か残り多い北「チャ彌次さんお前泣くわハ、ハ、此鬼の目に涙だ巫女」

其つらい目に遇ひながら草葉の蔭で其方の事を片時忘れぬ何卒其方も早く冥途へ来て下されやがて私が迎へに来やうか彌「ヤアレ飛んだ事を云ふ遠い所を必らず迎へに来るにや及ばぬ……」巫女「其れなら私が願ひを叶へて下され彌「ナ、何なりと巫女「此のいちこ殿へ金を澤山遣りませ彌」ヤルともく、巫女「ア、名殘惜しや云ひ度き事數限りは盡せれど冥途の使繁ければ彌陀の淨土へ」ト弓を引く彌「是れは御苦勞で御座りました」目二百文ばかり北「暗黒の耻をトウく明地へ打まけて仕舞つたハ、ハ、時に彌次様お前飛んだふさぐの何と一杯呑ふじやねへか彌「宜からう」ト手を打ちしつと着を申巫女「今日はお前様かた何地からおざりました彌「アイ岡部から來やした巫女「ソレハお早ふおざりました」此時彌「少とあがりませぬか巫女「私は一向下さりませぬがさあお母さんお出でお釜さんも皆おなさい

まし彌「ハハアお前のおふくろかエ先づ上ろう」ト是より酒となる此いちこ飲んでもくしやアくとしてある北「何とお母さん今夜お前のお娘を私に貸してくんなせい彌「イヤ己が借りるつもりだ……」北「飛だ事だお前今宵は精進でもして遣りなせい可愛想に死んだ噂衆が彼れ程思つて早く冥途へ来よと深切に言ふじやねへか彌「ヤレ其れを言つて呉れるな北「其れだからお前は止なサアお母己等に定つた」ト娘に似たれかいると

◎掛川より袋井へ二里十六丁

東雲まだき駈路の忙がし氣に曳きつる朝出の馬の嘶きに旅勞れの目をこすりながら彌次郎北八起き出で支度する内相宿のいち子が顔ふくらがし居るも可笑く爰を立出古宮譽田の八幡を打過ぎ右に舅の畑姫が田と云へるが見ゆれば彌次郎兵衛

手からびししうとの畑に引替へ

水澤山の嫁が田ぞよき

其れく、鹽井川と云ふ所に至りけるに昨日の雨強くして橋落ちけるにや行
きかふ人自から股引を取り裾まくり上げて爰を渡るに彌次郎北八もいざやと
引連れて涉らんとする折柄京上りの座頭二人連れ此川の歩渡りなるを聞
けるにや一人の座頭犬市「モシ川は膝きりもございますかな……北左様
く而し水が早いからお前方、危い用心して涉りなせえ犬市「ハア成程
早い」ト云ひつゝ石を拾ひ川へ 犬市「イヤ此邊が浅い様だコリヤ猿市二人な
がら脚半を取るも面倒だお主者役に己をお負て渡れ……猿市「ハ、ハ、ハ、
づるい事をぬかす拳で參る何でも負る者がお負て涉るのだよしか犬市「コリ
ヤ面白いサアこいりやんごうさいく」兩人けん 犬市「サア勝つたぞく」

猿市「エ、忌々しい其れなら此風呂敷包を貴様一所に背負てソレよしサ
アこい」ト支度して脊を向ける彌次郎兵衛是れは有難しと猿市に負さる
方の岸に残 犬市「イヤ猿市何する早く川を渡さぬか」猿市向うのきし
コリヤ戯るな只今お負て渡したに又向ふへ行つて己をなぶる 犬市「馬鹿言
へ己計り渡つて太い奴だ猿市「太いと其方じや 犬市「己れ兄弟子に向つ
て言語同断な早く来て渡さぬか」ト怒る故猿市又 猿市「其れならお負りなさ
る」ト脊中を出す北八しめたと手を掛けておぶさ 犬市「コレ猿市何處に居る
猿市川「さる」ヤイ此奴は誰だ」ト北八を川の中 北「ヤアイ助けて呉れく」
ト手足をしがき流れる故彌次郎兵衛 北「座頭奴、飛だ目に遇しやがった彌「ハ
、北「全體彌次様が悪いお前が手本を出したからツイ己も彌「川へはまつ
たが氣の毒なハ、夫れで一首やらかした」其の歌に

はまりけり目のなき人と侮りて

酬ひは早き川のながれに

北「エ、聞き度くもねへ止てくんア、寒い〜」ト裸体になりふるへなが
 を渡り 彌「此所で乾しても居られぬえから着替を出して着やれ何處かで火を
 焚て貰うてあぶるがい、北「エ、忌々しい風を引いたハアクツシヨ」トぶつ
 ひながら着替を出してぬれぬれ此時先の犬市と猿市は茶屋に入りて酒を呑み
 たるを下げ掛川の宿に着く此時先の犬市と猿市は茶屋に入りて酒を呑み
 彌次郎兵衛北八是れを見て先刻の腹直しにト茶屋に入り座頭の脇へ腰を掛
 け茶を注し飲みながら座頭の酒を注でのむを子供と亭主に覺られ色々談
 判を受ける座頭は大いに立腹し酒 北「イヤ酒は飲まぬから酒代は拂はぬ茶代
 代を二人に談判す北八強情にも 北「イヤ酒は飲まぬから酒代は拂はぬ茶代
 なれば何程でも拂ふ幾錢だ亭主「其れなら茶代を置かつしやい茶が二合で六
 十四文 北「ヤ何だ茶を二合飲んで途方も無い 彌「エ、面倒な拂つて仕舞つた
 が宜い手前のする事ア何でも納まられへ足元の明るい中拂つて仕舞へ」ト目

知らすと北、六十 猿市「イヤはや飛だ人達だ大方先刻お負たも此衆である
 四文拂つてやる 彌「ハテ此方が悪いモシ了簡してくんなせえ此奴
 だ此のどう盲目か」ト力味 彌「ハテ此方が悪いモシ了簡してくんなせえ此奴
 は茶に酔と氣が強くて成りやせぬサアちやつ〜と行ふ」ト北八を無理に
 北「忌々今日に飛だ間が悪い錢を出して酒を飲みながらへこまされたがう
 まられへ 彌「ハ、ハ、己よりは餘程智恵のれへ男だ」

する事も爲す事も皆あしくばや

茶に知られたる人のしがなさ

斯く興じ打笑ひツ、やがて秋葉三尺坊への別道に至り彌次郎兵衛遙拜
 しながら

脇差の二尺五寸も何かせむ

三尺坊の誓ひたのめば
◎袋井より見附へ一里半

其より澤田細田を打過ぎ砂川の坂道に掛り程なく袋井の宿に入る兩側の茶屋賑はしく往來の旅人各々酒のみ食事などして居たりけるを彌次郎兵衛見て

此に來てゆき、の腹やふくれけん

されば布袋の袋井の茶屋

此宿端れより上方者と見へて棧留の布子に銀作の脇差を差したる男供一人を連れて後になり先になり上方『モシお前方は江戸じやな彌』左様さ上方『私も毎年下るがお江戸は繁昌な所だわいのアノ吉原へもちよこ』誘はれて晝三とやら云ふおやまを買たが何時も人に振舞はれて行くさか

い何程掛るか知らんがお前方もさぞ買ひなさるじやろからアリヤ何程掛るい彌『私も女郎買で地面の十ヶ所も無くしたは何晝三位なら片じまいで一分二朱茶屋が一分が藝者が一組で又一分として一斤くでも取れば其の代が四百ヅ、上方』ハテノ其の一斤くとは何の事じや彌『酒一斤肴一斤など、内の酒を飲めぬから別に外から取寄せることさ上方』私の往つた内はそないな事は無かつた而して何も飲めぬ酒は出しやせん飲む酒であつたわい彌『ナニそりや飲める酒でも飲めぬと云つて別に取るが江戸ツ子の氣性さ上方』そして皆借りて戻るがお江戸の女郎は現金拂ひぢやそうな彌『ナニサ附馬を連れて歸りさへすりや何程でも負す上方』ハ、ハ、コリヤお前は本店のお客ぢやないわいの……彌『ナリてさ上方』ハア其れならお前の馴染は何屋ぢやい彌『アイ大木屋の留助』上方』ハ、ハ、そりや松輪屋ぢやわいな大木屋

に其んなおやまはありませぬ彌あそこにもありやすナア北八北エ、先刻せんこくから無言だまで聞いて居りや彌次様やじさんお前まへきいた風ふうだぜ女郎ぢよらう買かひに行つた事こともなくて人の話ひなしして出放でようだい題だいばかり外聞がいぶんの悪い上方かたハ、イヤお前まへ方がたはとんとやくたいな衆しゅうぢやわいな彌やエ、やくたいでもあくたいでも放棄ほうつて置きやがれよおくつべこべと喋舌野郎しゃべるやらうだ上あがたハアこりや御免ごめんなさいドレお先さきへ参まゐらう』
トあきれて 彌や忘々しまくしいうぬ等に一番ばんへこまされハ、ハ、』
此この話わの内うちに三さん大久保おほひさほの坂さかを越こへて見み付つの宿しゆくに付きにける

◎見附みつけより濱松はままつへ四里七丁しりちちやう

北きたア、疲勞くたびした馬士うま馬うまに乗りませ』ト相談さうだんなりて馬うま 北きた此この馬うまは静しづかな馬うまだ馬士うま女をんな馬うまでござるわ北きた道理だうりで乗り心こころが宜いい馬士うま旦那だんなお江戸えどは何處どこぢや北きた江戸えどは本町ほんちやう馬士うま本町ほんちやうといふ所ところは何なんでも上うない商人あきんど計はかし

居ゐる所ところだアの北きたチ、其れそ己等おいらが家うちも家内かない七八十にんはか計はかりの暮くらした馬士うま其れそや大層たいそうな飯めしを焚たくも大抵たいていぢやないアノお江戸えどはこめ何程なんばしをります北きたマア一しやう升がふよ一合がふら好いい所ところで一合位がふらよ馬士うまソリヤ幾錢いくらに北きた百ひゃくにさ馬士うまハア本町ほんちやうの旦那だんなが米こめを百ひゃくづ買かはしやるそうだ北きた何なんとんだ事ことを車くるまで買かひ込むは……馬士うま其れそなら兩りやうに幾程なんば北きたナ壹兩いちやうにかア、斯かうと二に天てん作さくの八はちだから二十五にじゅうご二十八にじゅうはち十六じゅうろくでふみつけられて四五しごの二十にじゅうで帶解おびごかぬと見みれこめばむけんの金かねの三斗さんど八はち升しやう七合しちがふ五夕ごせき計はかりも仕様しやうか馬士うまハア何なんだかお江戸えどの米屋こめやは六ヶ敷むつかし私等わしらにや分わらない北きた附わからぬ筈はずだ己おれにも解わからぬハ、ハ、』此このこめ話わの内うちに程ほどなく天龍てんりうに至いたる此この川かはは信州しんしゅう諏訪すわの湖水こすゐより出いで東ひがしの瀬せを大おほ天龍てんりう西にしを小天龍こてんりうと云いふ船渡ふなわたしの大河たいかなり彌次やじ郎らう兵衛べゑ此こ所に待受まちうけて俱ともに此この渡わたしを打越うちこゆるとて

水上は雲より出て鱗ほど

浪のさか巻く天龍の川

舟より上りて建場の町に至る此所は江戸へも六十里京都へも六十里にて振分の所なれば中の町といへるよし

けいせいの道中なれど草履がけ

茶屋にとだへぬ中の町客

◎濱松より舞坂へ二里半十二丁

其れよりかやんば薬師新田を打過ぎ鳥居松近くになりたる頃濱松の宿に至る

さつくと歩むに連れて旅衣

吹きつけられし濱松の風

宿引「サア〜お着だア亭主」お早くおさいますソレお茶とお湯だア彌

イヤそんなに足は汚れもせぬ亭主「そんならすぐにお風呂にお召しなさいま

し北「湯灌場はどこだ彌次さん」ア先きにやらかしれえ彌「忌々敷事を云

ふ男「だお前へ這入れ宿女」此方へお出なさい」衛奥へ行く北八湯より上

り來北「ア、好い湯であつた女」ハイ御膳を上げませう」郎も湯に入りてあ

て彌次郎「彌「サア按摩さん始めて呉れイヤ時に今湯殿から見れば此の内の

禰様が知らぬが病人と見へて取亂して居るが中々美しくい代物だ按摩

ソリヤ氣狂でござるはのし北「氣狂でも大事無いの按「イヤ聞きなさい今に

念佛鐘が鳴りますは」ト此内勝手の方にてかれ按「其れ見さい彼の氣狂は

此處の内の下女でおざるが御亭主が手を付けられたをひどい嫉妬であの女を

大層打つやらけるやらの大騒ぎトウ〜内儀さんが氣が狂ひ首を吊して

死んで仕舞と亭主、結句悦び其の晩から下女を後妻にすると神さんの幽霊
 がトツ付て彼の女が又神さんの様に氣狂になり其處で毎晩百萬遍をやり居
 ります』兵衛も北八も臆病しの 北『何だ幽霊が出るかの 按』出ると 彌
 嘘だらう 按』何嘘ぢや無い此の屋根に白い者が立つて居るのを見た者がござ
 います 北『飛んだ所へ泊り合せた 按』而かもお前の椽先で首を吊したぢや
 北』ヤア是りや堪らぬ首筋がぞくぞくする様だ 彌』相憎雨がしよぼ／＼降
 り出たわ情ない 北』己らもう寝よう 按』左様なら御憐れよく』ト按摩は
 床をのべる二人洒落も云 彌』一層の事北八今から立ちぢやないか 北』何に飛
 ばす恐る／＼床に入る 彌』一層の事北八今から立ちぢやないか 北』何に飛
 んだ事を云ふ今の話で何で夜道が歩けよ』ト目計りパチ／＼し 鼠』チツ
 〱〱〱 北』鼠まで馬鹿にしやがつて小便を掛けた 彌』其の鼠が浦山しい
 お』先刻から小便を堪めて居つたら何だか 柔かな物が足にさばつた 北』何

た／＼ 猫』ニヤアン 彌』此の畜生めシツ／＼ 鼠』困つた事があるもつ
 小便かもある様だ 北』お互ひに難儀の目に遇つた 彌』何んと思ひ切つて一所に
 行かうか 北』雨戸を明けてやらかさすべし 北』彌次様 彌』手前へ 北』何が出る
 もんだ』ト戸を開けると庭の先に白い物が 彌』何した 北』何した 所か彼
 れを見ねえ白いものが立つてそして腰から下が見えぬ 彌』ドレ／＼』ト外へ
 是もキヤツと 北』彌次様何したオ、イ彌次様ヤアイ』此の聲に亭主勝手より
 云つて仆れた 北』彌次様何したオ、イ彌次様ヤアイ』來りて漸々に介抱して
 正氣に 亭主』何うなさいましたか 北』イヤ小便に行きました 所彼所に何か
 なる 亭主』何うなさいましたか 北』イヤ小便に行きました 所彼所に何か
 しろものゝ居て其れで此の通り臆病な』ト亭主出で是れば白きじばんをほし
 び 亭主』ハイ御休みなさいませ 彌』思々しい大きに膽をひやした』

ゆうれいと思ひの外に洗濯の
 襦袢の糊がこわくおぼえた

始めて心落ちついてとろくと一睡の夢を結ぶに程なく、鶏の聲に早出の馬の鈴の音シヤン／＼彌もう夜が明けたそうなる。ト北八と共に起出で用意を拜みて

梅干の諏訪の社ときくからに

守らせ給へ皺のよるまで

程なく蓮沼つぼ井村を打過ぎ舞坂の驛に至る

◎舞坂より新居へ海上一里

是より一里海上乗合船に荒井まで打ち渡るげに旅中の氣散じは船中思ひ／＼の雑談高聲に語り相笑ひ罵りて打興じ行く程に乗合の人々も次第に咄し勞れて居眠りする物あり又風景に見とれて只もくれんとして居るもありこの時のり合船中に親父何彌何が見えません親父アノ蛇が一疋無

くなりました北ヤア飛んだ事を云ふ人だ蛇だとア何だ……親父何だて生きた蛇でござる乗合ヤア／＼彌貴様飛んだ物を持つて来たマア蛇を何うする北氣味の悪い此所に居らぬかト船中總立乗合ヤア此の板子の下にとぐるを巻いて居るわッレ／＼其の荷の下へオヤ／＼此所へト騒ぐ内親父てふとこ北是れ／＼飛んだ事をする其れを懐へ入れると又這出すから海へ放棄りな親父インニヤ私は讃岐の金比羅様へ参る者だが道中路金に盡さ困つた所幸ひ此の蛇を捕へたから蛇様つかひになつて一文づゝ貰つて行くから蛇は商賣道具ぢや彌何は商賣でも人の迷惑ぢや船頭なせこんな者に乗せた……船ハア私だつて此人が蛇を持つて居るとは知りませぬ客人皆々コレ親父何んにも云はずに多勢に無勢早く放棄つて仕舞ひなせい親父イヤダ北此の親父め貴様も海へ投込むぞ親父何に投げるなら投げ

る我にも手があるぞ』ト争ふ中北八親父のむなぐらをとる蛇がにふる／＼と
る彌次郎もキヤツトにける北八脇差の先にてへびの頭をつくへび脇差にまさ
つく北八へびを海中へ投げると共に手がすべり脇差も海へ落つるへびは浪に
捲れ見えなくなる脇差は竹光作りとてダン／＼流れて 皆々『ア、是れで落付
行く北八面目なくして居る親父此れを見て笑つて居る 皆々『ア、是れで落付
いた面し御氣の毒な事は貴下のお腰の物だ親父『私が此の年になるが脇差の
なが 流れろのを初めて見た北』エ、尻の穴のせまい親父だ奥州衣川で辨慶が
た 立ち往生した時ア太刀も具足も流れたと云ふ事ぢや親父『ハ、こりや横
腹が痛くなり申すは柳橋と云ふ本に『衣川さいづちばかり流れけり』と
いふ句がある辨慶の差した腰の者は金で作つたから流れぬ北』エ、言せて
置きやア能くしやべる此の死にそこないめ』ト又立上る 船『サア／＼お關所
前でござる笠を取つてひさを直さつしやいソレ／＼船があたりますぞ 皆々』
ヤレ／＼無事に着て目出度い／＼程なく船はあら井に着くのり合人皆
な上る關所を通りて彌次郎兵衛の歌

竹篋を棄てししまひし男ぶり

ごくつぶしとは最う云はれまい
其れより二人は荒井の宿に酒酌みかはしてあしを休めぬ

◎荒井より白須賀へ一里十六丁

由縁齋貞柳の狂歌に「螺貝の出でし昔しは知らねども今吹くはよき道風
なり」けりと詠みしは東海道に名高き今切の渡しになん其の上明應の頃
山の奥より螺貝數多ぬけ出で其れより海上悪しくなりしを元祿元年申
公の命によりて海上に數萬の杭を打ち蛇籠を伏せ往來渡船の難澁を救ひ
給はりし御惠の有難さに風和き浪低くなりて渡るに難なく彼の彌次郎北八
を打渡りて荒井の驛に支度を調へ名物の蒲焼に腹をふくらし休み居たる
げにも往來の貴賤絶間なく舟場急ぐ旅人は足も空に出舟を呼ぶ聲に走り間屋

へ掛る宰領は口入釜敷課役をふる馬差について罵しる旅籠屋の袴腰は横丁に枉げて走り茶屋女の前だれ筋違に引すつて飛ぶ長持人足横に立つて謠ひ馬士後ろを向きてひよぐりながら行く道すがら唄「うらが性根は濱名の橋よエ今は途絶えて音もせぬ」ヨエドウ「茶屋女」お休みなさりませ
 「この時侍一人彌次郎北八の休みを
 侍「モウ何時ぢやろう女」九つ半でもおざりましよ馬士「昨日の今時分だるか侍」支度致そう何ぞあるか
 女「鰻の蒲焼がおざります……侍」何ぢやお内儀の蒲焼か馬士「御亭主の泥龜煮はないかハ、時に旦那お荷物は此所へおきます侍」此の貫さし
 け爰へたこれ……馬士「ハイ」モシ旦那様一寸お願いがござりますへ、何卒御酒を一杯食べたうござります侍「ハ、酒手かいや罷りならんぞ道中御定法の賃錢を拂つて罷り通る別に酒手など決してならん事ぢや馬士「左

様でござりませうが其所を何卒侍「然らば汝に入文の遣はそう」ト貫さしぬひて馬士「ハイせめて十六文もくださりませ侍」然らば身共了見の以て今四文遣はさう」ト錢四文投げ出す馬士侍「コリヤまで」南無三寶彼奴最う何所ぞへ行きをつた身共大切の草鞋を馬につけておいたが持つて行きをつた残念な江戸まで履ける草鞋ぢや物」ト小言アツ「北」モシ貫下お江戸へおくだりてござりますか侍「左様」北「今承まれば草鞋をお江戸までお履きなさんと見へましたが怪しからの道お上手でぬらつしやいますの侍」イヤ身殿手作致した草鞋ぢや程に一足あれば何時も江戸まで行戻りはきをります彌「私も一昨年松前まで履いてまゐり又去年長崎まで履いてまゐるそして又今度履いて來ましたが御覽なさいませ侍」ハテお前は身共より道が功者ぢや何う致せば其の様に履けますな彌「ナニ草鞋は履きつめにし

てきれませぬが其の替り私はどうも脚絆が切れてなりませぬ侍『其りや如何して……』彌『私は旅へ出ますと馬にのりづめに致しますから北『おきやがれハ、彌』サア行う貴下御ゆつくりとアイ御世話』と二人が籠にのり行く程に高師山橋やじらうれいきやうか本ノ北に見ゆるに彌次郎例の狂歌に曰く

鶯がうむ高師の山の冬はさぞ

雪に眞白く見違へやせん

◎白須賀より二川へ一里十六丁

入り口の茶屋女が呼びたるを彌次郎駕籠の中より

出女の顔の黒きも名にめでい

七難かくす白須賀の宿

此の宿を打過ぎ程なく汐見坂に差しかゝる是れなん北は山續きにして南は

蒼海漫々と見え絶景限りなく
風景に愛嬌ありてしほらしや
女が目元の汐見坂には
北八かく口すさみたるを『ハア旦那豪い歌人ぢやなアレ向ふの山を見さしや
駕籠の先棒聞きつけて
りませ鹿がなりますは北『ドレ』是れば面白い 先棒『お江戸の旦那畜
生を見て珍らしがつて昨日も發句とやらを言つた人があつた北『おれも今
鹿で一首作つたが貴様等には馬耳東風だが斯うだ』

奥山に紅葉ふみわけなく鹿の

聲聞く時ぞ秋は悲しき

北『何と奇妙か』後方『旦那豪い』ざれ歌が直ぐにセヨツと出るとは豪
い北『一寸した所がこの位イヤ貴様たちあまり響めて呉れるから酒

を飲ましたくなつた爰は建場か先棒^{さる}猿が番所^{はんしよ}でござるサア棒組^{ぼうぐみ}一ぶく吸つて^ト角^{かく}に下す 北^{きた}皆な一杯^{はいづ}宛^{のま}呑つしオイ女中^{ぢやうちう}此所^{こゝ}へ酒^{さけ}を一升^{しやう}でも二升^{にしやう}でも味^{あじ}い着^きをつけて出してくん^な彌次^{やじ}郎兵衛^{らべゑ}が彌次^{やじ}郎^ら何^{なに}さ一寸^{いちゆつ}飲^のませるが何時^{いつ}でも此^こ位^{くらゐ}の者^{もの}だ^ト先^まに拾^{ひろ}つ風^{ふう}な事^{こと}を云^いふな北^{きた}何^{なに}さ一寸^{いちゆつ}飲^のませるが何時^{いつ}でも此^こ位^{くらゐ}の者^{もの}だ^ト先^まに拾^{ひろ}つ本^{ほん}見^み彌^{やじ}手^て前^{まへ}其^{その}れを皆^{みな}なお^おこるか 北^{きた}知^しれた事^{こと} 彌^{やじ}面^{おも}白^{しろ}い己^{おれら}等^らも御^ご馳^ち走^{そう}にせ^る 彌^{やじ}手^て前^{まへ}其^{その}れを皆^{みな}なお^おこるか 北^{きた}知^しれた事^{こと} 彌^{やじ}面^{おも}白^{しろ}い己^{おれら}等^らも御^ご馳^ち走^{そう}にな^らう^ト着^きを持^もち出^です北^{きた}八^はの先^{まへ}棒^{ぼう} 『是^{これ}は有^{あり}難^{がた}うござ^いますコリヤ^く棒^{ぼう}組^{ぐみ}皆^{みな}な來^きな^さる先^{まへ}刻^{とき}の猿^{さる}丸^{まる}太^た夫^ふ様^{さま}が御^お酒^{さけ}を下^{くだ}さるは^ト駕^か屋^や四^し人^{にん}ト彌^{やじ}次^じ郎^らもだ^んま 彌^{やじ}サア^く御^ご亭^{てい}主^{しゆ}幾^{いく}價^{ぐら}だの…… 亭^{てい}主^{しゆ}ハイ^く酒^{さけ}着^きで三^{さん}百^{ひゃく}八^{はち}十^{じゅう}文^{ぶん}北^{きた}コリヤ豪^{かう}氣^ぎに喰^くやが^つた^ト錢^{ぜに}を拂^はつて仕^し舞^ま 駕^か屋^やヤア先^{まへ}刻^{とき}の一本^{ほん}の錢^{ぜに}は如^{ごと}うした棒^{ぼう}組^{ぐみ}オ、其^{その}れ^くモシ^だ日^{にち}那^な貴^き下^かの乗^のつてござ^る布^ふ團^{だん}の^あ間^まに四^{もん}文^{ぶん}錢^{せん}一本^{ほん}這^{はい}入^いつて居^ゐましたが在^あるか見^みて下^{くだ}さりませ^ト云^いれて北^{きた}何^{なに}爰^ゑ

にか見^みえないわい…… 駕^かナイ事^{こと}はあ^るめえ慥^{たし}かに入^いれて置^おいた彌^{やじ}先^{まへ}刻^{とき}見^みりや北^{きた}八^は奴^めが布^ふ團^{だん}の下^{した}から出^だしてゐ^た錢^{ぜに}ぢやないか 駕^か其^{その}でござ^ります^ト北^{きた}八^は悪^{あく}い事^{こと}を云^いふと心^{こゝろ}中^{ちゆう}で彌^{やじ}次^じ郎^らを白^{しろ}眼^{がん}む彌^{やじ}次^じ郎^ら知^しらぬふりしてか 北^{きた}オ、この横^{よこ}を見^みる北^{きた}八^は仕^し方^{かた}なし慥^{たし}中^{ちゆう}より錢^{ぜに}一文^{いちぶん}たばそつと下^{した}に入^いれて 北^{きた}オ、爰^ゑにあつた^ト駕^かサア棒^{ぼう}組^{ぐみ}此^この元^{げん}氣^きでや^らかさう^ト駕^かをか^つぎだす彌^{やじ}次^じ郎^ら所^{ところ}にてか^しわもちの^ト名^な物^{もの}なれば彌^{やじ}次^じ郎^ら

ひらふたとおひし錢^{ぜに}は猿^{さる}がもち

右^{みぎ}から左^{ひだり}酒^{さけ}に取^とられた

かく笑^{わら}ひ行^いく中^{ちゆう}に境^{さかひ}川^{がは}と云^いふに至^{いた}る此^こ所^{ところ}は遠^{えん}州^{しゅう}三^{さん}河^かの境^{さかひ}にて橋^{はし}あり彌^{やじ}次^じ郎^ら地^ぢ口^{ぐち}にて

遠^{えん}州^{しゅう}へ續^つきあ^はせ^た橋^{はし}なれば

にかはの國^{くに}といふべかりける

程なく二川の驛につきにけり

◎二川より吉川へ一里半二丁

此の所家毎に強飯を商ふ見れば

名物は云はれどしるき強飯や

これ重箱のふた川の宿

りやうがはちやここひこみ
兩側の茶屋毎に人を見て呼びたてる女「お休みなさい御吸物でも酒でも御召し遊ばしやれ」殿様の合羽籠へ突然つまづく中間怒りて喧嘩をふつかける兩人ほと／＼困る折から北八の竹光を取らんとする此の内幸ひ殿様の御立ちと見えてお立の拍子木カチ／＼其れやお供そろひだと御同勢つれて喧嘩もそれぎりとなる是幸ひと北八 彌「ハ、おかしい喧嘩だ」

わきざしのぬきみは竹と見ゆれども

喧嘩にふしのなくて目出度

其れより此の宿をたどりゆく早くも大岩小岩を打過ぎ岩穴の観音を伏し拜みて

行きがけの駄賃に拜む観世音

尻暗いと岩穴の中

げにも旅の氣散じは差合くらす高聲に話ものして行く中に流石に退屈のあくびしながら北「ア、勞れた少しばかりの風呂敷包や雨合羽も中々邪覺になるものだコウ彌次様御前の荷とわしの荷と一所として坊主持にして行かう彌「コリヤ面白い幸ひ此所に宜い竹が捨てゝある」ト拾ひ取つて二人のり付 彌「サア／＼北八手前から持つてこい」此の内後へ比丘尼三歌「身をやつす賤が思ひを夢ほど様に知らせたや……北「鮮麗な聲がする」かへる北「ヒヤア比丘尼だ／＼サア彌次様渡しやす彌「忌々しい北「人に荷を持た

せるは中々長い事ぢや是でお供をつれた心持だヤア〜此奴まん更らでも
 ない彌次様見れえ此方の比丘尼が己れを見てアレニコ〜と愛嬌がこぼれる
 よ畜生め彌愛嬌のよいぢやねえアリヤ顔に締りのれえのだ此の内若い
 比丘尼か北八のそばへよりて比丘モシあなた火はおざりませうか北アイ
 く今打つてあげやせうトすり火打出を北サア〜御上り時にお前方何
 所へ行きなさる比丘尼名古屋の方へ参ります北今夜は一所に泊まりたい
 の何と赤坂まで行きなさい一所にしやせう比其れは有難う御座います若し
 何卒煙草を一服下さりませ頼と買ふのを忘れました北サア〜煙草は爰に
 皆んなあげませう比其れではあなた御困りでしょう北何に私や止さ時
 に御前方の様な美しい顔で何故髪を剃りました本に惜いものだ比私共が
 髪があつたとて誰人も構ふ人はおざりませぬ北無いものか私一番に構ふ氣

だ何と構はしてくんなさらぬか比オホ、北早く一所に泊りたい彌次
 様此の先の宿へもう泊まらうぢやないか彌馬鹿な事を言へト小言を云
 程に大内坂を打過ぎ二軒茶屋に北コレ〜御前達何所へ行く比是れから
 至ると比丘尼わき道へはいるに北御前達何所へ行くト野道をさつさと行
 お別れ申します私共は此の在廻へ廻つて参りますからト北八あきれて見送
 る彌次郎彌ハ、北八御前今日大分つけがわるいぜ北エ、飛んだ目にあ
 おかしく彌うつかりとして居る後から北アイタ、目を明けて通れ誰
 った業腹なばつたり行きあたる旅人彌オット荷物を渡した〜北コリヤ初まられえとアツ
 だト見れば旅の僧が吉田の宿に至る

◎吉田より御油へ二里半四丁

旅人をまれぐ薄のほくちかと
 爰も吉田の宿のよれたち

斯くて此のあたりより早日の傾むき暮れんに近ければやれ急がんとて草臥し
足を早めてたどり行く道すがら 北『彌次様どうだ埒が明ぬえの 彌『大いに草
臥た 北『何と夕の泊りは中位の宿であつたが今夜は斯うしよう赤坂まで
さきへ私が行つて宜い宿を取りませうお前草臥たなら後から靜かに來なせ
え宿から迎へに出させやしよう 彌『其れよろしかる而し宿は如何でもよいか
ら 女をんなのありそいな宿にしやれ…… 北『吞込山々』 北八先にかけて行く
がて御油の宿につく

◎御油より赤坂へ十六丁

早や夜に入りければ 兩側より留女出て引く儘に彌次郎引かれ行く其の時
の歌に

其の顔で留めだてなせば宿の名の

御油ごゆるされいと逃にけて行ゆかばや

彌次郎あまり草臥ければ先づ是の端に腰かけたるに 主の婆 婆『アイ茶ア參
りませ 彌『モシ赤坂まで最少しだの 婆』たつた十六丁 御座るがお前一人な
ら是の宿に泊らしやりませ是の先の松原へ悪い 狐が出て化かされ申すは
彌『而し是へ泊まり度くもつれが先へ行つたから仕方かねえ』ト元氣をつけ
て行く程に暗くして氣味悪く眉 『ケン』 彌『ソリヤ鳴きやがる已れ出て見
につばして歩く内狐のなくこゑ 『ケン』 彌『ソリヤ鳴きやがる已れ出て見
る打死して呉れる』ト力味返りて行く北八も先へ行き狐の出る話を聞き化さ
るに其れ 北『チイ彌次様か 彌』オヤ何故御前此所に居る 北『宿取りに先行か
うと思つたが 惡狐 狐 が出ると思ふ事だから一所に行かうと思つて待ち合せ
た』ト云ふと彌次郎は狐が北八に 彌『糞を食へ其んな手食ふのぢや無えは
北』オヤお前何を云ふそして腹が減つたら餅を買つて來たから食ひなせえ

彌『馬鹿な事云へ馬糞が食はれるものか北ハ、己れだわいな彌』己れだ
 もあるもんか北八によく化けやがつた』ポカン北『アイタ、彌次様是りや
 どうする彌』痛いか正體顯はせ』ト三尺手ぬぐひをとき北八が手を縛
 彌『サア、先へ立ち歩け』北八をく、り赤坂の宿に入る何れの宿も客
 のものもモウ来さう』を留めて角にたつ女も見へず彌次郎は迎ひ
 なものと迂路つく内北『コウ彌次様宜加減に解いてくんな外聞の悪い人が見
 て悪いわな彌』エ、糞を食へハテ宿は何處だ北『己れが此所に居るもの誰が
 先に宿を取つておくものか彌』又ぬかしやがる宿屋『貴下は御泊りでござり
 ませぬか彌』イヤ連れの者が先に來て宿を取つたが知らぬか北『其の連は己
 だわ彌』澁とい奴だ最宜い加減に尻尾を出しなれイヤマテ、犬がなるコ、
 しろく、白々ア、犬が來てもシヤア、と居るから扱は誠の北八か北『馬鹿く
 しい彌』ハ、斯う云ふもの、化されてゐるぢやないか何だ合點がゆかぬ心

持だ』ト手をた彌『亭主、亭』ハイ、彌』是は何所だる亭』赤坂宿で
 彌』又欺しやがる』ト眉毛ぬ彌』御亭主様此の家は卵塔場ぢやねえか亭』
 エ、何をおつしやる北ハ、面白い……下女』お湯にお召なさい北』サ
 彌次様湯にでも入つて氣を落付けるが宜い彌』畜生が糞壺へ入れよと思つ
 て亭』ナニ湯は清水で綺麗でおざりますから』ト勝手へ行く女』女』モシおさ
 びしくば女郎様でも買ひなさる彌』馬鹿云ふな石地藏を抱いて寝るのはい
 やだ女』ホ、……北』其んなら先に湯に這入る』湯殿に入る此』亭』時に
 お客様今晚は私の家に祝事がお座りますからお酒一つ上げませう』酒
 が出彌』おかまいなさるな何ぞ御目出度事かな亭』ハイ私の甥めに嫁を貰ひ
 ました今晚は婚禮でござるから』ト立ち行く北』北』何んだ大分御馳走だな……
 ……彌』コリヤ愈々欺ますなモウ据風呂へも入るめい北』エ、お前も執念

深い彌こ此この酒さけは馬うまの小便せうべん此この卵たまごは色合いろあひが氣きになるト此内奥には婚禮の祝にぎはしく謠ひの

聲こゑ『四海波かいなみしづ靜しずかに』と聲こゑがする北きた『ヤンヤア彌やコラ八釜敷やかまし北きた八釜敷やかましと云つてお前まへ先刻さつぎから盃さかずきをばなさない少ちよつと此方こつちへ廻まはしなホンニ馬うまの糞ふん小便せうべんのと云つて一人ひとりで喰くちやねえかハ、彌や己おのら正直しやうぢきはかされた氣きになつて居ゐたが今思いまおもやアそうでもない頓とんだ苦勞くらうをした北きた『エ、馬鹿ばからしいハ、』又またこの内膳うちぜんも出る『千代ちよも變かはらじ幾いくちよ千代ちよも榮さかふ榮さかふる松梅まつうめの二葉ふたはの竹たけの世よをこめて老おいとなるまで結むすぶぞ樂たのしかりける目出度めでたし三國さんごく一の嫁取よめこりすまいたしやんくく』ト手てを打うつてさいめき女おんな貴あなた郎方らたもうお床とこを取りませうか彌や其そんな事ことにせう北きた『コレ女おんな中ちゆう祝しゆうげん言げんはもうすみましましたか定めし嫁御よめごは美うつくしからう女おんなアイ婿むこ様さまも好をこよめさま男おとこ嫁よめ様さまも美い女おんなお氣きの毒どくにはあちらの座ざ敷しきに寝ねやせるから睦言むつごんが聞きへませう彌や何なんだ其その手合てあひと割床わりどこは困こまる北きた此奴こいつ

は大變たいへんく女おんな『モウお寢やすみなさい』と出でて行ゆく二人ふたり其そのまゝ寢ねるに早はややとな新夫しんぷ婦ふは寢ねに來きる聞きけば元もとからこひでもらつた様子ようすと見みえ中々ちゆうぢゆう初對面しつたいめんにはみへす突つくやらつれるやらひそくと話わすこゝろまで手取てとりに聞きへる彌や『エ、飛とだめにあはしやがる北きた』ホンニ人ひとの心こゝろも知しらないで怖おそろしく睦むつましいいな畜生ちゆうしやうめ奴やつ彌やサア話はなし聲こゑがやんだから六ヶ敷むつしと段々だんぢやうふとんからのり出でしてソツトおきて襖ふすまのすきからのぞく北きた八はちも裸はだかのまゝにはひおきてのぞきにかゝる北きた『コッ彌や次じ様さま嫁よめが美うつくしいかおれにも少すこし見みせて呉くれな彌や靜しずかにせ肝腎かんじんの所ところだ北きた『ドレく見みせれえ』ト人ひと立ちさわぐ折をり襖ふすまバツタリはづれて向座敷むかうざしきに倒たおれ二人ふたりも其その上うへにころかる彌や次じ郎らうちやと逃にげて我わががとこに入り知しらぬかをして北きた八はちまごくして居ゐる内うち婿むこに捕とえられせん方かたなく御ご婿むこ何なんだ痛いたい北きた『手水てうづに行ゆくとてつい戸迷こまど免まなさいとあやまる婿むこは北きた『手水てうづに行ゆくとてつい戸迷こまどひつにお氣きの毒どくをしました全體ぜんたい此この家うちの女中おんなぢゆうが惡わるい夜座敷よるざしきの眞中まんなかにあんどうをおくから其それにつまづいたあゝ小便せうべんが洩やうる様ようだ一寸いちゆん行ゆつて來きませう婿むこ『いや早はやあきれた人ひとちや夜具やぐも布團ふだんも油あぶらだらけになつたコラくおさん誰だれか來き

て来れる』ト呼びたるに下女火を持つて来たり其の邊をかたづけける北八手持けるに彌次ふさたによう／＼襖あはせを元にはめわび入つて元の所に入り稍やねか郎おかし吹き出して

ねて聞けばやたらおかしや唐紙からかみと

ともにぼづれしあこの掛金かけがね

北八も夜着よぎの中より顔出して

婿嫁むこよめのねやをむしやうにかきさがし

我は面目われめんもくうしなひしとて

斯かくも興きようじて夜もふけゆく程ほどに双方さうほう靜しずかになりいびきの聲こゑのみ高たかくなり

◎赤坂あかさかより藤川ふぢがはへ二里九丁にりちゅう

鷓鴣にはざり鳥こゑの聲こゑ萬戸ばんこに響ひびきて曳ひきつる一課役くわやくの馬うまの嘶いなき勇いさましく郎すてに夜も明け

れば彌次やぢらう郎らう北八きたはちも起き出いで支度したくご調ていへて早くも赤坂あかさかの宿しゆくを立出たちづるに此この宿しゆくの出端しゅたんよりあとになり先さきになり三人連にんづれの旅人たびご是これも江戸えどの者ものと見え
て勇いさみ肌はだの捲まき舌じたにて話はなし行くを聞きけば一人ひとり夕ゆふべの泊とどまりはおかしかつた
な人ひと『其それ何なんだか奥おくの間に泊とどつて居をつた奴等やつらが氣きがきかない野郎やらう共どもだ宿やどに
婚禮こんれいがあるを羨うらやましがつて襖ふすまの間あひだから窺うかがつて襖ふすまをぶツ倒たはしたべら
棒ぼうだ』この連中れんちゆう彌次やぢ郎らう北八きたはち同宿どうしゆくとみへ切りと彌やぢ『コレ貴様きさまたち先刻さつきから聞き
てありや己等おれらの事ことをべら棒ぼうだア何んなんの事ことだ……先まづの『其方衆そつちゆうの事ことぢやない
此方こつちの事ことだ彌やぢ』コツチの事ことが夕ゆふべの宿やどの事ことをぬかすだらう其襖そのふすまを打倒ぶつたはし
た野郎やらうと云いつたは己おれの事ことだ旅人りょじん『ハア此方こなた其そのの筥へら棒ぼうか彌やぢ』イヤこいつ悪わるく洒しゃ
落れやがる旅人りょじん『糞くそを食くらへ彌やぢ』何なんだ糞くそを食くらへコリヤ面白おもしろく食くらふから持もつてうし
やアがれ男おとこ『サア持もつて來きたから食くらへ』彌やぢ』イヤ馬うまの糞ふんはさらひだ旅人りょじん』

きらひと云ふ事があるものか是非食はせにやおかぬ』ト三人にて彌次郎にか
入り 北『イヤ最う御免なさい誰れでも同前でござりやす 三人』ハ、堪忍し
てやらう』ト彌次郎とても叶わぬとこ、うちきり、きなかしは、うちす、やまなか、いた
云ふて口の中でぶつくさ此の内桐の木中柴を打過ぎ山中に至るこ
いは麻のあみ袋早なほなどを商ふなれば北入

みほとけの誓ひと見へて寶藏寺

南無あみ袋は此所の名物

其れより此宿をすぎ出放れの怪しげなる茶屋に休みて 北『何だか強敵に虫
が冠る婆様素湯はあるめいか 婆』イヤ素湯は御座らぬ水をしんぜませうか
北『薬を飲むのだわコリヤ堪まらなくなつた時に雪隠は何處にある 彌』何所
とつて上を見たとて雪隠が壁の上にあるものか裏へ行かつしやれ 北『突き
あたりに見へる』ト用をたして出であたりを見ればものおきを家とせる
家に十八九の娘髪は亂してあれども中々の上代物なれ

ば北八例のわるじやれにてこ 北『モシ一寸御無心ながら水を少と』手を洗ふ
の内にはいりわらひかけて 北『コレ姉さん何を笑ひなさるのそして一人かへ無用心な』ト四方
笑ふのみ 北『無し北八煙草をすひながら娘を呼ぶに只笑ふのみ手を出して引くに逃
げる様子もなく笑ひある故最早しめたと有難がりぐつと引寄せるに小供が見
付てヤア彼人は氣狂と色事してゐる大聲にわい／＼ 娘』エ、此男放さん
北八驚きにげんとするに北八に娘すがり付き放さぬ 娘』エ、此男放さん
北『是は情無い』ト無理にはなさんとする 親父』若い女を捕まへて何
をするのぢや 北『何もせぬ用たしに這入つて水を貰つたけさ親父』インニ
ヤ彼れは氣狂でござる主は氣狂を捕まへて 慰もふとしたのに違へあるまい
北『飛んだ事を云ふ 親父』インニヤ 慰みに掛つた只は濟まさぬ』ト大騒ぎ
前より物かげにきゐたりしがおかしくも 彌』御免なさい 私は此男の連
氣の毒にもあるしそろ／＼出掛けて彌次郎 彌』御免なさい 私は此男の連
れの者だが是の男も少し氣がふれてゐますから了簡してやつてくんなさい
北『何だ己れを氣狂だコリヤ面白いハ、ア降るは／＼ア、／＼花の吹雪が降

りやがつたうんきんたらうんく、彌ア、御覽じろ彼の通り其のくせあの顔で色狂ひさ其れだから女と見るとコロ／＼として本に恥を云はにや利が聞へませぬが是奴は私の弟でイヤモウ因果なこつたア御座りやせん親父聞けば私も悲しい見さつしやる通り只一人の娘が此の病で私は大きな苦患でござる彌察しておりませア馬鹿野郎何れ笑つて居るト親父をして北八を連れて早くこの場をのがれはては兩人にて大笑ひとなる

くどきたる 娘はほんの氣狂に

こちや間違ひとなりし目ちがへ

かく打興じて立行く道すがら彌北八手前飛んだものだ氣の違つた娘を捕へて業晒しの事だ北面目次第もねへ而し私までも氣狂にしたのはありや彌次様一生の上出来だぜ』と打笑ひつゝ行く程に小豆坂を過ぎ岡の江遊

泉寺を打越して大平川に至る

岸に生ふ芹のあをみに小鴨まで

水にひたれる大平の川

其れより大平村を過ぎて岡崎の澤に至る

◎岡崎より池鯉鮒へ三里三十丁

是は東海道に名立たる一勝地にて殊に賑はしく兩側の茶屋何れも手籠に見へたり亭お休みなさいませお飯も諸白もござりますお這入りなさりよアしく彌ナント腹がすこし御座つた此所でお休みとやらかさう』や屋へば女宜うおいでなさいました彌姉さんお飯にしよう何ぞ味いものはないか女ハイ鮎の肴が少しあります北ナニ鮎のなますか女ヲホ、』笑ひながらあゆをつ 彌ドレ、是奴は味いぞして豪氣に白飯だ北エ、外

聞の悪い事を云ふア、女が笑つてゐらア彼奴目は顔中が笑凹だわへ彌笑
凹なら良いが頼ペタが凹んで踏返しの馬蹄石とも云ふもんだ北ハハハ例
の悪口タラ／＼洒落を云つて居ると是時奥座敷に近在の客三人ばかりこの宿
に流連して返り掛けらしく相方の女郎この所まで送り来りしとみへ別れの酒
もり大騒ぎにてタ彌次郎北八奥座敷をのぞいて見るに一人の客の聲とし
ッテンドツテン 客「コレ／＼大兵 盃は如何するのじや 太「仁平の側にあるは 仁「オト
て客「コレ／＼大兵 盃は如何するのじや 太「仁平の側にあるは 仁「オト
、是様にうけては 太「チツト受けた／＼酔た元氣で戻らふか但しは榭屋かど
うじやいな…… 女 郎「何んだあの太 兵 様は酔なされるとナア彼のよふな
事を云ふじや外へ遣りますことはならまいわいな 太「イヤ／＼斯かる折から
橋屋で手形受取つた品物があるから行かざなされるまへ 女郎「ムウそうかい
し 仁「そうとも／＼テツトレトツチン兼て手管と私しや知りながら欺されて
咲く室の梅ハハハ、」馬士ども庭より奥へ通り 馬士「旦那方向ひに参りました

た三人「御太義く」ト各々ちや屋を出てから尻馬に乗り歸る女郎各々送り
ら尻馬で歸るもおかしと打笑ひながら
三味線の駒に打乗り歸るなり
岡崎女郎衆買ひに来ぬれば
斯くて二人も此所を立出て宿はづれの松葉川を打過ぎ矢矧の橋に至る
欄干は弓の如くに反橋や
是れも矢矧の川に渡せば
茶屋「名物の砂糖餅お召し
其よりうたふ坂町尾崎の郷今村の建場につく
なさりまアしお休みなさりまアし彌「オイ是の餅は何錢宛だ 亭「三文でおざ
ります 北「いや三文では高い様だ何と御亭主斯うせぬか是れを二文に買けて
くんなせえ其の替り其の方の丸い餅は四文に買ひやせう」亭主是れはへんな
事を云ふがどちら

にしても損が 亭主「宜ふおさります御取りなさいませ」北八懐中より
れば丸いのを買はふと思つたが二文あるから此のうづら餅にしやう」取つて
食ひなが 彌「ハ、是奴北八出来した流石の亭主 膳をつぶしてをつた北
何んと智慧はすさまじかるう…… 彌「籠棒め己れも其の位の事をしかれ
るものかハ、」と笑ひながら

わづかでも欲にはふけるうづら焼

三文ばかりの智恵をふるひて

斯く興じて笑ひつゝ西田街道より半里ばかり北の方に名にしおふ八ッ橋の
舊跡を思ひ出し

八ッ橋の古跡をよむも我々が

およばぬ恥をかきつばたかな

◎池鯉鮒より鳴海へ二里半十丁

程なく池鯉鮒驛に至る 馬士のうた「宮で泊るかお龜にしやうかナア但しや
崎よい女郎衆ナアドウ」彌「思々 敷草鞋で足を痛めた少しの間 草履
で行かうモシ」此のわら草履は何錢だれ 亭主「アイ」十六文でおます

彌「こいつは安い」是の亭主伊勢物 亭「アイお安うおますわいな 私所の草
履は丈夫で切れや致しませぬ 彌「何しる安いものだ」草履を見て 彌「イヤ
爰の草履はちんばだわえ片方 大きくて一方小さい様だコリヤ八文宛では大
きな方は安い小さい方は高い何んと御亭主大きな方を九文に買やすから小
さい方を七文に買けてくんない 亭「アイ宜うおますお召なされ 北「南無さ
ん錢が足りない一足買ふと思つたがたつた七文許りきやれえからアツチの片
方のみ買ひやせう 彌「ハ、真似をしやがる餅なら宜いが草履の片方が何に

なる 亭『左様でおます片方は上げられませぬ 北『片方を賣らぬとは田舎だ
け物が不自由だ 彌『江戸だつて片方賣るものか 亭『何なら是れになさいま
せ是れなら一足七文にしてあげませうわいな 北『エ、馬の靴がはけるものか
彌『一足買ひな前片方買つて何うするつもりだ 北『又先へ行つて買はう
亭『ハ、十四文に致しませう一足お召なされ 北『貴様早くそう云へば宜
いのに』ト漸く草履をとりのへてわらじと 斯く此の宿を打ちすぎ早くも八丁
噺さなげ 明神を伏しおがみ今 岡村の建場に至る此所はいも川と云ふ麵
類の名物 至つて風味よしと聞いて

名物のしるしなりけり往來の

客をもつたぐいも川の蕎麥

其れよりあなふ村落合村をすぎゆき有松に至り見れば何にしおふ絞りの名

物種々々染地家ごとに吊しかざり立て 商ふ兩側の店より旅人を見かけ
て『お這入り』名物有松絞りお召なされサア、爰へ御這入り
北『エ、やかましい奴らだ』

ほしいもの有松染に人の身の

あぶら絞りし金にかへても

北『ナント彌次様浴衣でも買はねえか 彌『思入れ見たをして遣らうぢやねえ
か 北『宜からう買ふ顔して 慰むでやらう』ト彼所此所と見廻す内この町の
染地色々つるして 北『コレ此絞りは何錢いたします』ト散々ひやかして大分
行か 其のまゝ此所を立出で道を早めて行く程に早くも鳴海の宿につく

◎鳴海より宮へ一里半十二丁

旅人の急げば汗に鳴海がた

こゝも絞りの名物なれば
斯く詠み興じて田ばた橋を打渡り笠寺観音堂に至る笠を頂きたまふ
木像なる故この名あり

執着のなみだの雨に濡れじとや

かさなめしたる観音の像

其れより戸部村山崎仙人塚をうちすぎ漸く宮の宿に至りし頃は

◎宮より桑名へ海上七里

早や日暮前にて棒鼻より家毎に客を止める女の聲姦ましく女貴下方お
泊りぢややありませんかお湯もちんくわいてをりますお泊りなさんせ北
何んだい只で泊めるか彌虫の宜いト笠を取亭主お湯をあがる直ぐにお
風呂へお召なされませト荷物座敷へ運ぶ彌次郎北女お茶を上りませ

按摩お療治は如何北按摩よりマア腹がへつた彌饅飩でも食つて來や此
處の名物だ按左様なら後に來ませうト出で行く此の内色々亭イヤ明
日はお船でぬらつしやりますか又佐屋廻りをなされますか北直ぐに爰から
船にしやしよう彌船は宜いが已等船では小便をするのが怖くてそしてれつ
から出ぬに困る七里のると云ふがこらへては居られず如何したものだらう佐
屋へ廻らうかノウ北八亭イヤ其れには宜い物も上げます左様のお方には
いつも竹の筒を切つて上げますから其れで小便をなさりませ彌其れではお
頼み申しやす亭ハイく先づ御膳を上げやうト立て行き此内女膳を持て
按旦那方致しませうか彌サア初めてくんせいト彌次郎あんなにかい
泊り合せしこぜ二人なぐさみに三味北イヤ此奴好い聲だ何と按摩さん私は
踊が上手だがお前が見えれば彼の三味線で一つ踊つて見せたいもんだがな

按「音で解るから一つ踊りなせい 北「お前譽めなくちや張合がれえから斯う仕よう私が踊つてしまつた所でおまへの頭を一寸なでるから其の時ヤンヤと譽めてくんないか」其れ踊るぞ」ト隣の歌につれ三味線に合せてす 按「ヤンヤ／＼ 北「ハ、面白いく」トこのう 宿の女 「お湯にお台しなさい 北彌次様もう仕舞か仕舞なら湯に入りなせえ按摩様譽てくれた替りに私も撫て貰はふ 彌「ドラ湯に這入つて来よう」ト彌次郎湯に行くあんま北 按「時に旦那がたちよぶさうしゆく 目那方は一寸當宿のお鷓でもお呼びなされ 北「イヤ其れより隣りの三味線は此所の 娘か何人だの 按「あれば二三日前から此所の家に泊つてゐる 女がおますが能い聲だなもし、しかしまんだ私が生んくを旦那方へ聞きたい 北「コリヤ宜からう遣かしのえ 按「其のかはり私も譽めてがないと張合ひがないから一つ仕舞つたらはめて下さるか 北「承知く 按「ドレ遣かそう」

ト北八が頭をもみながら拍子を取りて頭をびしやく 按「エ、ムうた／＼五勺の酒に一合飲んだらさもまた宜からう」ト北八の頭を打ち 北「ヤンヤ／＼ 按「シヤンシヤン／＼」ト拍子に掛つて北八が頭をびしやく 北「面白く」 按「も一つ遣うかい 北「イヤや／＼たいく北八頭をしかめて 北「面白く」 按「も一つ遣うかい 北「イヤもう御免だ 頭が堪らぬ 按「ハ、ハ、面白かつた」 この内彌次郎風呂より上彌「もつとやらかしれえ 北「イヤ已等最う湯に行つて来よう 按摩様最う宜い」ト風呂 行くと 警女殿に思ひ込みしは爰も又 戀に目のなき人にこそあれ 既に夜も更けて一すゐの夢を結ぶ 曉の風樹木を鳴し浪の音枕に響き明方の鳥カア／＼」トコノ時宿の女起 女「モシ今一番舟でおます御膳を上げませう 彌「オイ／＼北八サア起きや」ト二人は起きて支度もす 『お支度は宜う

おざりますか、船場へ案内をいたしましよ北「其れは御苦勞サア彌次様出掛
けやせう」ト宿を出で舟場へ行く 亭「御機嫌宜う 彌「時に忘れた御亭主様
夕べお約束の彼の小便の竹の筒は 亭「ホンニちんと切らしておきましたにド
リヤ取つて参りましたよ」ト亭主筒取りに行くこの海上七里一人前四
御客様其所に投げますで北「何だ火吹竹か 彌「これでやらかすのだよ」

おのづから祈らずとも神ある
宮の渡しは浪風もなし

斯く祝しければ乗合皆勇み立ち舟は順風に帆をあげ海上を走る事矢
の如く去れど浪平かなれば船中思ひの雑談に笑ひ罵しり行く程に
商ひ舟何艘となく漕ぎ来りて酒や團子を進む彌「ア、能く寝入つた時に

小便がもる様だ』と宿の亭主より受けたる竹を取出すこの竹筒は先に穴あり
穴より小便は海へ流るなり然るに彌次郎は穴のあるに心づかず先づ竹筒に
仕込みて後に海中へ流すものと思ひ一物を竹筒にあてい小便する先の穴より
傳はりて船の中は一面の小
便になつて皆々大いに驚く○「コリヤ、何んぢや水が流れる 乗「誰か土瓶
を倒したそうなりソリヤ煙草入も紙入もピシヨぬれぢやコリヤたまらぬヤア小
便ぢやな』とがめられて彌次郎小便つ、北「エ、彌次様お前小便をするな
ら其所へ上つて竹筒の先を海に向けて仕込むのだめつそうな船の中が小便だ
らけになつたエ、穢へ、船頭誰ぢやぞい小便をしたのは船玉様が穢
れる早うコレ拭はつせいな北「エ、氣の宜い人だ船頭「エ、ソレ未だ竹の筒
から落ちる其れも捨て仕舞はつせいな北「コリヤ皆様御免なさい飛んだ番狂
はせを致しやした』トしよげ返りてそこらを取りかた 乗合「来たぞ、小便
にこそ濡れたれ船は恙なく桑名へきた目出度く』ト皆々コレより上りて酒

くみかば
して喜ぶ

◎熱田の神に参拜す

宮重大根の太しく建てし宮柱はふるふきの熱田の神の慈眼す七里の渡し浪裕にして往來の渡船難なく桑名に着きたる悦びの餘り名物の焼蛤に酒汲み交して彼の彌次郎北八なる者やがて爰を立ち出て行く程に此頃旅人の歌を聞けば歌「しぐればまぐり土産にさんせ宮のお龜の情所ヤレヨリヤヨ〜」馬士「旦那衆馬乗らんか彌」よし〜北「せうろく四文で乗るべえか馬士」其んならよせ〜北「何と彌次さん何も慰みだに斯ふしよ」うお前の荷物と私の荷物と一所にして一人が荷いで半日替りに旦那と家來の仕打は如何だる彌「コリヤ面白い其れ宜かるう」づ己等から旦那を始めぞ北「其れア宜いが今日ばもうハッだから七ツ代りにしよう勿論旦那と供

のあしらいは互ひに番狂はせ無しにやらかしやせうぜ彌「知れた事よ」兩人もつを〜北「先づ年やくにお前が旦那よ己等ばかりかみしもと云ふもので出掛ようナント氣が利て居るだるふ」後から荷を北「モシ旦那へ彌」何だ北「好い天氣で御座ります彌」チ、サ風が凪て暖かだ……北「左様で御座ります」ト主従の如くうち語りついはやくも大福村安中村をうち過て町や川に差しかれば彌次郎の歌に旅人を茶屋の暖簾に招かせて

のほくだ
上り下りをまちや川かな

◎彌次北八伊勢路に入る

其れより濱田村を打すぎ赤堀に差し掛りたるに往來殊に賑はしく男女大勢此所彼所に集りたるは何事にやと彌次郎北八も片寄り行きつゝある親仁に向つて彌「モシ〜何で御座りやす親爺」あれ見さつせえ……北「喧嘩

でも御座りますか親爺てんがいじインネ天蓋寺たこやくしさまの蛸薬師くはな様が桑名へ開帳かいちやうに行つしや
 るので今いまこ此所こほを通らッせるから彌なるほどみハ、ア成程見へる／＼』此内講中大勢の
 大音 講中『なアまアだア／＼彌たこやくしさま蛸薬師様ア湯出ゆでだし蛸たこじやれへ生なまたと見へる
 な講中『なアまアだア／＼彌のほり幟もを持つて行く奴やつの顔見かほみさつし智恵ちゑの無ねへ
 顔かほだぜ講中『お賽銭さいせんは是れ／＼是れは海中かいちゆうより芋畑いもはたけへ出現しゆっげんし玉たまふ所
 の天蓋寺てんがいじ蛸薬師たこやくし如來にょらい御信心おかたの御方おかたは御心おこころ持次第もちしだい上げさつしやりませう
 サア／＼御心おこころもちば／＼北けさほ今朝程中けさほどちゆうかさで三膳程食ぜんほどたべました彌たこソリヤ蛸
 殿どのがござつた／＼』此内和尙このに引連れられて如來にょらいを中に講中大勢 和尙わしやう『なむ
 あみ大勢おほしやう』なむあみ 和尙わしやう『ハアくつしやみ大勢おほしやう』ハアくつしやみ』和尙わしやう小聲こゑ
 和尙わしやう『くそをくらへ……大勢おほしやう』くそをくらへ彌たこハ、とんだお十念佛じゆんぶつだ
 アノ和尙わしやうはくつしやみから長郎ちやうらうだハ、講中『なアまアだア／＼と』め立めだち

と過る彌次郎やじらう北八きたはちを
 かしくあとを見送り
 十念じゆんを申しながらのくつさめは
 あつたら口くちに風かぜを引かせる
 斯かく詠よみすて、打興うちきやうじ行く程ほどに早くも追分おひわけにいたる此所このの茶屋ちや 饅頭まんぢうの名
 物ぶつあり茶屋女ちややめお休やすみなさりませ名物饅頭めいぶつまんぢうの温ぬくい所ところを上あがりませ北みやぎ右
 側がはの娘むすめが美うつくしいの彌かぎや鍵屋かぎやの小こぢよく女郎ぢやうらうも愛嬌あいけうらしい』と茶屋ちやに 女め
 お茶上ちやあがりませ彌まんぢう饅頭まんぢうもやらかして見みやう女いまま今いま上げませう』と盆とんぼに持もちちて
 羅參らさんりと見へて布子ふしの上に白しろき一衣いちいを引掛ひかけおなじく此の茶 彌まんぢうもつと遣やる
 屋やに休やすみぞう煮にを食くべかいる彌次郎やじらうまんじうを食くべてしまひ 彌まんぢうもつと遣やる
 うか何程いくらでも這入はいるようだ北みやぎ左様さやうさ金かね私わたくしくしもお江戸えどへ行いつた時とき本町ほんちゆう
 の鳥飯とりかひの饅頭まんぢうを賭かけとして二十八食にじゅうはちくうた事がござりましたが又また格別かくべつな者ものじや
 彌まんぢう鳥飼とりかひ私等わつちらの町内ちやうないだから毎日まいにち茶受ちやうけに五六十ごッ、食くひやす……金かね

其れは豪い好きじや私も餅好きで御覽じませ此雑煮をいきなり五膳食へま
 した彌「私ア此所の饅頭を十四五も食つたが未其の位は行けるだろ……」
 ……金「イヤ然し悪甘い物はもう其の様にば上れますまい十四五も上りや關の
 山だ北「ナニ未だ食へやす金「何うして〜貴郎口にはそうおつしやるが中
 々食へぬじやて北「ナニ食へれへ事があるものかしかし費えだから食やせぬ
 が誰ぞ食はせると未だ〜何程でも這入りやす金「コレハ面白いモシ無様で
 すが何と私しがお振廻申しませう最其れ丈上つて御覽じませぬか彌「食ひ
 やせうとも金「モシ上らぬと貴郎お損じヤが宜しうございますか彌「それや
 知れた事さ」と饅頭十個計り金「コリヤ堪らぬらう〜もふ〜私に叶へ
 ませぬ彌「お前もやらかして見なせい此んな小さい物は幾個でも食はれる
 金「イヤそうは参りませぬ而し私しも餘り殘念な十個計り食ふて見ませう

彌「ナニ十位二十食ひなせへ其代り一ツも残らぬと饅頭の代は勿論外に
 百文金比羅様へお初尾を上げやせう金「それや難有い」と無理な顔して食つ
 がり又十個食べたら三百文やろうと云ふ金比羅又食ふて仕舞ふ彌次郎殘念
 比羅の悪たくみにて食ふと見せかけて袂へ入れ人より金を取るなり彌「豪
 い〜」と三百文を北「ハ、ハ、ハ、此時巡禮の小供まん頭を食ひ巡禮「伊勢参り
 に御報捨彌「コレ手前達其饅頭を誰に貰うた巡禮「ハイ此の後で金毘羅参
 りの人が呉れました……彌「エ、そんなら彼奴食つたと見せて我々を欺か
 したなドレ追つかけて打ちのめそうか北「宜いはな己等も神参りだ堪忍して
 やりなせい皆な此方が間拔けたからよハ、ハ、彌「其れだトテ思々しい」
 盗人に追分なれや饅頭の
 あんのほかなる初尾とられた

彌「エ、面白くもれへ洒落んなモシ〜饅頭代は何程だれ女「ハイハイ殘

らすて貳百三十三文でござります彌「せう事がねえ」とぶつぶつ錢を「旦那まん直しに安くめして下さりませ彌「否や」駕屋「酒手で参りませう彌「貴様酒を飲むか駕屋「ハイ酒はすきで一升酒をやりませう彌「また酒の呑みつくら仕様と思つてか最う否だ」サア北八出かけよう」宮の道へはいる

◎伊勢大神宮参拜

神風や伊勢と都の別れ道なる道分の建場より左の方の町を離れて野道を辿り行く程に向ふより来る農業の馬に横乗したる男かん張り聲にて歌ふて来る彌「コウ見さつしアノ向ふから乗つて来る馬士を下ろして見せようか」と脇差をぐつと抜き出して合羽の袖を前へ折りて刀のつかに持ちそへたる体にして行くと馬士馬より下る彌「ナント如何だ」北「二本差を見ると乗打ちの出来ねへこたア皆知つて居らア……彌「其れだから己を侍だと思つて居る北「馬鹿を云ふせ後を見なせい侍が二人來

るから彌「エ、ほんにか」侍にばつたり彌「ハイ是れば御免なさいやし神戸へは最う何程御座いやすな」此の侍はこの村の郷士と見へて侍「ソレ向ふの堤から上ると半道位だ彌「ハイ有難うお座います北「ハ、時に此川は何と云ふ川だ橋番「橋錢が二文づゝ出ます此川は宇都部川と云ひます彌「ソレ二文づゝ四文よ」

抜参りならばぶさをもうつべ川

渡しの錢もかりばしにして

其れより高岡川を打渡り早くも神戸の宿に至る入口に寶珠山火除地藏堂あり

安穩に火除地藏の守らん

あつさも冬の神戸なるにも

斯くて此の宿はづれなる茶屋に寄りて休み居るに馬士「モシお馬に乗つて下せんか彌「いかさま戻りなら乗るべし馬士「上野迄戻る馬じやわい荷を付けて二百五十下さんせ北「百五十やるべし馬士「今日は棹を持つてこんわいの彌「二人乗れにや否だ馬士「其ならお二人共お馬の鞍へくい付けて行くまいか彌「とんだ事を云ふ煙草も吞まれぬ……彌「其れなら代りく乗ろうが百二十でやるべし馬士「まゝ遣かすべし」と相談出来先彌「己アそろく先へ行く其れ北八右の方へかしく様だ馬「ヒインく」此時向より来る履掛けにて馬士を見付て男「ヒヤア主や上野の長太じや無いか今主が所へ行つた戻りじや能い所で出遭つた……馬士「ハア權平次様かコリヤさて面目がないが權「あるまいくあるはづがないわい晦日く戻す金を未だ一文も入れんが如何しなさるのじや其れ聞くわい馬士「マアく此方へ來

て下さんせ」此馬士借金の斷りと見へ彼の男を伴馬士「其様に業者やらかいて下んすなマア此所へ掛けさんせイヤコリヤく權平様酒でも買ふ所じやが此所は大道中で其れも出来ぬへ北「コリヤ如何する早くやらぬか馬士「ハアせわしないチト待んせい今大事の御客があるさてマア聞て下んせ去年の冬から家の鳴めが病らつて雑役にさい出やせん者を何じやる斯うしてくんなせえ四五日の内には此方から持つて參かな」八のりし馬を借金の代りにもつて北「ハア己等も先刻からじれつたくて成らん飛んだ馬に乗り合せたに此身の不仕合而しまだ錢はやらすに是迄乗つたを徳にしてドレ下りて行きやせう」彼の權平に口を取せて下馬士「モシ旦那お前が下りては此の馬を取られるマア乗つて居て下んせ權「イヤ成らんわ馬士「ハア如何にもするわいの旦那下るしては氣の毒なサアく召して下んせ北「又乗るのか確か

り頼むぜ』權平ヤツキとなり 權『コリヤ〜長太如何するのじや旦那下りて
 くだんせ北『エ、又下すのか馬士』はて扱おりさんせずともよいがな』
 馬をやらぬやると北八うまよりダドンと落ち 北『ア、痛い〜』馬士一散に
 馬士『モシ旦那お怪我はないかいなドリヤ〜』と引き起す權平は馬を取ら
 てツハさせせじと北八にか 北『チ、イ待ちあがれ己をば非道い目に遭はしやが
 つて』と小言を云ひつゝ起き上りおつかけ
 んに腰は痛しやうやくにたどり行く
 借銭を貢ふたる馬に乗り合せ

ひんすりやどんと落されにけり
 行く程に矢橋村と云ふに至る彌次郎は神戸の宿端れより先へ來たるが彼の
 馬の騒ぎは露知らず餘程先になりたるを不思議に思ひ此に待合せ居たりける
 が其れと見るより 彌『チャ北八其のなりは如何したのだ北』イヤ最う話しに

ならぬ飛んだ目に遭つた』と最前よりの始終を語る彌次郎をかしく幸ひこの
 所鎌倉權五郎が古跡ありと聞きて彌次郎たち

風を孕む沖の白帆は觀音の

加護にやす〜海渡るらん

◎大風呂敷の十返舎一九

此の宿を過ぎて磯山といへるにつく此所に吹矢の色々かざり付けたる小見
 世の親仁往來を見掛け親爺『サア〜お慰さみにやつてがんせ外題は忠臣
 藏十一段新版の上細工はこれじや〜』北『ハ、何だ勘平おかる魂膽夢
 の枕イヤ此奴やらかして見よう』吹く 北『豪い松茸が出たコリヤ可笑い
 ハ、與一兵衛子故の間の夜は何が出るツトン』『ヒヤアみこし入道ハ、
 向ふのは何だ北八其方へ寄れや』と引きのける折足元に 犬『キャン〜彌』

此こん畜ちく生しやうめ奴めサア行きやせう』の邊への人ひとと見みへ子こ供どもを共ともに連つれて來きり 男おとこ『卒つ爾じながら貴あなた郎ら方がたアお江戸えどでござりますか 彌やま』アイ左さ様やうさ 男おとこ『私わしは白しろ子この先さきか
ら貴あなた郎ら方がたのおあとを追おつて參まつたが道みち々の御ご狂やう詠えいを承うけたまほりまして 感かん心しん
致いたしました面おも白しろい事ことで御ご座ざります 北きた』ナニサ皆みな出で放は題だいでござりやす 男おとこ『イ
ヤ驚おどろき入いりました先せん達だつてお江戸えどの向むか左さ堂だう俊しゆん滿まん先せん生せいなど當たう地ちへお出いで
ござりました 彌やま』ア、成なる程ほど左さ様やうく 男おとこ『貴あなた郎らの御ご狂やう名めいは 彌やま』私わしア十べん返しや舍せい
一いつ九くと申まをしやす 男おとこ』ハ、ア御ご高かう名めい承うけたまほり及びおよびました十じつ返べん舍しや先せん生せいで御ご
座ざりますか私わし南なん瓜かの胡こ摩ま汁じゆと申まをします 扱さてく 好よい 所ところでお目めに掛かりまし
た此この度たびは御ご參さん宮ぐうでござりますか 彌やま』左さ様やうさ彼かの膝ひざ栗くり毛けと申まをす著ちよ述じゆつの事ことに附つ
て態わざ々く出で掛かけました 一いつこま』いいか様さま彼かれは御ご妙めう作さくで御ご座ざります 是これへ御ご越こなさる
道みちすがらも吉よし田だ岡おか崎さき名な古こ屋や邊へんの御ご連れん中ちゆう方かた御ご出で會あひで御ご座ざいましたらう 彌やま』イ

ヤ東とう海かい道だうは残のこらず立たち寄より 所ところが御ご座ざれども參まると引ひき留とどめられて饗きやう應おうに
遭あひまするのが氣きの毒どくでござりますから皆みな直す通とほりに致いたしやした其それ故ゆゑ御ご覽らんの
通とほり態わざと籠そ服ふくを着ちやくいた 一いつこま』同どう者しやの旅りよ行かう同どう様やうに心こゝろ安やすくなんでも氣き任ま
に風ふう雅が第一だいいちと出で掛かけました 一いつこま』其それはお樂たのしみでござります 私わたくし宅たくは雲くも
津つでござりますが何どう卒そお供とも致いたしたい 彌やま』お思おし召めし有あり難がたい 一いつこま』誠まことに御ご珍ちん
客きやく近きん所じよの社しゃ中ちゆう共ともへもお引ひき合あはせ申まをしたい何いづれ御ご一しゆく宿しゆくをお願ねがひ申まをし
ようマアく不思議ふしぎな御ご縁えんで好よい 所ところでお目めに掛かつた時ときに此こゝろが小こ川がはと申まを
所ところ饅まん頭ぢゆうの名な物ぶつ一いつ服ふく上あがりませんか 彌やま』イヤ饅まん頭ぢゆうにはこりはてた直すぐに參まりまし
よう』打うち連れて此こゝろ所ところ
から尻しりの馬うまい名な代だいを旅たび人ひとに
くひつかせんと賣うれるまんぢう

是より行程なく津の町に至る前に高田の御堂右の方に見ゆる石井殿と云ふ是れなり

おまな板なをしに鯉のひれふるは

是佐川姫か石井殿かも

津のハ口左りの方如意輪觀音堂又かうの阿彌陀と云へるもあり、此所は上方筋より参宮の人落ち合ふ所にて往來の殊に賑はしく中にも都の若き人々小袖の上に揃ひの浴衣を引張りつゝ馬を引き並べ歌おもしろく唄ふに彌「コウ北八見や豪氣に美しい女が見へる」こま「アリヤ皆京都の衆だ彼様に立派にしてお出でやつても根から錢は遣やせんがな京の人」御無心ながら火一ツ貸してお呉れんか」こま「サア」出せば京の人すひながら京の人「バツ」こま「未だ附かんがいな京」バツ」こま「何じや

お前の煙管に煙草がついて無いな、ハ、ア解つた吸付ける振して人の煙草を喫むのじやなモ止さんせくノウ江戸の先生京の衆は彼の様に吝いことんじやわいハ、時に先生最う一ぶく下さりませ彌「京の者を吝いと云ふがお前も先刻から私の煙草計り喫んでゐる」こま「イヤ私は煙草入を持ちませんもの彌「忘れて出なかつたのか」こま「忘れはせんが全體は無いのじやわいな其の譯は私はふらい煙草好き一日に十匁では足らぬ位じや故コリヤ自分で買つて呑んで堪らんと思つて其れから煙草入は止めて煙管計り持つて歩き居ります彌「底で人の計りのみなさるのだな」こま「左様じやわい彌「そりやヤ京の人へふくりん掛けてお前があたじけれへと云ふものだ」こま「ハア其うかへなハ、時にいかう遅なつたちと急きませうか」と足早程に月元に至りこの邊より鳥の宮へ参る道ありと聞て其歌に

照わたる秋の月本ならげ今

浮れ参らん烏御前に

◎彌次郎兵衛北八の放言

斯て雲津に至り南瓜のごま汁己が家に案内するに是れも旅籠屋と見ゆれど折
 ふし相客も無く奥の間に請じ入れ彼れ是れと歡待ければ彌次郎は有らぬ
 名を偽はり斯る目に遇ふも一興なりと北八諸共心の内に可笑く頓て湯に
 も入り仕舞ひゆうくと座し居たるに亭主ごま汁出で「ごま」是ればお草臥で
 御座りませう宜うこそ御出下さりました而し折悪しく此頃はしけて何も御着
 が御座りません夫故なにも御馳走がでけぬくいが當所は至つて蒟蒻がよこ
 ざりますからマア是れでもあげましよと存じて申し付けて置きました彌
 もうお構ひなされなイヤ御主人此者は未だお近付に成らぬげなごま「いか

さまあなたは北「わたくしは十返舎の秘藏弟子一片舎南籙と申します不
 思議な御縁で御厄介にあづかりますごま「ナニサとつと、れからお構ひ申さ
 んじやてイヤ先生ちとおくつろぎなされまいか女「御膳がよござります
 ごま「早う上げんかい御ゆるりとめし上りませ」女膳をもち出で彌次郎へす
 へ行 彌「まんざらでもれへの北「い、女だ然しこゝじやアお前も先生株
 だおとなしくせざア成るめへ」ト此内又十二三ばかりの小ぢよく膳を持ち北
 向ふに平めなる皿の中に大福餅の大ききの如き黒き物をのせて出せり「ナン
 平にはこんやくを盛りみそは別に小皿にあり彌次郎兵衛小聲にて「ト箸にて
 北「ハこの皿に有る丸い物は何だるう北「さればなんであるうか」ついき見
 るにいたつて堅くはさめども動かす北「コリヤ石だ」彌「ナニ石な物かノ
 能々みれば石なりける故膳を潰し」女「立て行くを
 待ち彌「コウなんと馬鹿くしいどふして石が喰れるものか北「イヤ夫れで
 かれ

も喰くれる仕法しはふが有りやアこそ出だしたで有あらう、さつき當所たうしよの名物なめいぶつをあげませうと言いつたア何なんでも此石このいしのことだ彌やそれだとしてついでぞ嘸はたしにも聞きねへ

北きた「イヤまちなよ江戸えどで團子だんごのことをいしく」と云いふから大おほかたコリヤだんごであらう北きた「ハ、アなる程ほどそこもある、よもや本當ほんとうの石いしじやア有あるまい」ト又また箸しゆを以もつてつき見るに矢張やじやう石也いし是こゝは不思議ふしぎと煙管えんくわんのがんくびにてたいき見ればがつちりく彌や「どうでも石いしだく」コリヤどふして喰くふ物ものだと聞きくもこう腹はらだかどうもねつからがてんがいかぬ」此こゝ亭主ていしゆ勝手かたてよ「是これは何なにも御座ござりません宜敷よろしうめしあがりませイヤ石いしがさめば致いたり出でて來きり」是これは何なにも御座ござりません宜敷よろしうめしあがりませイヤ石いしがさめば致いたりませんかコリヤぬくいと石いしを替かへてあげ申まをせ」ト云いはれて兩人にん共とも愈々いよいよきよつ喰くひよふ知らんと云いはれんもこうは「イヤもふお構かまひなざるな、石いしももほやよろしうござる、扱さてめづらしい物を賞しょう翫くわん致いたしました江戸表えどおもてなどで折をりふし小砂利こじやりを唐辛子とうからし醬油しょうゆで煮付につけるか又は煮豆にまめなどの様やうに致いたして喰くる事ことが御座ござり

ます、それに又また石塔いせきとうなども嫁よめをいぢるしうとばいなどに喰くせたが藥くすりだと申まをして喰くますが、私わたくしもすいぶん好物かうぶつでござります、今度こんど府中ふちゆうに逗留とちゆう致いたした時とき馬蹄ばてい石いせきをすつぽん煮ににしてふるまはれましたがツイ私わたくしし四ツ五ツ喰くべました所ところに、お聞きなさい腹はらが重おもくなつて立たふとした所ところがいつかな立たれず、しかたなしに兩方りやうほうの手て棒ぼうしぼりの様やうに致いたして、かついで貰もらつてやうくと手水てうづに行ゆきました、御當所ごたうしよの石いしころは格別かくべつ風味ふうみもよう御座ござりますから又またたべすぎたらば御厄介ごやくかいに成なるだろふと存ぞんじてお氣きの毒どくで御座ござります「こま」ナニその石いしをあがりましたか彌や「喰くましただんか「こま」イヤそれはめつそがかいな、石いしをあがるといふはけしからんお齒はのお達者たつしやなこととござります、しかしやけとは成なりませんかいな彌や「それはなぜな「こま」イヤあの石いしは焼やけ石いしで御座ござります、すべてこんにやくと云いふ物ものは水氣みづけの取とれぬ者ものでござります

から、あのやけ石にておたいきなさると水氣が取れて格別風味が御座ります
其の爲めの焼石でござります、あがるのでは御座りませんわいな彌「ハ、ア
なる程／＼聞えました「こま」マアそうしてあかつて御らんなされ、コレおな
べよ石が煖くなつたら持てこんかい」早う／＼ト此内更に石の焼けたる
をのせて女持出で引替へ行く彌次郎北八亭主がとばのごとくしてかのこん
にやくをばさみ、くだんの石に打付け見るにシウーと云ふて水氣取れたる所
を味噌を付けて喰ふに風味格別軽くして云ん方なければ大きに感じて彌
誠に珍らしい御料理御仕法感心致しました此の内近所の狂歌「こま」時
に先生お八釜しうは御座りませうかおむづかしかるふと云をとおや扇面短
冊などお願ひ申したいが何なりともお持合せのお歌をおしたゝめ下さりやせ
ト扇、短冊をつきつけられ、彌次郎しかつめらしく取上て、何の出放題やら
かして呉れんと、いろ／＼考へてもわが讀し歌には是ぞと云ふ歌もなく、早

速に思ひつきもなければ、これまで聞き覚えぬたりし「これは有難ふ御座り
人の歌を書いてさし出せばこま汁これをいたゞき見て「こま」
ますお歌は「ほとゝぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里とふやへ二里」ハ、
ア成程どうも聞た様なお歌じや「きぬ／＼の情をしらば今ひとつうそをも
つけや明六ツのかね」イヤこれは千秋庵大人のお歌では御座りませんか
彌「ナニ私ししがよみ歌しかも江戸中大評判の歌誰知らぬ者はござらぬ
「こま」イヤ左様じやあるが先年私しお江戸へさんじた時三陀羅大人芍薬
亭大人などにもお目にかかりまして、即ちお短冊もいたゞいて歸りまじた
御らんなされ其屏風に張つて御座ります」成程屏風に三陀羅と書て右の歌
あり北八おかし「イヤ私しの先生はそゝつかしいが癖で人のうたゞのわが
く氣の毒なれば「イヤ私しの先生はそゝつかしいが癖で人のうたゞのわが
歌だのといふ、しや別は一向御座りやせぬコウ彌次さんイヤ先生是まで道
中筋でよみなさつた御前の歌を書なさればいゝにつよい男なればいけしやア

内北八も手もちなれば張交の屏風を見て 『ハ、ア戀川春町のゑがあら、モシあの畫の上にある讀は何で御座ります。』
 ます北「こちらの布袋の上にある詩は誰が致したので御座ります。』
 あれば語でござります、澤庵和尚のト言ふ故北八心の裡に此人いまくしい奴、贅かと云へば詩だと云ふ詩かと云へば語だと云ふ何でも今度は一ツよけいに云てまごつかせてやらうとそこから見まはし彌「モシおかけもの、畫の上に出であるはおほかた六でござりませうな。』
 あれば質に取たのでござります。ト此うち勝手『ハイ髭面様からお手紙がさ
 んじました。』
 じ上候只今東都十返舎一九先生私宅へ御着有之候勿論名古屋連中より書狀参り申し候早速貴公御尊も致し置候事故追付貴宅へ同

道参上可致候間右御案内申入置候已上。』
 じやいなとんとがてんがかぬノウウ先生只今朋友共からかやうに申し
 こしましたが定めてこやつ尊公のお名前をかたつて参つたものと見へる、幸
 ひ追付これへ参るとあればナントお逢なされてなぐさんでやるじやござりま
 せぬか彌「さて、大變なことだいや横着な奴も有ればあるものだ、しか
 し私しは逢ひますまい。』
 が起りました左様でなくば其質物致し方がござる物をさて、困つた物だ
 ト思掛なく此しぎに及び流石の彌次郎しよげかへりてゐる、亭主ごま汁をば
 じめ皆々先刻より彌次郎が振舞がてんゆかすと思ひし所、さてはと心付きこ
 たがひに袖を引きあふてちやが丸『なんと先生コリヤ面白いとがでけまし
 た御不快ではござりませうが、是非其質物にはお逢なさるがようござりませ
 う彌「ハテさて困つたとおつしやる。』
 『イヤ時に先生のお宅は江戸表で

はどこともとでござりますな彌やじらうべ『さればどこかでござつたテ、それ／＼鳥羽伏見みよとだけか淀竹田よどたけごま』イヤたしかあなたがお笠かさに江戸神田八丁堀えどかんだちやうほりやじらうべ彌次郎兵衛やじらうべと書付かきつけてありおつたがその彌次郎兵衛様やじらうべさまと云は誰いふたれさんの事ことじやいな彌やじらうべ『ハア聞きたやうな名なだがだれであつたかヲ、聞きた筈はずだわしが實名じつめうを彌次郎兵衛やじらうべといひやすごま』ハ、アつれにやまいらの、ちよつ／＼とまいらぬ彌次郎兵衛やじらうべでござると云ふはあなたのことであつたか彌やじらうべ『さやう／＼ごま』とときに彌次郎兵衛やじらうべ先生せんせい其その僞物にせものの一九を今連いまつれてごまいかい彌やじらうべ『イヤわしはもう出しゅつたつた立致たつたそうごま』なんで今頃いまごろ何なんどき時ときじやと思おもふてもふ四ツじやがな彌やじらうべ『さればの事こと私が痲氣せんきは變かはつたとで此様このやうにかしごまつてばつかりおると段々だん／＼悪わるくなる、いつも夜分やぶん外そとを歩いて冷ひさへすりや、直すぐよくなるからごま』ハ、アそれいまだで今立いまたうといふのが、そふさんせ／＼たとへこなさんがぬふと云いふても

こゝにやもふ置おきやせんのだ、はやう出でていかんせようも人ひとの名なをかたつてだまさんしたの彌やじらうべ『ナニかたつたとはごま』ハテかたつたわいな、ほんまの十返舍べんしやせんせい先生せんせいは名古屋なごやの川並連かはなみれんぢやう中ぢやうから狀じやうが付つてきてありや違ちがひはないがな『はじめからこなさんの不都合ふつがふたら／＼こないなことで有あふと思おもつた、こちからほからかし出だされぬうちにちやつ／＼と出でていかんせ彌やじらうべ『なんだはか／＼出だすコリヤ面白おもしろい北きた』コレサ彌次やじさん、力りきんでもほじまらねへ、ぜんてへおめへの思おもひ付つきが悪いサア爰こゝを出でてどこぞ木賃きちんにでも泊とまりやせう、コリヤどなたも眞平まっぺい御免ごめんなさりやし』ト北きた八はちが段々だん／＼の詫わごとごとに亭主ていしゆは腹はらは立たてどもおかしさも半分はんぶん皆みな々々この二人ふたりがほう／＼の體ていにて、そこ／＼に支度したくし出行いでくなりを見送みおくり家内かないの者ものとも手てを手うちたゝきどつ／＼と笑わらふ彌次郎やじらうべはし／＼ふくれ面つらしてりきみかへり出行いでくおかしさ北八きたあとに従したがひ

いとほまじ通一へん旅の耻

書捨てゆく扇子短册

かく詠みて後ほ笑ひを催し出掛けたれども早や亥の刻過ぎたると見へ家並に戸を閉ぢてひそまり返り何れを宿屋とも見へ別たす泊るべき方もなくして浮々と辿り行く程に軒の下の犬共が起き立ちて吠かれば彌次郎きよろくして彌「エ、此畜生め悪くふざげやがる」と石を拾つて投ぐれば北「かまひなさんな犬迄が馬鹿にしやがるヲヤ彌次さん妙な手付をしてお前何をする彌「イヤ犬に取りまかれた時に宙へ虎と云ふ字を書いて見せると犬が逃げる」と云ふことだから先刻から書いて居るが根から逃げやアがらぬ此奴ら皆な無筆の犬だそふなシツ〜」漸く犬を追ふて行くと彌「コリヤまゝ北八夜通し歩行うじやねへか、きつい事アねえやらかせ〜」北「お前飛んだ事を云ふ

未だ九つにやなるめへ又どこぞで泊りてへものだ彌「其れだどつて今頃に起てある内はなしイヤ有るぞ〜」遙か向ふに火が見へるアノ火を目的に行つて宿を頼まふ北「ヲ、サ其れがい、而し提灯の火じやねへか彌「とんだ事を云ふ戸の隙間からもれる火だものを北「ほんに家の内で焚火だ何んでも是非彼所を頼んで泊りやせう」と足を早めて近づくに目的の火彌「ヤア〜彼の家が歩いて行くようだ北「ホンニ此奴は可笑い彌「氣味が悪い何所の國に家が歩くとば只事じやねえ北「ナニサこれも赤坂泊位あて皆狐めがす事だろ〜弱味を見せると附上るから構ふ事はれえさつ〜と歩みなせえ〜と態と早足に力みつゝ行見しにいざりの車にて小屋の内にて火を焚き茶を沸しつゝ車を押し行くものなれば二人はをかしく此の所を過ぎ行く折ふし月はいたつての臆病者こわ〜にたどり行くあとより一人來る者あり見れば小山の如き大男長脇差を腰にして來るは只事ならず我々北「まちなよ呑口がぼつ目掛けてくるならんと足早に走れば跡の男も又走る

れそうだ』止まる故彌次郎聲を掛け彌「モシおめえ今頃何處へお出なさる』
 と怖々云へば彼の男思「男『ハイ』私に松坂へ戻り居るものじやがな夜さ
 ひの外やさしき聲にて男『ハイ』一人でこわうてくモ如何しやうと思ひをつた所へお前方が通らんす故コ
 リヤ好い連じやと追て心たよりに参じたわいな北「イヤお前楯に似合はぬ
 弱いれを出しなさる、そして其な長い奴を差して居ながら男『ハ、脇差で
 はねへのコリヤあとで拾ふて来た竹ざれじやわいな』ト腰よりぬきて彌「ハ
 、脇差ではねえの私等又おめへが怖くつて先刻からコリヤ頼だ奴に
 見込れたと思つたがマアお前臆病もので私も落付たもふく是から三人
 と云ふ者だから大丈夫だ男『否々此の先きにドツト豪い事があるがな彌
 何豪い男』聞かんせ私や今日江戸橋迄行て返りにきつふ遅なつてな今の先
 此の松原に來居た所が何じやら向ふに白い犬大きな物が立て居つて其れが彼

所へ行たり此所へ來たりふらりくもふく私に怖くてくコリヤ死ぬかど
 思つたわいなソコ後戻りして何卒好い連が欲しいと思ひをつた所がお前方
 に行遇ふたじいわいな彌「エ、其白い大きな物の居たわ何處らに男』直に此
 の先ぢやわいな北「エ、何か出る物が私に先へ行かう已れに従て來なせえ』
 ト打連れて松原を一丁程行「男』アラく堪らぬく人ばなんじやると向ふ
 を見るに白きもの街道一ばいに廣かり或は長く彌「マア何だる北「亡魂に違
 なり或は消ゆるやら大きくなりて其形わからず彌「マア何だる北「亡魂に違
 ひはねえ男』ア、アレじやもの如何して先へ行れやしやう彌「氣味が悪い後
 へ戻ろう男』私もお前方をたよりに來たが其れなら又後へ戻つて行つたり來
 りして居りや其中に夜が明けてしまふわいな彌「何でも白装束だから何ぞ
 の亡魂に違ひはない北「アレく青い火が見へる彌「コリヤドウモ先へ行れ
 ぬ』ト二人青くなり居ると向ふより人の來るとみえ彌「モシくお前方何處
 ぬ』歌の聲が聞え段々近く見れば助郷人足四五人彌「モシくお前方何處

から來なすつた人足「ハア私此の近所だが役に當つて津迄行き居るじやわいな彌「ソリヤ宜いが此所へ如何して來なすつた人足「ハテこな人は其役で津へ行のじやと云ふに彌「但しお前等幽霊か、人間なら此所迄生きて行よう筈がない人足「そりやなぜ北「何き向ふを見なせえ人足「向ふに何か居るぞい北「アノ白い物がアレ〜人足「白いものとは彼れかありや道中でお馬の履や草鞋が燃て居る其烟が月に寫つて白うなつて見へるのじやわいな彌「ハ、アそうかハ、コリヤ有難うござりやすト人足に別れ三人はつとため息りつき見るにまことや草履などに火をつけてもやしたる煙の白くみえたるな入りこの所を過ぎ松坂に至りかの男をたのみて寝るばかりの事なればとて町の入口なる「賃宿に斯くて月落烏なきて時の鐘明六ツを告渡る彌次郎北八一夜をあかしける早くも起さいで此所を立出づること

鴛も輪になりて舞ふ日て旅人の

をどり出でたる松坂の宿
右のかた小山の薬師を打過ぎ櫛田といふに至る此所におかんと云へる
二軒の茶屋あり餅の名物なり

旅人はいづれに心うつるやと

おもんおかんが賣れる焼もち

◎伊勢の山田

其れより碓川を打渡り齋宮を過ぎて明星が茶屋に休みたる時方もの上見え帳面と風呂敷を包みたる馬士「モシ〜お前がたア其荷をつけてお一人を負ひ馬の賃をつけ居ると此の旦那と二方くわうじんに乗りんせんかいな上方「お前方も大方參宮じやある私も古市迄掛取りに行くさかへ一所に乗りなされ、はなして行くわいな彌「如何様昨夜の夜道で大勞れた北「己あ乗つて行くぞ彌「其んなら

此荷をつけて貰はう』トこの所に馬の相談出来上方者と 彌『ヒイン 上方』お
前方ア江戸衆じやるな 彌『左様さ 上方』江戸は好い所じや私や去年行つて
ゑらい目に遇うたがああ江戸に似合はん何所へ行つても手水場がゑらい穢ぐ
ろしうてく私や百日程居る内頼と手水に行つた事がない其れから江戸を立
つて鈴が森たら云ふ所へ来てヤレ嬉しや此所でこそ小用してこまそと海の中
へ堪めたく小用を一氣に三斗八升ばかりしをつたがゑらう宜かつた彼處
は奇麗でゑらい大きな小用擔であつたわいなハ、彌『京では小便と菜と
取替へこにするよ云ふ事だから小便も大切なもんだにおめえ海の中へ惜い事
をした、其の三斗八升で取替へたら菜が馬に五駄や六駄は來るだらうに其
れだから京では尻をひるに出そうになるとちやんと裏の畑へ駈けて行つ
て生へてある大根や菜の上へ尻をひり掛けると云ふ事だが成程是れも肥しに

なるだらう……上方』そうじやわいな其の尻をひり掛けた菜を能く刻んで
土に混ぜて壁をぬりたるがな京ては其土をへなつちと云ふわいな 彌『總體
京と云ふ所はあたじけれへ所よ前度私が行つた時分は三月で花見
の最中てんぐに幕を張つて結好な高蒔繪の重箱などを取り散らした所は
宜いが其の重の内に何があると思へば香の物に大根の煮たのは恐れ入るく
……上方』イヤ其れよりかお江戸の衆か吉原の櫻はゑらいと、いこう自
慢せらるゝさかい私や態々吉原へいて見たが何の櫻はありやせんがな
……彌』そりやお前何月頃行きなすつた 上方』私が行たは確か十月時分
彌』何の十月櫻があつて堪るものか 上方』ハアさうかいナ其れでも京
の小室や嵐山には年中櫻がちんとあるがな 彌』そりや木計だらう花は年
中ありやしめい 上方』左様じやわいなイヤ又江戸衆は長唄をよう謠ふじやが京

の宮園や國太夫は又格別な物じやわいな彌國太夫と云ふは如何様に唄ひ
 やす上方國太夫はこうじやわいなト手を上げて國太夫彌ハ、もー
 べん上方又まれる北八後よ上方アイタ、ど奴ぢやえどめつそうな打ち
 くさるがなトふり返れば北八は一才彌次郎が彌面白いがどうも節が六ケ
 敷もう一遍やつてくんませへ上方ソリヤ何程でもやるはやるが又頭を打
 ちやせまいか彌ナニ私が見て居よう上方ソレなら今一度やりましよう
 かい「死んでも呵責の夜叉羅刹振上げてうと打つ」トこん度は北八あわてい
 彌アタ、北八己だコリヤ如何する上方ハア先刻より私の頭を打んし
 た者此の人じやな何として打んした北私は打つた覚えはない上方何に
 無いと言わしやせんわいな北ハア己ら知らわえヨしつこい野郎だね
 上方野郎とは何じやないな北何だ此の筈棒め先刻から總體氣に喰ねへ野

郎じや餘りたわごとつきやがると引摺下すぞ上方面白いサア下して見や
 んせ彌チ、眞逆様に下してやろうト馬の尻をヒシヤ上方コリヤ堪ら
 ん何するのじや彌己れも堪らんコリヤノ何するノ……馬士エ、畜
 生めドウノこの内にあけの松原を過て小幡に上方者北八に向い
 上方コレお前何として私の頭を打たんしたト又はじめ彌次郎中に入
 茶屋に一ぱいのみ酔ふた元氣に彌次郎にむかひ古市の遊び彌奇妙ノ何卒
 をすいめる彌次郎心中にこの者をおだてい遊ぶつもりにて彌奇妙ノ何卒
 お供してへの上方是から世古の松原やで仕度して妙見町の藤屋としよう
 じやないかいなサアノもう行かうわいな彌ドリヤ出かけやしようトこの
 を拂ひ立出るこの町の出ばなれに宮川と云ふ舟わたしに至りて

宮川や神に奇縁をむすばんと

すくへる水のかげのしらゆふ

是より中河原を打過ぎ堤世古を打こへて山田の町に差し掛りける

◎伊勢の古市

川崎音頭に伊勢の山田と唄ひしは和名抄の陽田と云へるより出でたるに
や此町十二郷ありて人家九千軒ばかり商家藁をならべて各々質素の莊嚴
濃かにして神都の風俗自づから備はり柔和悉鎮の光景は餘國に異なり
參宮の旅人たえ間なく繁昌さらに云ふばかりなし彌次郎北八は彼の上
者と打連れ此入口に至ると兩側家毎に御師の名を板にかき付け用立
所と云へる看板竹葦の如く此に袴羽織引掛けたる侍何人となし馳違
ひて往來旅人の御師に至るを迎ふと見へて一人の侍彌次郎に近附き
引の『モシ貴郎方は何れへ御越して御座りますな彌』知れた事大神宮様
手代『参りやす手代』イヤ太夫はどれへ彌太夫は竹本義太夫殿さ手代『ハア義

太夫と申すは何處もとじやいな彌その義太夫と云ふわな大阪道頓堀

北『京は四條お江戸はすき屋町河岸に於て承らく御評判にあづかりまし
たる手代』ハ、上方『ちと休んで行かうかいな北』此所等は皆穢れえ所だ
皆御師の雪隠と見へて用立所と書いてある彌『おきやがれハ、』も或茶
屋へ這入り暫く休むこの時向うより上方同者女まじりに聲はりあげ色々唄
をやるこの一群通りすぐると又太々講と見へて廿人計り御師よりむかいの駕
に乗る手代『サア、是れじや、先何方も御休足なされませ』出るこの人
々江戸組と見へこの内の○『イヤ是れはどうだ彌次どの、貴様も參宮か』
一人彌次郎を見つけてと聲掛けられて彌次郎ビツクリ是れは町内の米屋太郎兵衛な
り江戸を立つ時米屋の拂ひをせすに來る故彌次郎しよげ返り彌『ハア太郎兵
衛様かよくお出掛けなさいました而し此所で貴所に御目に掛るは面目ない
太郎』ナニサ私も仲間の太々講でそのくせ講親と云ふものだから據ころ
無く出掛けましたが好い所で合た旅へ出ては同國が懐かしいから奥へ來て

一盃やらつしやい』衛彌次郎北八に向ひ私はあとから歩いて行くから貴様私
 の駕に乗つて行けと云はれ二人其駕に乗る然るにやじらうかこ
 この駕や誤て上方組の中へ彌次北八をかつき込む彌次郎駕より下されて出て
 見れば今迄の顔と違ふ故ハテ合點の行ぬ彌「モシ」米屋の太郎兵衛様は何
 れにお出なさいます脇の男「何じやいな太郎兵衛さんとはコチヤ知らぬわい
 な而てお前は根から見ん顔じやが誰さんじやい彌「ハイ私ハソレ太郎兵衛
 さんの町内の者じやがハテ違つた様じや北八は」トむしやうにまご／＼す
 物を引よせるこの内の二 講中「コレ／＼こなさん見なれぬ人じやが誰じやい
 三人彌次郎に立ち向ひて 講中「ハテな何をきよる／＼彌「ヤー私ハ米屋の太郎兵衛
 な彌「ハイ／＼ 講中「ハテな何をきよる／＼彌「ヤー私ハ米屋の太郎兵衛
 さんに御目に掛れば分りやす 手代「其れは妙な居ぬと云ふに早う出て行かん
 かへ 講中「道中盗であるふわい投出して仕舞へ彌「途方もれえ 講中「ハ、
 お前物云ひはお江戸じや其れで解つた今の先お江戸の大々講と一所で

落ちふたが其時お前の乗つた籠がこちの中へ紛れ込んでござつたのだ彌「成
 程左様そんなら私「の行く御師どのは何處でございやすな 手代「何にお前の
 行く先を誰が知るぞいなコリヤ態と此方の中間にすり込んで太々講を喰倒
 しに來たな 皆々「イ、奇代な奴じや天窓どやいてへこまそうか彌「イヤ悪く
 洒落るな手前達の 太々講丸つきり喰倒した所が知れてら餘まり安くしや
 がるな江戸ツ子だ己一人で太々講うつて見せよう」御師の手代驚き
 手代「何にお前がお一人で彌「知れた事多少に寄るめへ是で頼みます」かへ
 の錢二百文紙に包んで出せ 手代「ハ、太々講は安うて金十五兩も出さん
 せんげりや出来ぬわいな彌「ナニ是れでは成りやせんか 手代「左様／＼彌「
 太々講がならずば是れで蜜柑こうでも頼みます 講中「ハ、べつ講さんせ
 ハ、手代「イヤお道化たお方じやハア詠めたお前の行所は慥かに内宮の山

莊太夫どのじやわいの先刻の手代が彼處のじや程に是れから妙見町を直ぐに古市の先へ行つて尋ねさんせ彌『ハア其うかコリヤ有難いホンニおやかましう御座いやした皆々『ふらいあほうじやハハハハ』』

鉢植のだい／＼こうにあらねども

ちうにふらりとたりし間違ひ

妙見町の上は直ぐに古市にて倡家軒を並べ引立つる伊勢音頭の三味線勇ましく浮れ／＼て千束屋と云へるに至ればり出で女『能う御ざんした直にお二階へサア御案内致しませう』と各々二階に上り座につく上『而し誰らんしてはあかんわいの上店と云もんじやさかい京談でやらかせにや工合が悪かるが何じやいな彌『其んな事は以つて來いだすつかりと私が上方でやらかしやせうコシ／＼女衆一寸來てお呉んかいの私や咽が乾くさかい茶一ツもて來てお

呉れんか女『ハイ／＼彌『何と京談豪いか／＼へイ畜生めが上』イヤ出來た／＼』此内酒肴出てくる藤屋より始めて上『コレ仲居おやまさんは如何じやいなお江戸の豪いお店の番頭さんじやさかい何んじやあるとおやまの有丈け出さんせお氣に入ると百日も二百日も御逗留でお金の入る事は頼とおかまい無いお方じや藤や『左様じやわいな私が去年お江戸へさんじた時お店の前を通りましたか成程豪い大家じや貴郎の御支配なさる方は兩替店と見へましたか之れも大きなお店でおますわいの彌『ナニサ格別豪い店ではな

いわいの間口がやつと三十三間あつて佛の数が三萬三千三百三十三人位やさかい豪い賑やかなこといな藤や『京のお店は確か六條珠數屋町であつた』此内女四五女『何方も宜うござんした彌『ハ、ア何れも豪い出來じや』此内方々座敷の歌う聲聞へ伊勢おんどの聲聞上方『イヨ／＼トテチン／＼』又奥の座トテチン

く上「コリヤゑらい」時にと下拙の私めが相方のおまさんばコレお前
 名は何と云ふぞいのなんじやお辨有難いの誰あるう勢州古市千束屋の
 お辨女郎と云ふ美しくしい可愛らしい女の辨才天女様は忝けなくも
 尊くも京都千束屋中立賣ひいと上る邊栗屋與太九郎様の相方じや
 ちとれきへよらんせんかいの』故我相方と思しに京の者が我が相方のやうに
 せる故やつ彌「コレ京のお客ソリヤ私が相方のおやまさんじや京何云
 はんすぞいコレ女中のお仲居おまい名は何と云ふじや女「ハイきんと云ふわ
 いな」京ソレく勢州古市千束屋の仲居おきん女郎と京都千束屋中
 立賣ひよいと上る所邊栗屋與太九郎が先刻内々引合ふて置たアノ美
 しい可愛らしい辨才天女のおべん女郎と云ふおやまさんは則ち京都彌
 江戸は神田の八丁堀とち面屋彌次郎兵衛と云つちやアちとひれくつた奴さ

まだ京其のお江戸の神田八丁堀とち面屋彌次郎兵衛と云ふひれくつた奴
 様が京都千束屋中立賣ひよいと上る所邊栗屋與太九郎が相方のおやま勢
 州古市千束屋の彌「エ、何をぬかしヤアがるへんくりや與太九郎もあきれ
 らア京「イヤ此所なお江戸神田八丁堀とち面屋の彌「エ、やかましい能く
 しやべる野郎だ北「己ら其んことより太鼓の間が見てへたいこの間は何だ
 く女太鼓の間とは何じや鼓の間の事かいな北「チ、其の鼓く」京「イ
 ヤ鼓じやなかるう何じやあるか此の邊栗屋與太九郎が相方じやわいの彌
 コレ悪く洒落るな何でも鼓の間は己がのだ悪い敵役じやアねへが否でも
 抱てれる藤「ハ、彼の廣い鼓の間をかいな彌「チ、廣くてもせまくとも
 頓着はねへ己がものた京「イヤくく」そりやさゝんわい彌「ナニさ
 いん事があるものか誰れが何と云つても京都千束屋中立賣とちめんや彌次

郎兵衛さまが相方だわ 京「イヤ此お江戸神田八丁堀上る所邊栗屋與太九郎の買ふたのじや 北「ハ、おめへ方は何を云ふやら取違へたかさつぱり解らなく成つた女」そして此お方は京のお方じや云んしたに物云ひから何時の間にやらお江戸じやわいな 彌「笠棒め此の忙がしいに京談が遣つて居られるものか 女「餘まりお前さん方が争ふてじやさかいソレ見さんせおやまさん方は皆逃げて行んしたわいな 彌「思々敷いもふ歸へるべい 女「マア宜ふおますがな 藤や「モシ斯しよかいな是れから柏屋の松の間をお目に掛けうわいな 但し麻吉へお供しようかいな 彌「否だおらア是非歸る〜 藤や「ハテ宜ござります 彌「イヤ留やがるな思々しい」トすつと立て歸へるとする中居ど振拂て出る所へ相 彌「コレ何じやい 彌「留るな止せ〜 初「お前さん計り方のおやま立出で やま「コレ何じやい 彌「留るな止せ〜 初「お前さん計り其様になア返る〜と云はんすがな私がお氣に入らんのかいし 彌「否そうで

も無いが放せ〜 初「わしやいやし」ト又掛るを無理やり 彌「イヤ羽織何うする返せ〜」ト云ひながら紙入 彌「コレサおらア返る〜 初「情の強い人さんじや」ト帯引きときて裸にせんとする彌次郎は垢じみたる越中禪をへ 彌「是れ〜最う堪忍してくれ 初「そんなら此所に居さんすか 彌「居るとも〜 仲「初枝さんもう堪忍してやらせ 藤や「サア〜よござります是れへ〜」ト彌次郎が手を取り 北「ハ、面白〜 彌次さん斯うもあるうか」むくつけき 客も今宵はもてるなり
名はふる市のおやまなれども
此一首に皆々笑ひを催し藤屋の亭主仲居どもがそこら取片付けて其々に座敷を設け酔倒れたる上方者を引立て案内するに北入も俱に出行けば後に彌次郎一人残りたるた 女「サア〜お前さんもちと彼方へ…… 彌「ドレ

行きやせう何處だ〜ト云ひながら立つて行く此の彌次郎至て見へものに
 づして外へ投げ出し後と先を見廻して人の見 斯くて夜も更け渡る奥の間の
 川さきおんども自づから静まり旅客のいびきの聲喧かしく鐘の音も早七ツ響
 きて 鷄の聲萬戸に唄ひ夜も白みかゝる明窓の障子に驚き起き上りて
 目を擦りながら京「サア〜如何じやいな起きさんせ 北「彌次さん日が出
 ア歸られへか」居る所へ来て起す 彌「ヤレ〜グット一寝入りにやらかし
 た おやま〜これ今日も居さんせ 彌「途方もねへ歸る〜」ト皆々仕度して出
 じの窓より庭なのぞきて おやま「コレ〜彼れ見さんせ庭の松にゆもじが掛
 つて居るわいなア」彌次郎の相方初江見てホン 彌「ハ、此奴はおかしい羽
 衣松じやね〜禪かけの松も珍らしい 北「彌次さんお前のじやねへか 初
 そうぢやわい、チホ、是れ久介どん其の禪 お客さんのじや取つて下んせ」

ト庭掃除の男をよび彼の禪をばづし 初「チ、くさ 北「ハ、彌次さん手を出
 てれんじの前へく〜りつけて差出す しなせへ 彌「エ、情けない事云ふ己がのじやアねえと云ふに 北「そんならお
 前のをまくつて見せなせへ」 北八が帯とぎに掛ればふ 皆々「チホ、ハ、ハ、」
 ト大笑ひして送り出る 彌「思々しい 北八めが己に赤耻をかゝしやがつた
 人とも此所をたち出で 北「松に禪のぶら下つたも珍らしい」
 ふんどしをわすれてかへる淺間嶽
 萬金たまをふる市の町
 斯くて妙見町に立ちかへりたるに其日は空も景色いと長閑なれば急き内外
 の宮めぐりをせばやと支度あらましにして立出づるに行く程なく今戻りし古
 市の上り口に早や見せいでして各々小屋に引立つる 古へのお杉お玉が面影
 をうつせし 女「二上り調子」ペンペラ〜チヤンテン〜」
 何やら分らず

旅人皆此女の顔に錢を投げつけるを望みてよける 北「ドレ已も當て見せやうハアこればしたり 京「何としてお前方ドナイニ投げ付けさんしても、てき等が當てさすもんじやないわいの 彌「今度は見なせへハア是れわいな 北「チャ／＼當らぬコリヤ仕様が ある餘まり面がにくい」ト小さき石を投げつければ彼の女口にて一寸受けて、と皆々大笑彌次 アイタ、ツ／＼」 投げ返せば彌次郎のかほへびつしやりと當る北ハハ

とんだめにあいの山とやうちつけし

石かへしたる事ぞおかしき

斯くて爰を打ちすぎ中の地藏町に至る左りの方に本誓寺と云ふ 勝景の地ありまた寒風といへる名所もあり五知の如來、中河原様々 記すに 遠なし夫れより牛谷坂道に掛れば 女乞食共 往來に錢を乞ふ又十二三の女子とも紙にて張りたる笠の形どれるを冠りて唄をよみ錢を乞ふ 彌「八釜敷い付くな付

くな乞食「そふ曰んせすと下んせ」後から男さいらを 北「ソリヤ四文錢だ乞「四文錢なら釣を三文くだんせ 彌「こいつ虫の好事を云ふ時に此」橋は字治橋と云ふのか 京「左様じやアレ見さんせ網で錢をよう請けてじや 北「ドレ」ト橋の上より見れば竹の先に網 京「彌次さん小錢があらばちつと貸さんせ」ト彌次郎が錢を借りて 京「ゑろふ面白いコレ北八さんお前もちと貸さんせソレ又投げるぞ／＼ハ、ハ、彌「コレ 京の人お前人の錢計り取つて投げるがチトお前の錢も投げなさい 京「好いわいな誰のでも錢に變りはないわいの 彌「其れだとして餘まりあだじけねえへ…… 京「ナニわしが此前參宮した時はな聞んせい 阿呆じやあつたわいなこゝで錢五貫か十貫投つたわいの餘り面にくい程よう受けおるさかい今度は網を破ると思つて丁銀投つたら根つからたわいなう網に止りくさつた不思議じやと思へや下に居る奴め

がソリヤ止る筈じやとぬかしくさる何故じやと云ふとハア網の目にかねとま
るじやとゑらふ私を問ましくさつたわいのハ、サアく行わいな〜』

なげ錢をあみにうけつゝ往來の

人を茶にする宇治ばしのもと

是より内宮二の鳥居より四ツ足御門さるかしらの御門を打過ぎ御本社にぬか
づきて奉る是天照皇太神にて神代よりの神鏡神劔をとつて鎮座
し玉ふ所なりと

日にましてひかり輝り添ふ宮ばしら

ふき入れ玉ふ伊勢の神風

此に朝日の宮豊の宮よりはじめて河供屋ふるどの宮、高の宮、土の宮、其外
末社悉く記すに違なし風の宮へかゝる道にみしすそ川と云ふあり

引ずりていく代かあとをたれ賜ふ

御衣裳川のながれひさしき

◎宿屋の珍談コリヤ御目出度い

凡て宮廻りのうちは自然と感涙肝に銘じて有難きに眞面目となりて洒落も
なくむだも言はぬ暫しの中に順拜終りて元の道に立出で頓て妙見間に返
り此所にて彼の上方ものと別れ彌次郎北八兩人のふ藤屋を晝立として外宮
に参る是れ即ち豊受太神宮なり天神七代の始め國常立の尊と申せし
御神なり神璽の宮、寶劔の宮、其外敬多の末社を拜み巡りて天の岩戸に登り
たるに彌次郎如何しけん切りに腹痛みてなやみたる故早々此所を立ち傍
らに休みて丸薬など用ひ兎角するに堪へ難ければ急ぎ廣小路に至り宿を借
らんとそこ此所を見廻すうち或る宿屋の亭主亭『モシ〜御泊りぢつおませ

んかい 北「アイ連れのもの少し虫がすこ越なるかそうだから宿やどを御頼おたのみ申ましやす
 亭「サアお入りなさんせ 女おんな「ようお着つきでおす 北「サア彌次やじさん上あんなせへ
 彌「アイタ、北「エ、穢きたれえ顔かほするお前まへコリヤ何なんぞの罰はらか當あたつたのだらう
 彌「何なににき罰はらを食くつた覺おぼえればねえ大方おほ今朝けさの飯めしがあつたのだらう 亭「お飯めし
 も上あり付つけなさらんとあたる事ことがおませうわいな 北「ア、コリヤいくぢのね
 えこつたサア、奥おくへ、彌「アイタ、北ト北八トに助たすけられて奥おく
 御難儀ごなんぎでおましょ 幸さいひ私所わたくしの妻つまが今月こんげつ臨月りんげつでおますが兎角さかくすぐれんで
 今いま醫い様さまをよびにさんじたが貴所あなたも見てお貰もらひなさんせんかいな 彌「それ
 は何卒どうぞお頼たのみ申ましやす 亭「かしこまりました 此ト時ト彌次ト郎ト苦トしみ
 醫者いしや様さまがお出いでになりました 此内此内醫者醫者 醫い病人びやうにんは何處どこに御座ござる 北「ハイ只ただ
 今いませつちんへ參まつてをりますコレ、彌次やじさん御醫者おいしや様さまが御座ござつた早く出でな

せへ、ト大聲ト雪隠トの中トから 彌「イヤまだ出でられぬお醫者いしや様さまを何卒どうぞこれへお
 出いで下くださりませ 北「エ、めつそうなお醫者いしや様さまがそこへ行ゆかれるものか無ぶ躰た事こと
 を云いふ 彌「そんなら今いま出いでる、と漸と々とせつちんより出いでれは醫者いしやは 醫「ハ、
 ア貴公きこうはコリヤ血ちの道みちぢやわいの兎角さかく臨月りんげつ月づきなどには起おこるものぢや 彌「イヤ
 私わしは孕おほんだ覺おぼえは御座ござりませぬ 醫「ナニ懷胎くわいたいでないハテめんようなイヤコ
 リヤ私わしが師匠しやうが悪い廣小路ひろこうぢの伊賀越屋いがこゑやからよびにおこした彼所あそこの病人びやうにんは
 産月うみづきぢやさかい大おほかた血ちの道みちが起おこつたぢやる其そのつもりで藥くすりをもるがよい
 と教をしへておこしたがそりや貴公きこうの事ことではなかつたわいな 北「左様さやうでござりま
 せう血ちの道みちは此家こゝの内儀ないぎのござりませう此この男をとこは其れではござりま
 せぬ 醫「左様さやうぢやコリヤ私わしが間違まちがひぢやわい而しかしなんなら貴様きさまも其れにして
 おかんすと藥くすりもるにも一所しよにして面倒めんどうで無なうて宜よろいがな 北「成程なるほどコリヤ御

醫者様のおつしやる通り彌次さんお前も血の道にして置くが宜いれえ彌次と
 んだ事を云ふ男に血の道があつて堪るものか醫「イヤ／＼外の病氣も面白
 かる一體貴様は何病ぢや……彌「私は先刻から虫が被つてなりませぬ
 醫「大方コリヤ腹の内て被るぢやるコレ／＼女中供のものに薬箱おこせ
 と云ふてくだんせ……女「ハイ／＼イヤモシお供の人は見えませんわ
 いな醫「見えん筈ぢや連れてこんさかい薬箱は私が持つて来たわいの』
 ト提て来た包を開 女「オ、お可笑や貴様は竹の七で煮豆もるようにしてぢア
 き薬を取り出す 女「オ、お可笑や貴様は竹の七で煮豆もるようにしてぢア
 わいな北「ハア聞えた敷醫者様だから竹の七をお使ひなさると見えるそして
 お薬は醫「煎じよう常の如く生薑一へぎお入れなさい 北「わさびでは悪う
 ござりますか 彌「馬鹿云ふな是れは有難う御座ります』ト比内何やら騒がし
 へ亭主の 亭「コリヤ／＼お鍋やい早う取りあげ婆様へ人をやれソレ久介は湯

を沸せ』と騒ぎ立つ内此方も彌 彌「アイタ、北「彌次さん如何ぢや／＼
 醫「コリヤ堪らん／＼病人の脇には居られぬ』ト早々逃げて行く勝手の方
 布團がぶりて寝て居る所へ連れてくるとり上げ婆あ 産婆「是はしたり寝て居
 さんしてはならんわいのサア／＼起きさんせ／＼』ト彌次郎をひき起 彌「ア
 イタ、産婆「辛抱さんせコレ／＼其所な人菰は何うぢやいな 彌「アイタ、
 、産婆「底ぢや／＼』ト此婆もうろたへ者にて其上眼が悪い 産婆「サア／＼
 皆来さんせんかいなコレ／＼此所へ来て誰ぞ腰を抱てくんなせい早く／＼』
 トせき立るに北八あきれをかしくコリヤ何うしなる 彌「コリヤ北八何うする
 かと知らん顔してトボケて彌次郎の腰をひき立る 彌「コリヤ北八何うする
 ア、痛い／＼産婆「其様に氣が弱くてはならんわいグット力味しんせ／＼
 彌「此所では堪るものか雪隠へ行ってえ放した／＼産婆「今大事だ行
 つてはならんわいの 彌「其れでも』ト所で力味ば此所へ出るウン／＼そりやこ

そ最う頭が出掛けたく、アイタ、それをそんなに引張りしやんなア、コレ痛い、トもがくをかまはす婆々
 産婆「此の血ちがひは」早女房安産と見へて赤子の最中勝手の方に
 やこそ生れたイヤ此所ぢやない何處ぢやいな
 勝手より飛 亭「コレ」婆様 先刻から尋ねて居るのに最う生れたわいの早
 うく、ト婆アを引立て行く 産婆「目出度い」三國一の玉の様な男の子
 が生れたト悦の聲と共に亭 亭「コレハ御客様お八釜奴ござりましたらう
 先私妻も安産致しました」ト云ふ内彌次郎 彌「さて」御目出度い私も
 今雪隠で思ひ入れ安産したら忘れたように心よくなりました亭「其れは
 貴郎もお目出度北」お互に目出たい」と是れより欣びの酒くみ交し
 取上げ婆の間違ひやら何やら彼やら話合ひて大笑ひとなりけるは目出度き

事にぞありける

◎淀川の船中

諺に云ふ旅の耻は書捨て、行く落書の國所は欄干に止まり自づから往來
 同國の人々の目を慰め被り行驛の笠印は態と己れ一人の心を悦ばし
 むるも皆共に驛路のわざくれ相宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外二方くほう
 神の隣り同士は長家の附合ひの外にして其心くに出づる儘をしやべり飽
 迄に喰ひ掛取り道連れにせざれば三十日の愁ひにあはす米櫃負うて出でざ
 れば嵐追ふせわもなく名にしおふ東男も薩摩芋に髭を撫で花まだき京女
 郎も團子のくしに頭をかき知ぬ火のつくすたわけに駈落して走るあれば雲
 井路の道草食ふ遊山旅のゝろつくあり並松の根に腰打掛けて金毘羅参りの樽
 をひらき街道の真中にひよくり出して諸社順拜の鈴口をふる羈中の光景